
影山部長の数学講座

YSR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影山部長の数学講座

【Nコード】

N5765E

【作者名】

YSR

【あらすじ】

セカンド・インパクトから17年。彼らは、中学を卒業し、北上高校へと進学した。使徒からの攻撃によって受けた心の傷は、地道なカウンセリングにより癒え、ごく普通の生活が送れるほどに回復した。しかし、戦いのことを完全に忘れられる訳が無く、まだ記憶にとどめたままである。最後の使徒出現から二年間、不思議なことに、使徒の出現がぶつとりと途絶えた。その間に街は完全に復興し、平穏な日々に戻った。この話は、彼らの、学園生活の記録である・・・。

プロローグ 影山家

プロローグ 影山家

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

一

ここは由緒正しき影山家^{かげやま}。これまで、影山家は、平穏な日々を送っていた・・・しかし。そこにお家騒動が勃発した。

影山家では代々、総統の子供が次代総統の座を賭けて争い、勝者が新たな総統となるという伝統があった。それにより、強き者のみが本家として影山家を守り、敗れた者は分家となつて本家を支えるという、厳しき歴史があつたのだ。

そして今回。第十七代総統となるための戦いが始まった。第十六代^{とし}総統影山等の子供、影山学^{まなぶ}・進^{すすむ}・遥香^{はるか}の三人が、その候補者たちである。しかし、争いの方法は自由。その子供たちが相談して決めなくてはならないのが影山家の掟。もちろん子供といつても事は重大。真剣に戦うであろう。そういうわけである。だが・・・。

三月中旬。兄妹三人は、考え込んでいた。

「はあ、どうしたらいいのかしら」

長女遥香が、深いため息をついた。

「兄さん。今回はどう決める？」

次男進が、長男である学に訊いた。すると。

「どう決める、か。なかなか難しい問題であるな」

学はそう考え込んだ。当然である。なにせ、人生がかかっているのであるのだから。

「前の方法を踏襲するってのはどう？ 確か、『最もよく飛ぶ紙飛行

機を開発する』だったような・・・」

「『紙』という字は無かったぞ。無駄に簡単にするな」

遥香の提案に進はちゃちゃを入れた。

「大体、前の方法を踏襲、などとは出来ない決まりだ。忘れたのか」
学がとどめを刺した。これで踏襲案は無し。思考は、振り出しに戻った。

「大体、いい方法なんて閃かないわよ。ちょうどいいのはもう既にやっているし。散々だわ」

思考してからまだ四時間である。やる気の出ないことに関しては氣力が無くなる遥香である。

「まあまあ落ち着け、妹よ。時間はたっぷりとある。我らが全員十六歳になってから三日間だぞ、十分ではないか」

ふて腐れた遥香を宥める学。

「そうね・・・何か思いつけば・・・はっ」

「何に気がついたのだ」

「違うのよ・・・閃いたのよ・・・新しい方法を・・・」

「本当か、遥香」

進が驚く。

「どのような方法なのだ」

「それは・・・人任せよ」

「なに!？」

学・進、二人同時に驚愕した。

「どういうことだ!？」

驚く二人に、遥香はこんこんと説明した・・・。

「いい?今まで影山家では、物の開発とか、会社経営とか、とにかく大きいことが多かった訳よ。でも、良く考えてみて。物だろうと会社だろうと、結局それを動かすのは人間。でも、今までの方法に、『人間』を対象としてきたものはなかった」
「たしかに・・・」

二人は、素直に納得した。

「でしょ。だから今回は、『人間』を対象にする方法で争えばいいのよ」

「しかし・・・、一体どうするのだ？」

学が訊いた。すると、遥香は驚くべき提案を持ち出してきた！

「簡単よ。人の人生を、その対象にするのよ」

二

「人の人生だと！？笑わせる。そんなもの、どうやってコントロールするというのだ。金をばら撒けとも言うのか」

学は笑った。しかし進は、冷静に反論した。

「兄さん。そんなことしなくても、ヒトというものは簡単に変わるものですよ。そうだろう、妹よ」

「さすが進兄さん、話が合うわね。その通りよ。ヒトなんて所詮、周りの環境でころころと変わるものよ。で、よ。金なんかばら撒いたって何も面白くない。やっぱりここはロマンチックでなくっちゃ」

「ロマンチック？どういうことだ？」

学が訊く。

「いや、だから、恋とか・・・」

遥香がこう答えたとき、またしても学は笑った。

「馬鹿を言え。恋だと！？あんな、すぐに離れたり繋がったりするマジックテープのような物が！？」

「学兄さんは笑ってばかりね！確かに学兄さんは全く興味の無いことかも知れないけど、私はあるのよ！」

不毛な言い争いになりそうなとき、進がそれを止めた。

「まあ二人とも待て。・・・つまり、結局どうやって争うのかね？適当な人物を的にしたとしても、我らは三兄弟でも三姉妹でもないのだぞ」

当然の疑問である。しかし。

「そんなの簡単じゃない。兄さんたちは、適当な人を使えばいいんじゃないの」

本当に簡単である。だが、二人はそれに異議を唱えた。

「『兄さんたち』？待て。私と弟に、女を誘導してくっつけさせろと（１）？それは無茶なのでは？」

「そもそも、遥香が適当な男を誘導すればよいではないか。それとも、既にターゲットが決まっている、とでも言うのかね？」

進の質問に、遥香は即答した。

「ええ」

「『ええ』？その通りだと？少し待て。それはどのような者かね？」
由緒正しき家柄だけに、エリート意識があるのである。

「この人・・・」

遥香が、少し頬を赤らめながら、近くの中学校で盗撮してきた写真を見せた。

「この方です・・・」

「名は・・・って、よく見ると、制服に名前が書いてあるな・・・
『碇』？」

進が写真を見ながらそうつぶやいた時、学が思い出したように叫んだ。

「『碇』！？『碇』だと！？」

「知っているの、学兄さん！？」

「知っているも何も、そいつの父親は、あの組織の司令官だぞ！」

「え、えええ！？」

「この日本国が、アメリカ相手に強気でいられるのは、彼あつてのものだ」

つまり、遥香が恋した「碇」青年は、全然（彼らから見ても）一般人では無いのである。むしろ、親密にしておくべき人材なのである。「なるほど・・・彼は一人っ子がいると言っていたそうだし、間違いないだろう・・・」

進が静かに頷いた。

ブログ 影山家（後書き）

はじめの投稿作です。

まだまだ未熟ですが、よろしく願います。

第一話 新学期

第一話 新学期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

セカンド・インパクトから17年。

彼らは、中学を卒業し、北上高校へと進学した。

使徒からの攻撃によって受けた心の傷は、地道なカウンセリングにより癒え、ごく普通の生活が送れるほどに回復した。

しかし、戦いのことを完全に忘れられる訳が無く、まだ記憶にとどめたままである。

最後の使徒出現から二年間、不思議なことに、使徒の出現がぶつ
つりと途絶えた。

その間に街は完全に復興し、平穏な日々に戻った。

この話は、彼らの、学園生活の記録である……。

「あー、よく寝た」

午前七時。僕は、久しぶりに清々しい朝を迎えた。気持ちいいなあ。

この日は、入学式。久しぶりに、学校へ行く。

涙涙の卒業式が終わってはや二週間。春休み、もう終わったのか・
・。僕が、朝食を食べながら感慨に浸っていた時。

アスカが、やんわりと突っ込んだ。

「なにぼーっとしてんのよ。早くしないと学校に遅れるじゃない」
ううむ。言われたからには仕方が無い。感慨に浸るのを止め、普

通にご飯を食べだした。

葛城さんは今日もない。朝早く、仕事に出かけたみたいだ。もっとも、二年間も使徒とかがこないとさすがにつまらないらしく、一昨日も、ビール片手に仕事の愚痴をずーっと喋っていた。まあもちろん、使徒がでてこないほうがよっぽど平和であるからいいのだが。

そう考えながら僕は、アス力と一緒に家から出た。
登校途中。

「誰と同じクラスになるか、楽しみだなあ」

僕は、そう呟いた。すると、アス力に、

「アンタ、何度も同じこと言っていない？」

と、突っ込まれた。

アス力よ。たしかに、僕は春休み中、同じようなことを何回もいったような気がする。でも。

「別にいいじゃないか、楽しみにしても」

「そりゃそうだけど、楽しみにしたって、楽しいことなんてどうせ起こらないじゃないの」

まあねえ。確かに、誕生日会とは違って、特別に楽しいことが起こるわけではない。

「でも、やっぱり、楽しくなるもんじゃないですかあ、この日は！」

「・・・テンション高いわねえ、アンタ」

そういう言葉の掛け合いをしていたとき、ふっ、と何かが頭に浮かんだ。

「ところでさあ」

「何？」

「このまま、一生使徒が現れなければ、いいなあ」

「・・・そうねえ」

使徒が現れなければ、少なくとも日本は平和である。でも、そればかりじゃない。仕事の量が減るせいか、時々父さんが帰ってきてくれるのだ。そのことが、僕にとっては一番嬉しかった。

そういうことを考えながら、僕らは学校に向かった。

学校に着いた。

すると、目の前に、小太りで横長い眼鏡をしている人がいた。制服と校章から判断して、同じこの高校の新入生らしい。

そう考えていたその時。突然、その人が不気味に笑い出した。

「ふっふっふ・・・」

「!？」

僕とアスカは同時に驚いた。

「・・・だ、誰？」

「私かね」

「いや、それ以外に何があるんですか・・・」

「そうだな。私は、ここの新入生の影山だ。よろしく」

「よ、よろしく」

「ところで、君もこの新入生かね」

「ええ、そうですか・・・」

「これからよろしくな、碓シンジ君」

「な、なななんで、僕の名前を知っているの!？」

「そんなことはどうでもいいだろう。集合時間が迫っているぞ、さ

あ行け！」

「あわわわ・・・」

僕達は足早に、校舎へと向かった。

二

学校の掲示板前に着いた。そこで、掲示板に掲示されている組分け表を眺めた。

「えーと僕は・・・」

「アンタは1年2組よ。私と一緒に」

私と？あつ、そうだ。彼女の名前もそこにある。帰国子女でミド

ルネーム付だからそこだけ欄が広くなると思っていたが、掲示名は「惣龍アスカ」で止まっている。どうやら、都合上略したらしい。さて、同じクラスの人は・・・と見てみると、あれ？

「なんだか、一昨年（中学校）のクラスと同じようなクラス編成だなあ」

「そうねえ。なんとなく同じね」

一昨年。あの年のことはよく覚えている。あの頃のことは、やはり脳に深く刻み込まれているのか。

実際、数えて見ると、4割は同じメンバーである。まあ、もちろんこれは偶然に決まっているだろう。だが、なかなか気になるものである。そうして見てみると、意外な人物の名前が書いてあった。

『影山学』

「・・・え？」

見間違いではない。影山って、なんか聞いたことが・・・。

「おめでとう、碇君」

「うわっ！・・・驚いた」

この私と同じクラスになったことを誇りに思いたまえ」

「思いません。むしろ迷惑です」

「そう言っな。数学とパソコンのことならなんでも私に聞いてくれる的確な答えを出してあげよう」

「・・・そうですか。ありがとうございます」

数学はちと苦手だったので、ラッキーである。だが、喜んでいると、例によつてあの人が口を出してきた。

「あーら。じゃあ、私にも勝てるって言うの？」

「当然だとも。・・・では、 $\tan(x)$ を x で不定積分すると？」

「 $-\log|\cos(x)| + C$ ——は絶対値、 C は積分定数」
よ

せ、セキブン？

「（ふっ、流石だな）では、どんな一次関数 $f(x)$ にでも、『関数 $f(x) \cdot g(x)$ の0から1までの定積分』が常に0となる二次

関数 $g(x)$ は？」

「うつ・・・えつと・・・」

「この程度の問題がすぐに出来ないのかね。答は $g(x) = 6x^2 - 6x + 1$ だ。まだまだだな、惣流・アスカ・ラングレー君」

「くっ・・・て、なんで私の名前も知ってるの!？」

「そんなこと、数学には何の関係も無いではないか。・・・もうそろそろ、入学式だぞ、急げ！」

「ええっ!？」

僕は、納得がいかないまま、体育館に向かった。

入学式を終え、教室。初めは、名前順に並ぶ。待っていると、担任の先生が入ってきた。

「おはよう。私が、このクラスの担任となった西島透だ。にしじまとあめ一年間、君たちを受け持つことになる。よろしく」

皆、一礼する。

そして、自己紹介もそこそこに、先生がいきなりこう言い出した。

「えー、早いと思うが、早速これから、このクラスの席替えをする・・・それが、この学校の決まりだからな」

は、早っ！席替え早！

たまげた僕だが、驚いているのは僕だけらしい。当然という顔で先生を見ている。

隣の子に聞いてみた。

「あの・・・なんで、いきなり席替えなのに驚かないの？」

すると、驚くべき答が返ってきた。

「決まってるじゃない。ほら、生徒手帳にそう書いてあるでしょ」
「せ・・・生徒手帳？僕は驚いて、急いで自分の手帳を取り出して捲ってみた。するとそこには、『席替えは、入学式の日、毎月第一月曜日、転校生が来た日に行われる』と書かれているではないか!・・・恐ろしい手帳だ。」

それを気にせず周りを見渡すと、クラスの男子が色めいていた。

まあ、そりやそうだよなあ。自他共に認めるアイドル（アスカ）が一人、ここにいるのだから。本人も悪い顔ではなさそうだ。まあ、自意識過剰なんだから当然か。

その時。影山君から次の一言が飛び出す。

「ふつ、愚かな。所詮ランダムに決めるのだから、手を合わせても意味がないだろうか」

確かに、信仰心も無いのに、手を合わせたり組んだりして必死に念じる輩ばかりである。

まあとにかくクジが引かれ、座るべき席が決まった。とりあえず、アイドルの隣には女子である。男どもからはため息が漏れた。まあ、そのほうが世の中平和なのだが。

そしてこの日から、我が1年2組が始まった。

三

このあとは、色々なことがあった。

まず。毎度おなじみのアスカに対するラブレター攻勢である。・もちろん、アスカがそんなもので心が動くはずなど無く、彼女の足によって粉碎される。全く、資源の無駄遣いである。

だが、わが2組だけは、すぐに性格が知れたのか、そんなヤツがいないらしい。うんうん、紙を無駄にしないだけよっぽどエコである。

次に。影山君は、やはり凄い。難しそうな問題を一瞬で解いたり、不調だった職員室のパソコンをあっという間に直したり、「数学とパソコン」と言うだけのことはある。

他にも、鈴原と相田が人物写真を売り出したりして、中々好評だそうだ。

二日後。この日、体育館で部活紹介があった。サッカー、野球、テニス、……。様々なクラブが部活紹介をしている。

しかし。僕は、体が弱い、あまり運動系のクラブには興味がなかった。

そこで、僕は、文科系に照準を絞った。しかし、中々「これだっ」と言っのが見つからない。

・・・そして。パソコン部の発表の番になった。

投影用の幕が下ろされた。そしてそれに、パソコン部のプレゼンテーションが映し出された。

お、おおおお！凄いいではないか。分かりやすい上に動画や音声も鳴る。皆の目は、画面に釘付けとなっていた。

かくして僕は、パソコン部の見学に行くことにしたのだった。

パソコン部。勿論、パソコンルームである。

「パソコン部の見学に来ましたあ」と。

「ふっ。私が、部長の影山だ。よろしく」

え、影山！？ま、まさか。

「ええ、部長！？君、同じクラスだよな？なんで！？」

僕は驚愕した。なにせ一年である。それなのに何故部長？

すると影山君は、オソルベキことを口にした！

「なんで？決まっているではないか。パソコンの知識で、私が圧倒的に勝って（まさって）いるからだ」

なんとということか。見ると、周りの上級生たちがコクンと頷いている。うーん、シヨックでしょうなあ。上級生を哀れんでいると、

影山君が、

「君もここに入るんだろ？」

と勧められた。

「いや、別に決めたわけじゃ・・・。他にも見に行くところだつてあるし・・・」

本当は特に無かったのだが、すぐに決めたのでは危険だと思ったのだ。そう言つと、

「ふつ、ここに入ると、パソコンが上手くなって就職などに有利になるぞ」

・・・現実的である。

「まあ、そうだろうなあ」

「分かってくれたかね。ならば、決まっておろう?」

「は、はあ・・・」

「どうせあまり見るところもなかるう」

なんで知っているの?僕は戸惑ったが、やはり凄い人だな、と僕は思った。

「ま、まあ、ないですね・・・」

「おや?さっきと言っていたことが違うではないか」
ぎく!

「そ、そうですか?」

「まあよい。ないのなら、やはり入っておくべきだな。損は無いぞ」

「まあ、そうですね・・・」

強引である。だが、ついパソコン部に入ってしまった。ダメだなあ、僕。

「あつ、そうそう」

「なんですか?」

「これからは、私のことを『部長』と呼んでくれ」

「え・・・、なぜですか?」

「別に良いであろう。現に部長であるしな」

「まあ、別にいいけど・・・」

そうして僕は、パソコン部に入ることになったのだった。

四

数日後。僕は、今まで経験したことの無いほど悩んでいた。

「・・・どうしよう・・・」

「一体何がよ、そんなに深刻に悩んで」

「いや、パソコン部に入っただけいいんだけど、プログラミングが難しいんだよ・・・」

「仕方ないじゃない。パソコン部なんだから」

「そ、そういうもののなの？」

「当然じゃない。そうじゃなきゃ、何のためのパソコン部なの？」

「・・・」

そういう物なのだろうか。パソコン部というものは。

こんなことなら、パソコン部なんか入らなきゃ良かったと、僕は、深く後悔したのだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

注釈：

小説中の問題は、たまたまあつた参考書に記載されていた問題を掲載しました。ちと古い本ですが、チャート式なので使えるんですよ。
これが。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

第二話 転校生

第二話 転校生

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

—

四月下旬。

いつものように学校に來ると、なんだか皆の様子がおかしかった。氣になったので、その中の鈴原に聞いてみた。

「・・・どうしたの？」

「何がや」

「なんか、皆の様子がおかしい氣がするんだけど・・・」

「『おかしい』やて！？・・・なんや、まだ知らんのか」

「えっ、何を？」

「この学校に転校生が來る、という話や」

「て・・・転校生？」

初耳である。

「ふーん・・・」

「『ふーん』って・・・。ほんま興味持たん奴やななあ」

「いや、興味って・・・どんな人なの？」

「せやな・・・噂によると、かなりの美少女らしいで」

「び、美少女？」

本当かな、と思いつつ、僕は、その「転校生」に少しだけ期待した。

すると、横から部長が突っ込みを入れてきた。

「そつとも限らん。所詮噂だ。信用できぬな」

「『信用できない』ねえ・・・」

「よくあるものなのだよ。『話に尾鰭が付く』ということは。例えば大地震の後とかは・・・」

部長が話を続けようとした時、鈴原が止めに入った。

「ちょ、ちょい待ち。たかが噂やる。100%マジの話やあれへんのやから、別にどう膨らませておかまへんやんか。せやる？」

「まあな・・・ま、所詮噂だがな」

「そうですね・・・」

部長は噂嫌いである。僕と鈴原は、そう強く感じた。

そして、二日後。転校生が、本当に来た。

「今日このクラスに、転校生が来ることになった。紹介する。・・・入ってきていいぞ」

西島先生はそう言って、転校生を出迎えた。

ドアが開けられ、その転校生が入ってきた。

その姿に、皆が驚いた。

ストレートの長い黒髪。整って綺麗な顔。そして、すらっとしたプロポーション。

「おおおお！」

まさに、噂以上の美少女であった。

その少女が、教卓の横まで来た後、柔らかな声で挨拶をした。

「今日、この北上高校に転入することになりました、木村洋子です。これから、よろしくお願いします」

決まった。この瞬間、このクラスの男子の視線が彼女に集中する。転校という環境の変化と熱視線のせい、彼女はとても緊張していた。

その緊張も、次の西島先生の一言で一気に取れることになった。

「よし、これから、席替えをする！」

「・・・え？」

教室内の全ての生徒の目が点となった。・・・しかし、生徒手帳を見て納得したらしい。

部長と僕を除く全ての男子は、『隣に來い』と、必死に念じていた。僕の場合、念じようとしたらアス力に睨まれたからしなかったただけだ。

そして、クジが引かれた。入学式の時よりもっと真剣な男子の表情に、露骨に不快感を示したアス力であった。

僕の番が来た。ここで念じてもあまり意味なさそうだと思ったので、あまり考えずにひよいと引いた。

でも、そういう人にクジの女神は微笑むらしい。

クジの結果通りに机を動かした時、事件が起きた。

「えー、僕の席は、と・・・」

そう考えながら席を動かす。そうしていくと・・・隣の席が空いた。

「・・・あれ？」

僕がそう思ったときに先生は、「よいしょつと」と言いながら新しい机をそこに置いた。

まさか。その予感的中した。

「はい。木村さんはそこに座ってね」

「はい」

そう彼女が告げた瞬間、クラス内の男子はどよめいた。しかし、この事実が蔽として変わらない。

「あの・・・、『碇』さん、ですか？」

「は、はい・・・」

さつきは教卓のところだからまだいいが、今は隣。緊張しまくっている。

「では碇さん、よろしく願いますね」

「こつ、こちらこそ・・・」

まさに棚からぼた餅、青天の霹靂。オソルベキ幸運である（）。こうして僕は、幸運を手に入れたが、同時に、教室内の全ての男子を敵に回すこととなった。

それから、この学校は大きく変わっていった。

まず、『ラブレター雪崩』の対象が変わった。蓋を開けるとあふれ出す手紙を、彼女は踏みつけたりせず、拾って読む（！）。なかなか律儀な人だ。

次に、一部のクラブの雰囲気が変わった。彼女は、弓道部と華道部を掛け持ち（！）しているにも関わらず、見事に両立しているそう、そのせいで、他のメンバーも彼女に負けまいと頑張っているそう。

そして・・・なぜか、急に暗くなった男子が増えた。

気がついたのは、彼女が転校してきてから一週間が過ぎたことであつた。よく見ると、クラスの男子の数人が、ため息をついている。

理由を聞いてみた。

「・・・ねえ、○○君」

「なんだい・・・長い質問は止めてくれ」

「一体どうしたの？そんな暗い顔して・・・」

すると、彼は、意味深な言葉を僕に語った。

「君には、分からないだろうな・・・」

「・・・どういう意味？」

「あの人の隣にいたらさ・・・」

「？」

なんだろう。「君には分からない」とは。それこそ、さっぱり分からない。

疑問を抱えたまま、授業も終わり、放課後。クラブで部長は、ずっと不機嫌だった。

「あのく、部長？」

「・・・何かね？」

「な、なんだか、不機嫌そうですね・・・」

そう僕が聞いたとき、部長はいきなり立ち上がって叫んだ。

「そりゃそうだ！失意の念で作業をしないヤツが三人もいれば、不機嫌にもなるわ！」

「うつ・・・そうですね・・・」

見ると、パソ部の中の三人が、口を開けたままぼーっと座っている。作業をしている雰囲気は全く無い。

「しかも、その理由がそろいも揃って・・・」

「そろいも揃って・・・ちょっと待ってください、それって、

『僕の隣の人』に関係ありませんか？」

「ん？カンがいいな。その通りだよ。全ては、あの転校生のせいだ・・・」

三

「あの転校生・・・これから木村と言うが・・・、あの三人がぼーっとしているのは、絶対に木村のせいだと私は見ている」

「そうなんですか・・・でも、なぜそこまで自信が？」

「決まっているだろう。三人に聞いたただしたんだ。正直に喋ってくれたよ」

「へえ・・・よく聞いたでしたね・・・」

「部長だからな・・・で、聞いた理由というのが・・・」

部長によると、あの三人は、木村さん（普段から彼女のことをそう呼んでいる）になんと告白されたらしい。

「それはいいことじゃないですか（信じられないけど・・・）。なんであんなのですか？」

「・・・あのなあ、考えてみる。『三人とも』だぞ！つまり、毎回フツているんだ！」

「！..」

そういえばそうだ。なんであれ、三人とも悲しんでいるというこ

とは、そういうことになる。

「三人によると、なんとか理由をつけてふるんだそうだ。『部屋が汚い』とか『物の食べ方が悪い』とか・・・」

「ちょっと待ってください・・・そんなことでフツているんですか！？」

「その通りだそうだ」

「・・・なんでそんなことを？」

「『なんで』？・・・そうだ。そこが、問題なんだ」
「・・・」

「私が思うに、・・・恐らく木村は、その、「その気にさせておいてふる」ということを楽しみにしているのではないのか、と思う」
「ふっ・・・ふることに楽しみ！？そ、そんなことするんですか！？」

「あくまでも仮定だが・・・だが、多分その通りだろう」
「・・・」

その後、僕は黙っていた。そんなことはとても信じたくないが、彼ら三人を見ている限り、そうだと思わざるをえなかった。僕は、とても悲しかった。

四

そのころ木村は、自分の部屋の中で考えていた。

「はあ・・・、これからどうしようかしら・・・」

特に冴えないヤツ数人は既に楽しんだ。告ったときのあの喜びよう。そして、フツた時のあの落ち込みよう。あの落差がたまらない・・・しかし。さすがに飽きた。もうちつと別のタイプ、いらないかなあ。・・・そうだ！

あの人だ。気の弱そうなあの人。あの人にだったら、なかなか面白い顔が見れるはず！

木村は、ほくそ笑んだ。

部長から話を聞いた次の日。

「ん？」

僕は、机の中に、一つの見慣れない茶封筒を見つけた。

「・・・なんだこれ？」

封筒を取り出して眺めていると、隣の木村さんが聞いてきた。

「どうしましたの、その封筒？」

彼女のお嬢様言葉はいつものことだ。初めはエラく丁寧だな、と思っていたが、今となってはもう慣れた。

「さあ・・・、いつの間にか机に入っていたんだ」

「そうですの・・・で、何と？」

「いや・・・何が？」

「その・・・中身を・・・」

このヒト、見かけによらず、そういうのが気になるタチのようである。

「何なんですか・・・ええと、・・・あああ!？」

その中には、次のような言葉が書かれていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

前略

今日の放課後、裏庭の杉の木下にきて下さい

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「こ、これは・・・」

「まさか・・・だね・・・」

どこからどう見ても、「それ」ではないか。人生初、である。

「よ・・・よかったですね!」

「そ、そだね・・・ははは・・・」

とりあえず喜んでいたが、実は、見当はついていた。あの人に違いない。そう考えると、素直に喜べないのだった。

放課後。見当はついているのであまり来たくは無かったのだが、仕方が無い。言うべきことは、はっきり言わなくてはいけない。そんな覚悟を持って、僕は裏庭まで来た。

予想通り、そこには木村さんが木のそばで立っていた。やはり、待っているようである。

僕は、彼女に声を掛けた。

「あの・・・、来たんですね・・・」

すると彼女は、こう返した。

「・・・待っていました」

本来ならドキドキする場面だが、部長の話のせいで、冷めて見える。何人もの男をこうして、罾に掛けてきたのだ。

そう考えながら見ていると、やはり、相手のほうから切り出してきた。

「じ、実は私・・・あなたのことが・・・」

彼女がそこまで言いかけたとき、僕は彼女の肩に手をやり、こう制した。

「もういいよ」

「！」

そんなことをされるのは初めてだったのだろう。驚いた顔をしていた。

「・・・パソコン部の部長から聞いたんだ。君が、実はとても『悲しいこと』をしている人だって」

「・・・」

「折角いい人だと思っていたけど、違ったようだね。僕は、とても悲しく思う」

「・・・」

「だから、僕は・・・」

「別にいいじゃないですよ」

「えっ？」

「気に入ったから告白した、気に入らなかったからフツた、ただそれだけのことじゃないですの！それなのになぜ、そんなに責められなければならないのですか！」

「『ただそれだけのこと』・・・ですか？本当にそれだけのことなんでしょうか！？」

「・・・」

「あなたのそんな未勝手な理由で、一部の男子が深い悲しみに沈んでいるのが分からないのですか！ひどく傷つけているのが分からないのですか！」

「うつ・・・」

「お願いですから、謝って下さい。その一部の男子に、謝って下さい。そして、もう二度と、こんな悲しいことは、しないでください・・・お願いします」

そう言つて僕は、彼女の手を取つて、その一部の男子の元に彼女を連れて行くとした。しかし、彼女は動こうとしない。

僕は、もう一度言つた。

「・・・お願いします」

そう言つと彼女は、

「・・・分かりました」

と答えた。

五

その後、一部の男子（パソコン部の三人）の元に、彼女を連れて行った。

「・・・ごめんなさい」

きちんと、彼女は謝ってくれた。

彼女や三人に配慮して、このことは公にしないことで話がついた。それが最善であろう。

そうして僕は、複雑な思いを抱えながら、帰路についた。

彼女は帰る途中、考えていた。

（あの人は、最低だった私を、きちんと叱ってくださった・・・）
いままで、そんな風に叱られたことなど無かったので、これは堪えた。

そうして、彼女はだんだんこう感じるようになった。

（あの人は、なんだか格好良い・・・）
と。

- - -
- - -
- - -

注釈：

・・・こんな漫画的だと、笑う人もいるかもしれない。だが。
相手が美人かはともかく、転校生がたまたま隣に座る確率は、クラス内の全ての人に平等である。たまたま相手が美人だったからこそ、「オソルベキ幸運」であることを忘れないで欲しい。

- - -
- - -
- - -

第三話 現実漫画よりも奇なり

—

あの日から数日後。僕は、いつものように登校し、靴箱の蓋を開けた。

すると。

「・・・なにこれ？」

中に、なにやら手紙が入っている。どれどれ・・・。

表面には何も書かれていない。匿名、と言うことか。

早速中身を開ける。すると僕は、思わず「ウツ」と唸った。

文体が、「あの人」そのものである。

一体何が・・・と思いながら、僕は、その手紙を読んだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

前略

今日の放課後、裏庭の杉の木下にきて下さい

- - - - -
- - - - -
- - - - -

・・・。

あの手紙と全く同じだ。しかし、一体何をするつもりだろう。

あの時の反省した様子から見て、復讐では多分無い。しかし、それ以外には何も思いつかなかった。

僕は、そのことを考えながら、教室へと向かった。

放課後。別に行かなくてもいいのだが、なぜか足がそちらへ向かってしまう。不思議なものだ。

そう感じながら裏庭に行くと、あの人、あの時と全く同じ場所

で、同じように立っていた。

なにがしら不安を覚えた僕は、そうつと立ち去ろうとした。
その時。

「あつ。ちよつと待って下さい!」

・・・引き止められた。そのまま立ち去ろうとすると、彼女にいきなり首元を掴まれ、こう囁かれた。

「あの、少し話を聞いてもらえませんか?」

「・・・話?」

「そうです。すぐ終わりますんで」

どうやら復讐では無いらしい。どうせ予定も無いので、聞くだけ聞いてみようと考えた。

二

「前、私はあなたに、『私・・・あなたのことが・・・』と言いましたよね」

「そう言えば、そう言ったような・・・」

「そのことなんですが・・・」

「あ、もういいよ」

「えっ?」

「だって、謝ろうとしてるんでしょ、僕に」

なにせ、あのときの彼女の発言は、「自分が楽しむための『告白』」

「なのだ。普通そう思うだろう。・・・だが、次の彼女の発言は、

その想像を遥かに超えていた。

「ち、違います!」

「じゃあ何なの?」

「実はあの言葉・・・本当になつたんです」

え? 一体どういう・・・あああ!

「・・・えええええ!?!」

そう叫んでからはしばらく固まっていたが、ふと、疑問が浮かん

だ。

「・・・って、ちょっと待ってよ。一体なんで？」

それを聞いて彼女は、少し間を空けてから答えた。

「・・・それは、あなたが私を叱ってくださいましたからです」

「は？」

「私がしていたこと・・・それを知った男の方は、皆怒ってばかりでした。勿論、あのようなことをしていたからに他なりません・・・でもあなたは、そんな私を怒るのではなく叱ってくださいました。そのことに私は深く感動したのです」

そんなに深く考えて叱ってないんだけど・・・などとは、この際言わないことにした。

「で・・・どうなのですか？」

「な・・・何が？」

「決まっているじゃないですか。お受けしてくださいるか、と言うことですよ」

「ち・・・ちょっと待ってよ。やっぱりこう、心の準備とかがさ・・・」

「つまり、どのように付き合えばよいのかがよく分からないとか、友達やクラスの皆に知られたくないとか、スケジュールにそんなに余裕があるわけではないとかと言うわけですね？」

「そ、そうだけど・・・」

・・・よく分かっているではないか、この人は。

「それでは分かりました。ささやかながらでも私なりの気持ちを伝えていきたいと思います」

「わ・・・私なりの？」

「楽しみにしておいてくださいねっ」

僕の質問に答えず、木村さんは僕の前から立ち去ってしまった。

「一体・・・何を・・・」

三

次の日。四時限目の終了のチャイムが鳴り、昼食の時間。

いつものようにアスカに弁当を渡し、自分用の弁当を食べようとした・・・その時。

横に、木村さんが立っていた。

「・・・どうしたの？」

「あの・・・これ・・・」

彼女の手には、直方体の箱を正方形上の布で包んだ”もの”が握られていた。

「・・・交換？」

「はい！」

これが彼女の「私なりの気持ち」なのだろう。少しドキドキしながら、その”もの”を交換した。

そしてその”もの”の包みを解くと、そこには、漆塗りの立派な重箱が入っていた。

「・・・！？」

なにせ漆である。驚いて彼女のほうを向くと、彼女はただ会釈するだけだった。どうやら裕福な家庭らしい。

蓋を開けるとそこには、立派なおかずと御飯（銀シャリ）が。早速一口。・・・美味い！

こんなにおいしい弁当を今まで食べたことは無い。自分が作った弁当との味の差に少しショックを受けたが、これは凄い。

不安を覚えながら彼女のほうを見ると、彼女も美味しそうに食べている。良かった・・・。

食べ終わった後、それぞれの箱と風呂敷と箸（箱に付属）を交換しなおした。

「とても美味しかったよ」

「あ・・・ありがとうございます。力を込めて作った甲斐がありま

した」

「そう・・・でも次からは、さすがに漆塗りの重箱とか派手なものはちょっと・・・ね」

「あ・・・はい、今度からはそうします」

四

それから。彼女との”もの”の交換は毎日続いている。他の男子達の視線があまりに痛い、美味しい弁当のためなら我慢する。まあ正直、自分の作った弁当よりよっぽど美味しいのは、微妙な心境になるのだが。

第三話 現実は漫画よりも奇なり（後書き）

すいません（汗）

ぐうたらな性格が祟って（正直に言っちゃった・・・）、長らく投稿し忘れていました。ごめんなさい。

第四話 凡人は豹変す

—

その日、新聞を見て驚いた。

「あ、当たってる・・・！」

その瞬間、僕は、言葉に言い表せないほどの喜びに包まれた。

ことの発端は数日前。本（ムック1冊と漫画雑誌1冊）を買い、お釣りを受け取ると、なぜか丁度300円だった。

（珍しい・・・）

大して使う当ても無いので、余程レジの募金箱に入れようかと思つた。しかし、ふと、よからぬ発想が頭に浮かんだ。

（あ・・・宝くじ1枚分だ・・・）

それで、募金はせず、一枚、運試しと買ってみたのだ。

我が家の人々は、なぜか、運とか偶然とか言うものを信じる人が少ない（実質僕だけ）。だから、散々に叩かれた。

「あんた、そんなの、本当に当たると思ってるの？」

「そりゃそうだよ。そうでなきゃそんなの買わない・・・」

「でも、計算したら期待値がたったの140円なのよ？それ一枚300円でしょ？結局は向こうが儲かるようになってるのよ」（1）

「

「いやさあ、そりゃそうかもしれないよ。でも、夢を買うと思えば・

・・・」

「『夢を買う』？そうねえ。そりゃ、聞こえのいい話ね。でも、どうせ当たらないものにお金を注ぎ込んでも・・・」

「『どうせ』って何さ、『どうせ』って」

「事実じゃない」

「まあまあ、シンちゃんもたまには、そういう無意味なことにお金

を使ってみたくなるのよ」

「……いや、『無意味』ってなんですか……葛城さんまで……」

「だって私も、宝くじを買ったことは一度も無いのよ。中二の数学の時間以来」

「……本当ですか、それ……」

そんな感じだったのである。……昨日までは。

それが今、僕の発言のせいで大騒ぎである。

「へー、あの宝くじ、当たったんだ」

「ええ、まあ……」

「へへー、珍しいこともあるもんね……。……で、シンジ」

「ん？」

「あんた、くじの番号は何番なのよ」

「えーと（財布からくじを取り出す）、30752792458号ですけど……あつ」

しまった。油断してたか、思わず口走ってしまった。

「30752792458号……って、あつ、3等。30万」

2)……ってウソ!？」

「いや、嘘じゃなくて本当なんですけど……」

「へえー、すごいじゃない、シンちゃん。見直したわー」

「いやいやそれほど……っていやいや、あげませんよ」

「……え、何を？」

「そりゃ、当選金のことですよ」

「えー、ケチ」

「いやいやいや、そりゃそうでしょう……」

その後。不思議なことに、このことは全く周りに知られず、平穩であった。人間の支配欲と言うものは、噂欲をも超えるのか。

・・・しかし。僕は、考えていた。これからどうしようか、と。買いたいものはある（ノートパソコン）。しかし、物を買うつて、ばれた時に言い訳が難しい（特に高いものは）。「抽選で当たった」とか言っても信じてくれるかどうか。

ならば、メシとかマツサージとか、ものではないこと（3）に使えばどうか。それも、折角の大金、なんだかもったいたない気がする。

じゃあ貯金（預金）や募金は？・・・そんなに使い道が無いわけではないしなあ。

・・・そんなこんなで考えているうちに、自然と顔の筋肉が緩む。マズイマズイと必死に修正。また緩む。修正。・・・これはマズイ。速く使い道を考えねば。

そう思案しているうちに、チャイムが鳴ったのだった。

その日のクラブの時間。僕は部長に、少し聞いてみることにした。

「あの一、部長」

「何かね」

「部長は、もし、宝くじとかが当たったら、何に使います？」

「宝くじ？・・・募金」

「即答ですね・・・」

「そりやそうだろう。この広い世界、必要なものが無くて苦しんでいる人々がどれだけいると思う？『世界は広い』とよく言うが、実際、世界のセも知らずに死んでいく人々はいまだに存在する。そういう人々を支援するために募金というものをするのだよ」

「・・・そうですか・・・」

「冗談だ」

「・・・・・・・・そんなんですか・・・・」

「・・・・ところで何かね？そんな質問を不意にすると、何かあったのかね？」

「・・・・・・・・えっ!？」

「もしかして、人に聞いて、当たったときの参考にしようとしたのではないかね？」

「・・・・・・・・まあ、そうなんですが・・・・（既に当たっているケド）」

「駄目だねえ」

「え？」

「自分の金だろう、当たったときは」

「そりゃまあ、そうですね・・・・」

「だろう。それを決めるのは、それを掴んだ君自身ではないかね」

「ですよね・・・・」

「君も、使い道が全く無いような『御人』ではないだろう？」

「・・・・・・・・（そりゃそうだけど、返答しづらい・・・・）」

三

数日後。アスカにせびられそうになったり（目を潤ませるなど迫真の演技だった）、大金を持っているところを友人に見つかりそうになったりしながらもなんとか切り抜け、無事、自分のノートパソコンを購入した。

「へー、結局、これにつきこんだの」

「いや、そんなに高くは無かったんだけどねー（15万ほどしたケド）」

「まだあのお金は余っているんでしょ？使ってあげようか？」

「いやいやいやいやっ（一昨日迫ってきたのは誰だと思っているんだ〜!）」

[illegible]

1・・・この期待値は、現実の世界の宝くじでも大して変わりません。でも、ちゃんと公共事業とかにその売り上げを利用したりして、決して金儲けだけではないのですよ。だからみんなも買いましょう（？）

3. . . 公民の授業的な用語で言うと「サービス」。教科書によると、オカネで買うのは「財」（要するに本文中の「物」）か「サ

37

第五話 同棲

—

十月上旬。とりあえず、僕らはホッと一息ついていた。嫌なテストを終え、ようやく遊べると、喜んでいたのである。

・・・が。まさかあんなことになるとは、思いはしなかった・・・。

僕は『鍵っ子』である。家に帰り、カギを使ってドアを開ける。もちろん中には誰もいない。それが普通である。

だが、この日は違った。開けようとすると、

「はあい」

と、可愛い声がドアから聞こえた。

「・・・えっ？」

僕は戸惑った。そのせいか、誰の声か、はじめ分からなかった。

まさかアスカが先に帰っているとか・・・いや、そうだとすると、彼女はそんな気配りなどしない。じゃあミサトさんが・・・いやいや、ミサトさんはそんなに早く帰ってきたことは一度も無い。

じゃあ、一体誰が・・・と思いつつ、ドアを開けた。すると、
「シンジ様、ずっとお帰りをお持ちしておりました」

・・・え？なんで洋子さんがここに？そんなばかな。家、間違えたのかな？見間違いだろう。そう思い、一度、ドアを閉めた。

表札を確認する。うん、確かに「碇」と書かれている。

もう一度、ドアを開ける。・・・すると、

「シンジ様、やっと、やっと帰ってきてくれたのですね！」

と、猛烈な勢いで抱きしめられた。

「く、苦しい・・・」

「わたくし、ずっと、ずっとシンジ様の家でシンジ様が帰ってくる

のを待つてたのですわ!」

え、待つてた?

「ちよつと待てよ。なんで君が家の鍵を?」

「それはですね・・・うふっ!」

その手には、合鍵があつた。

「あゝ!そ、それは!」

「うふっ、数日前、シンジ様の鍵をちよつとお借りして、業者さんに合鍵を作ってもらつていたのですわ!」

「ど、道理で鍵が無いと思つたら・・・!」

どんな理由があろうとも、人の鍵をパクるなど言語道断。おもわず引つ叩こうとした。

そのとき。彼女が、涙を潤ませてこう言つたのだ。

「ごめんなさい・・・。わたくしは、グスン、わたくしは、シンジ様と一緒にになりたいとの一心で・・・!ウウウ・・・」

そう言つて、彼女は泣き崩れてしまった。

「・・・」

そうである。こんな彼女を、引つ叩くなんて出来ないじゃないかあ。

「まあ、こつち座りなよ」

そう言つて僕は、テーブルの方へと彼女を誘導した。

五分後。

「シンジ様、有難うございます!泊めてくださつたお礼に、部屋の掃除をいたします!」

「・・・あの・・・」

「なんですの、シンジ様?まさか、夕食も作つてほしいとか・・・」

「あの、あの涙はどこへ行つた?」

「あ、・・・もう引いちゃつたようですわ」

「引いちゃつたつて・・・、早すぎるだろ!大体、『泊めてくださつた』つて、僕はまだ泊めるとは一言も・・・!」

「あーらシンジ様、照れてます？」

「違う！僕はただ・・・」

その時。クラブのせいで遅く帰ったアスカがドアを開けた。

「ただいま・・・って、ええっ！どうしてアンタが・・・！」

「それはこっちのセリフですわ！・・・ってまさか！」

そう言っただけで彼女は赤面した。

「木村さん！な、なに想像してんだよ！」

「そうよ！ただ単に使徒殲滅のための待機のために・・・！」

待機って、そうだったの？僕がそう思っていると、

「シンジ様、ひどい！」

そう言っただけで、彼女は寝室へと駆け出していった。

「・・・何で？」

「洋子さん、僕達が共同生活してるのを知らなかったんだよ、多分」

「違うわ」

「え？」

僕は戸惑った。・・・すると。

「一体全体、なんでアイツがウチにいるのよ！」

「え！そっち！？」

そっちでしょ。

「当然よ！・・・あ、まさか彼女と・・・！」

「違うよ！木村さんから勝手に入ってたんだ！」

「入ってたって、・・・鍵、盗まれたの！？」

「・・・」

マヌケである。・・・自分。

「ウソ！アイツ、そんなことまでしてたのね！」

「いや、彼女に悪気は・・・！」

「許さん！土下座して謝らせてやる〜！」

と、アスカが怒りに任せて寝室に直行した。

その時。

「ふんふんふんふん」

「・・・え？」

なんと、彼女はのんびりと部屋の掃除を行っていたのである！

「あんだ、なにやってんのよ！」

「何って・・・掃除ですわ。部屋の・・・」

「そうじゃなくて！さっきの涙は！？」

「もう直りましたわ。あなたとシンジ様が深い関係であろうとも、奪い返せばそれでいいのですわ！」

「違う！そんなんじゃない！」

この声は、二人同時だった。

しかし。それを無視してか、彼女が、衝撃の一言を放った。

「さーて、掃除掃除」

そ、掃除！？

彼女は、掃除道具を持って、次の部屋に入っていたのだった・・・。

「なんとマイペースな・・・」

ぼくらは呆れていた。

なにせ、さっきまで間違っただけを思い込み、寝室で泣いていたであろう人である。

それがこれである。呆れたくもなる。

「なんだかもう、鍵のことがどうでもよくなってきたわ・・・」

三十分後。

「洋子さん、そのカップ取って・・・」

「はい」

「あ、私のも取って」

「はいはい」

洋子さんは、この家の住人と化していた。気楽なものである。

「ねえシンジ」

「え、何？」

「あの子気が利くわね」

「そうだね」

「でもよかったわね」

「何が？」

「だから、あの子のことよ。幸せ者ね、アンタ」

「そ、そんなんじゃないよ」

「まっ、可愛い人」

「ほら」

「違うっ」

そう掛け合いをしていた時であった。チャイムの音が聞こえた。

「あ、ミサトさんだ」

ドアが開いた。

「ただいま、ん、その女の子、お友達？」

疑う気無しである。

「ああ、こいつはシンジの恋人」

「へえ、可愛いわねえ」

「ち、違う！」

「もうっ、シンジ様ったら」

「ほら」

「だから違うって！」

愉快でなにより。（違う）

日が暮れる。このとき僕は、かすかな疑問を感じていた。もしかして洋子さん、このまま居座る気なんじゃ・・・。

彼女に聞いてみた。

「あの、洋子さん」

「なんですの、シンジ様」

「まだ、帰らないの？」

そう言ったとき、彼女が急に笑い出した。

「おほほ、わたくし、はじめに話したじゃないですよ。『泊めてくださったお礼に』と」

「え、てことは・・・ええ!？」

どうやら、本気で居座る気らしい。

「え、あ、それはちよつと・・・!」

親が心配するだろう、と言おうとすると、彼女にこう押し切られてしまった。

「大丈夫ですわっ! お父様やお母様には、話はつけてあるし・・・」
「そ、そう?」

ちよつと考えたら、口からでまかせであることぐらいすぐに分かるであろう。仮にもお嬢様、お泊りなんて・・・ねえ。

しかし。浮かれていたのか、僕はあつさり認めてしまった。それで、

「有難うございます!」

とまた抱きしめられ、それがアスカらに見つかり、で、彼女が居座ることが露呈してしまったのである。

ただ。僕以上に浮かれていたのは、どうやら二人のほうらしい。

「両親には話をつけてある」そのことだけで、このことをアッサリ認めてしまったのだから。

こうして、奇妙な同棲生活が始まった。

二

その晩。

「うつわああ・・・」

僕ら三人は、口をただあんぐりさせるばかりである。

色艶といい香りといい、一瞬、

「今までこんな見事な料理を見たことはあつただろうか」
と感じ、そして、

「これが毎日食べられたらどれだけいいであろう」
と妄想してしまった(オイオイ) ほどである。

それはアスカたちも同じで、目がキラキラと輝いていた。

しかし。このようなものを果たして食べてしまっているんだろうか・・・。

ためらっていると、洋子さんは優しく、こう言ってくれた。

「いいですよ」

「そ、そう?」

まず一口。

「う、・・・うまあああああああい!」

嗚呼、なぜに今まで、この味を知らずに生きてきたのだろうか。

僕は、今までの人生を一番深く後悔したのだった。

夜。

僕らは、不安になってきた。

本当に帰らないつもりだろうか。

幸い、布団はあった。お客様用として、押入れの奥にしまっていた物である。・・・だが。

「あ、あった・・・あああ!」

僕らは驚愕した。なんと、ほりどころか、カビが繁茂していたのである!!

「どーすんのよ、これ・・・!」

そうである。何とかしなければ。・・・だが。その前に気になることが。

「・・・ミサトさん、なんで、こんなにカビが?」

するとミサトさんは、

「そんなの知らない・・・あつ、思い出したわ」

「ええ!? 一体何が!?!」

「そーいえば、去年、生乾きで直して、そのままにしてたっけ・・・」

・・・それだ。

「もう、なにやってんのよ!」

アスラの怒りはもつともである。しかし、僕はハッと気がついた。

「あ、アスカ、あまり叫んだら洋子さんが・・・」

そうである。このことはなるべく隠密に・・・しようとしたら。

「私が、どうかしましたの？」

もう寝巻きに着替えている。どうやら、合鍵で入る時に持参したらしい。

「あ・・・」

しまった、と感じたが、時すでに遅し。

「うわ・・・」

彼女もただ呆然とするばかり。単に洗濯で済むとは思えなかった。

「・・・仕方ないわね」

ミサトさんの決断により、久しぶりに自分の部屋のベッドで寝ることとなった。布団は破棄するらしい。そりゃそうであろう。あれでは復活は無理だろうし。

で。自分の部屋のベッドで寝ることとなったのだが、何か落ち着かない。普段は布団なので、なんだか変なのだ。だが、ああでは仕方があるまい。

目をつぶれば寝れるであろう、と僕は思った。

寝れない。

目をつぶっているのに、寝れない。

アスカ達は、もう寝ているのだろうか。・・・いや、なかなか寝付けないでいるだろう。

今日は、いろんなことがありすぎた。待ち伏せに始まり、掃除、食事、カビ布団・・・。布団意外、全て、洋子さんが来てからであった。

毎日が、こうなっていくのだろうか。そう考えると、なんだか楽しみだ。そう考えていた時、ドアが開く音がした。

誰だろう。

目を覚ましてトイレに？・・・いや、違う。薄目を開けてみると、なんと、自分の部屋のドアである。

一体誰だ？僕は、寝たふりをした。その時、かすかだがはっきりと、こつと聞こえた。

「一度、こうしてみたかった……」

ま、まさか。もしかして……。

その人影は、僕の背中側に回り込んだ。起こさないように、の心遣いか、静かに入っていく。そして、手を背中から腹のほうに回して、きゅっ、と、抱きしめた。

え、これは……！心拍も高まる。

脳裏に、何かが浮かんだが、自分自身でそれを否定した。

（いや、それはないだろう……むしろ、それは……）

だが、彼女は容赦なく、僕の理性を蕩かしていく。自らの理性と、自らの欲の葛藤である。しかし、僕ははっきりと選んだ。

彼女の手を静かに持ち、そして、静かに外していく。

「あ……」

彼女の、かすかな声が聞こえる。

そして、僕はこつ、囁いた。

「あまり早まっちゃ、だめだよ」

彼女は静かに、コクリと頷いた。

そして、自らから離れていった。そう、理性が勝つたのだ。満足げな顔をしながら、僕は眠りについた……。

三

次の日の朝。

久しぶりに、静かに目を覚ました。

「天気がいいなあ」

久しぶりの快晴。これであのかピカピ布団も干せる……あつ、破棄するんです、すいません。

早速朝食を……と思っていたら、もうすでに、包丁の音が聞こ

える。台所に向かうと、やはり、既に、洋子さんが料理していた。

「洋子さん、おはよう」

「おはようございます」

いつになく元気がない。どうしたのだろう。

「どうしたの？元気がないね」

「え・・・そ、そんなことはありませんよ、シンジ様」

声に元気が戻ったが、なにかおかしい。なぜだろう・・・と考えていると、

「あっ」

そうである。昨日のことである。理性を最大限発揮して、欲望を振り切ったのだ。それが、彼女にとって不満だったらしい。

「ご、ごめん」

「いいのよ、もともと無茶なお願いだったし・・・」

確かに、あのままいくと、勢いでそのまま行くところまでいつてしまったかもしれない。思い返すと、危ないところだったのだ。

その時。アスカらが起きてきた。

「アンタ達、ホント、仲良いわねえ」

「ち、違っつて・・・」

そうそう。まあ、理性を発揮できたからこそ、真の愛情なのかもしれないが。

「ふふふっ！」

何事もなかったかのように、朝食を作る洋子さん。でも、僕は見たんだ。

その目に、うつすらと涙が溜まっていたことを・・・。

その後、制服に着替え、何事もなかったかのように登校した。授業中でも、特に妙な様子はなかった。忘れ去るうとしていたのだろう。そして下校し、エプロン姿に着替え、家事をする。

やはり、愛の力とはいえ、親元を離れるのである。寂しかったの

だろう。

僕は、そう思うことにした。

四

それにしても、凄い人である。彼女が掃除したところには、塵一つない。まさに、「完璧」である。

大変だろうと思い、手伝おうとしたが、彼女に断られてしまった。「いいです。シンジ様の手を煩わせたくはありません」

まあ、確かに。もし手伝ったとしても、あそこまで綺麗にする自信は僕には全く無い。苦労して習得したのだろう。

彼女をみていて感じる。

「家事が上手な人って、いいなあ」

・・・なんてことを考えていたら、アスカにこう言われた。

「へー、あんなのがタイプなんだ。案外古風じゃん」

「ち、違っつて・・・」

必死に否定したが、案外そうかもしれない。その声が聞こえたのか、洋子さんが、頬を赤く染めている。

「あ・・・」

否定しないほうが彼女のためにもいいのかも、と一瞬、本気でそう考えた。

その時。玄関のチャイムが鳴った。

「はい」

僕が出ようとしたが、洋子さんが先に出ようとしている。

「あ、洋子さんはいいです、僕が」

「え、でも私が・・・」

「いや、僕が出る。掃除、してるんでしょ」

「まあ、そうですね・・・」

ここで、アス力がこうぼやいた。

「まー、何譲り合いしてんのよ。これぞ日本の『美德』ってやつかしら、あーやんなっちゃう」

「別にそんなわけじゃ」

「だってそうじゃない、だったらこの時なんていうのかしら」

「そ、それは・・・」

「じゃあ、私が出るわね」

と、アス力は、スタスタと玄関に向かった。

そして、「誰？」といいながら、ドアを開けた。
すると。その前には。

「娘の洋子はいるか」

五

「だ、誰・・・」

アス力は、そう質問した。だが、聞かずとも、誰だか僕には分かった。

洋子さんの父さんに違いない。

でもなぜ？その時、ふと、あの言葉が脳裏をよぎった。

（「大丈夫ですわっ！お父様やお母様には、話はつけてあるし・・・」）

話をつけてある。その言葉に僕はピンときたのだ。普通は外泊を許可しないだろう、と思っていたが、やはりそうだったのだ。

そのことを彼女に聞こうとしたが、そんなことをしている場合ではない、と僕は悟った。

僕は咄嗟に、彼女をクローゼットの中に隠した。何故かは分からない。でも、その時は、彼女を守りたかったのだ。

「入るぞ」

洋子父は、アス力を押しのけ、つかつかとこちらへ迫ってきた。そして。

「おい」

「・・・は、はい」

「洋子はどこにいる？」

穏やかだが、厳しい声だ。心臓が一瞬震え上がる。しかし、ここはしのがねば。

「洋子さんなら、さっきスーパーに買い物に・・・」

「どこのだ」

「近くのオカノスーパーに・・・」

もちろん、口からでまかせである。うまくいったか・・・と思っただが、残念ながら違った。

「ちよつと待て。変だぞ」

「な・・・何がですか？」

「男であるお前がクローゼットの近く、しかもまるで守るかのように陣取っているのはなぜだ？」

し、しまったー！確かに僕は、クローゼットはめったに使わない。

見事なカンである。つい、態度に出てしまった。

「い、いや、それは、あの・・・」

「どけ」

力強い手で払いのけられ、もはやどうすることも出来ない。

そして、クローゼットの扉が開かれた！・・・そこには、固まったままの洋子さんの姿があった。

「お父様・・・」

「帰るぞ」

そう言つと、洋子父は、嫌がる洋子さんをクローゼットから無理やり引きずり出した。そして、洋子さんの頬を思いつきりぶった。

「あつ」

僕は声を出した。洋子さんは動かない。目に涙をうかべたまま。「なんで男の家にのこのこついて行ったりしたんだ！」

洋子父の怒声が飛ぶ。

しかし、僕がつい、余計なこと口走ってしまった。

「いや・・・洋子さんが僕の家・・・」

洋子さんの父さんはそれを聞き逃さなかった。

「む、今何と言った？」

「べ、別に何も・・・」

そう答えるしかない。

「お父様、違うのよ・・・」

洋子さんが必死に説明しようとしたが、

「洋子は黙つとれ！今は、わしとこの男とで話をしとるんだ！」

「・・・はい・・・」

洋子父の一喝。洋子さんは、怯んでしまった。

「もう一度だけ聞く。今、何と言った？」

「そ、それは・・・」

答えに窮したとき、今度はアス力の怒声が聞こえた。

「さつきから見てたけど、アンタ、何様のつもり！？」

「なに・・・！」

洋子さんの父さんの怒りの矛先がアス力に向けられた。

「それはどういうことだ・・・！」

しかし、アス力は怯まない。

「いきなり押しかけてきて、洋子さんを引つ叩いて、シンジに迫っ

て・・・！娘を心配する気持ちは分かるけど、やってることがめち

やくちやじゃない！」

「まあ、そうだけど・・・」

強気すぎだろ、と遠まわしに伝えたつもりであつたが、届かなかつ

たようだ。

「・・・何がめちやくちゃだ・・・私は何も間違つたことはしてい

ない！それでも私の気持ちを分かっているとでもいうのか！？」

「え、あ、その・・・えゝ、つまり・・・」

言つた本人でさえもあのビビリよう。もはや万事休すか・・・！

六

その時。

「やめて！」

えっ？ いったい誰が？ 皆が振り返ると、その先に洋子さんの姿があつた。

「お父様、もうやめて！ 悪いのは私よ！ 私が押しかけたの！ 毎日の厳しいお稽古に耐えかねて逃げ出してきたの！」

「えええええ！？」

僕とアスカが同時に叫んだ。そ、そっち！？ 思わず聞いてしまった。

「僕じゃあないの！？」

「そっちもありましたけど、稽古のほうに辛かったです・・・」
僕たちの頭の中は、修羅場だというのに、そのことで一杯になつてしまった。

だが、洋子父にとっては、そんなことは関係ない。ずんずんずんと、洋子の方に進んでいく。

そして。

「洋子・・・済まなかった・・・！」

そう言つて、洋子父は泣き崩れた。僕らはただ、見守ることしか出来なかった。

「お父様・・・！」

洋子さんもそれに答える。

「洋子・・・！」

「お父様・・・！」

二人は固く抱き合つた。昨日、洋子さんがあの時した、それ以上に僕の中から、ほろりと涙が伝う。それはアスカも同じだった。

5秒後、二人は体を離れた。洋子父が先に話した。

「洋子・・・わしは・・・間違つたことをしてしまったかもしれない

い・・・」

「ええ・・・」

この状況で、「おもいつきりしてるよ」と、誰が言うだろう。

「帰ろう、洋子・・・」

「はい、お父様・・・」

二人はゆつくりと、玄関から帰っていった。僕はただ、二人を見送るだけだった・・・のだが。

「・・・あ！忘れてた！」

「何を!?」

「洋子さんの父さんに、私を押しつけたことを謝ってもらってない！」

「『私』って・・・どこまで自分勝手なんですか・・・」

七

次の日。その洋子父が、菓子折りを持って、謝罪に来た。

「大変申し訳ないことをした・・・すまん！」

「べ、別にいいですよ・・・洋子さんにも非はあったわけだし、殴られたわけでも無いし・・・」

「そうか。あのあと家で、洋子と二人で話し合ったのだ」

「は、はあ・・・」

次の瞬間、衝撃的な一言が発せられた。

「聞いたぞ。仲良くなっているそうじゃないか、洋子と」

「えええ!? 洋子さん、一体何を自分の父に吹き込んだんですか!? 違います違います! そんなことは決して・・・!」

全否定にも関わらず、照れているように聞こえたらしい。

「まあそう照れるな。その時になるまで、秘密にするからな」

「そ、『その時』ってなんですか!?!」

後ろから声がした。

「あんだ、いつの間に・・・！」

「ち、違いますって！」

否定したその時、さらに衝撃的な一言が発せられた。

「そこでだ。今回の洋子の行動は特別に許してやることにした！」

「ええええ！？」

「やりましたよ、シンジ様！」

突然、洋子さんの声がした。

「うわっ！・・・洋子さん！？」

洋子父の背後に、洋子さんが隠れていたのである。これは驚く。

「これからよろしくお願いしますね！」

「う・・・うそ！？」

僕とアスカは、同時に叫んだ。しかし、本当のことなのだ。

まあ、そりゃ、家事全般をこなしてくれるから楽だけど・・・。

「そ、そんな・・・」

結局我が家には、血のつながないヒトが三人も同居することになるのである。

「何、洋子に気に入らないところがあるとでも？」

「い、いえ・・・」

人間とは、不思議なものです。雨が降って地が固まり、かと思えばまたどろどろになります。

そのため、予測が出来ないものです。ヒトも、そして人生も。

まあだからこそ、われら人間は、そこに模索することをするのではないのでしょうか。

予測が出来たりしたら、たまらなくつまらないものになりますよ。では。

第六話 幻夢―ヒトvs機械（前書き）

注：パソコン用語がふんだんに出てきますので、ご了承ください。

第六話 幻夢―ヒトvs機械

—

気がついたときには、僕はなにやら暗いところにいた。

「・・・どこ？」

つぶやいてみるが、答は無い。

とりあえず動こうとしたとき、足の感覚が無いことに気がついた。動けない。

ならば手と、手を動かしてみると、こちらも思うように動かない。なんだか、左手のひじと手首しか動いていないようだ。

それでもその動きづらい手をギチヨギチヨと動かしてみると、後ろのほうから声がした。

「うるさい。誰だ」

なんだか聞き覚えのある声。僕は、後ろに向かって叫んだ。

「部長ですか!？」

するとその声の主は、ゆっくりとこう答えた。

「・・・その通りだ」

やはり部長らしい。他に聞く人もいなさそうなので、とりあえず聞いてみた。

「あの・・・部長。ここは、一体どこなんですかね？」

「私を知るわけ無いだろう」

「そうですよね・・・」

「・・・と言ってみたが、実はある程度予測はついている」

「そうなんですか!？」

たとえ予測でも、知っていたほうがいい。

僕は、耳をそばだてた。

「私思うに、ここはパソコンの中ではないかと思うんだね」

・・・意味がわからない。

「・・・その理由は？」

「まずこの暗さにあの明かり！」

あの明かり？周りを見渡すと、一箇所だけ明るい場所がある。そしてそこは、円形の小さな光が等間隔に集まって光っていた。

「分かるだろう？要は通風孔だ」

「通風孔！？」

「あの光はどう見ても穴だろう。懐中電灯に見えるか？」

「見えないです・・・」

「よろしい。次に、どう見ても大きな基盤にしか見えないこの床」
「床？」

下を見ると、確かに大きな^{マザーボード}基盤である。その上に乗っかっているのだ。

「そして、君の銀色の箱の姿だ。・・・どんな感触がするかね？」

「なんか、片手しか動かないんですね・・・」

「やはりな・・・とすると恐らく、片手がハードディスクのスイングアームになっているんだな」

「なるほど・・・って、えええええ！？ハードディスク！？」

「そうだろう・・・指先の感触は？」

「ざらざらします・・・あつ、触っただけなのに感覚が見たようにわかる・・・」

「良い磁気ヘッドなんだな。このパソコンのユーザに感謝しなくてはな」

「そうですか・・・」

脳内は果てしなく混乱しているが、部長の言うことはどうやら真実らしい。

「ところで・・・」

「何かね？」

「部長って」

「僕たちだけなんですが？こんなことになっているのは」

そう言つと、部長が答える前に外のほうから声がした。

「そんなわけあるかい！」

この声は・・・あつ！

「その声は鈴原！」

「なんで俺がスピーカやねん！信号を体震わせて出す以外能がないとこに！」

「そりやそうですけど・・・」

「なんか言つたか？」

「いや、別に・・・」

「ならええんやけどな・・・」

うーむ・・・ということとは。

「後・・・」

「なんや」

「鈴原までいるってことは、もしかして、この周りの部品全部・・・」

人なんじゃ・・・。

「その通りよ！」

右から声が。って、やっぱりー！

「その声はアスカ！」

「何でメモリなんていう一番忙しいとこなのよっ！」

メモリなんだ・・・と考えていると、これに部長が言い返した。

「馬鹿を言つな。一番忙しいのはこっちだ！CPUが四六時中データー処理するのにどれだけ忙しいと思ってるんだ！」

・・・あ。部長はCPUなんだ。・・・知らなかった。

「しかもそのせいでとても暑、いや熱い！・・・」

「大丈夫、兄さん？」

兄さん？だれだ・・・あ。

聞いたことがある。確か、1年の別のクラスにいた女子だ。

「・・・どなたですか？部長をいたわっているのは？」

「・・・え！？・・・そうか、ご存じないんですね・・・」

「ご、ごめん・・・」

「いいんです。私は、この下にいる兄さんの妹の遥香です」

「ああ、妹ね・・・」

部長に妹、いたんだ・・・。

「ところでさ、遥香さん」

「な、なんでしょう・・・」

「（なぜどもる？）君は今、何なの？」

「・・・え？」

「いや、だから、今、パソコンの部品では何かなって」

「あ・・・CPUのクーラーです・・・」

「そ、そうですね・・・」

言われてみればそうだ。ファンにひだ、どっからどう見ても冷えそうだ。僕は深く納得した。

二

僕はその後、周りの部品についても質問してみた。

「この緑色の床は・・・？」

「私だ」

・・・西島先生だ。

「なんでそこなんですか？」

「分からん・・・あつ」

「何ですか？」

「もしかして・・・マザーボード↓マザー↓親↓学校↓先生だからかなっ！？なははっ」

「・・・」

なんで、「親↓学校↓先生」なんだ・・・。訳が分からない。

・・・まあ、パソコンの部品になっていること自体が「訳が分からない」ことなのだが。

「じゃあ、あのファンは・・・」

「私よ」

「・・・なぜ綾波？」

「さあね」

まさか、あまり感情的にならないためか？と思ったが、それは言わないでおこう。

「・・・これで全部かな・・・」

身の回りの部品全部に確認をして、なんとか確認した。
起動まで暇かな〜と思っていたら。

「ちよつと待つてください！」
ん？

「・・・えっ？」

「私です。忘れないでください！」

「あつ、洋子さん！」

・・・忘れていた。

「なんで私は確認していないんですか！・・・あつ、まさか、ケー
スだから意識していなかったんじゃないかあ・・・」

・・・ばれた。

「ち、違うよ！たまたま目に映らなかつただけで・・・」

「周りにいるでしょ！」

「そりゃそうだけど・・・暗いし・・・」

「あ」

そうである。そもそも、「なにやら暗いところ」なのである。装
飾用のランプもないし、真っ暗でもないが分かりづらいのである。

・・・と心で叫んでいると、彼女の怒りの矛先が別に向けられた。

「そのそも惣流さん！」

「何よ」

「なんで惣流さん、そんないいところなんですか！」

「はあ？どこがよ」

「だって、シンジ様の隣じゃないですか！」

そう言われて、僕とアス力はハツと気が付いた。確かに、隣なのである。

「ごめん、先生が悪かった!」

いきなり先生登場。

「なんで先生が謝るんですか!」

「位置をもう少し考えとくべきだった!」

「そりゃ運命でしょう・・・」

そう呆れていると。

「私だってケースの方がいいわよ!人に見られるだけ!」
逆切れである。

「まあまあ、お互い運命なんだし・・・」

「嫌よこんな運命!」

「そんなこと言われても・・・」

そんなこんなでわーわー喋っていると。
ドアが開く音がした。

三

「・・・だれ?」

僕は、部長に質問した。

「・・・ユーザだ」

「えっ?」

「ユーザだ!今からこのパソコンを使うらしい!」

「えええええ!?ちよつと待って・・・」

「待ったなどない!BIOSが指令するとおりにハードディスクを
操作するんだ!」

「ウソー!?!」

部長の言葉で全員が戦慄した。

「あつ、木村さんはなにもなくていいから」

「・・・そうですか・・・」

そこからは正に戦争だった。

「各機器起動！全員！」

「はい！」

「BIOSによるハードウェアチェック！全員！」

「はい！」

「MBR読み込み！碇！惣流！」

「はい！（えええ！？）」

「ブートセクタ呼び出し！碇！惣流！」

「はい！（えええ！？）」

「OS起動！碇！惣流！」

「はい！（えええええ！？）」

・・・こんな具合である。そこからユーザがパソコンを終了させるまでの30分間、超ハードな労働を僕らは強いられた。特に僕とアスカと部長は、やることが複雑なだけに（失礼）もっと大変だった。

・・・そして。電源を落とされたとき、急に視界が暗くなった。と言うより、気がふわつと抜けてしまったかのような。そのまま、眠り込んでしまった・・・。

四

・・・。。。。なんだ、ここは。布団だ。・・・布団？さっきまでパソコンの中だったはずじゃ。・・・いや違う。右手も普通に動くし、足も同じく。・・・これって・・・。

「・・・夢！！？」

あのパソコンの中にいたことは全て夢だったのか。いや、そんなはずは無い。いやしかし。現実、人間として今、ここにいる。

混乱したままの頭で、布団から出、支度をした。

そして朝食。

「あのさ・・・、昨日、変な夢、見なかった？」

アスカ・洋子さんの二人に聞いてみた。すると、少しの間の後。

「あー！そう言えば見た！なんかパソコンの中にいたやつ！」

二人とも、口を揃えてそう言った。

「そうそう。僕がハードディスクで・・・」

「私がメモリ！」

「そういえばケースでしたわ！」

どうやら、同じ夢を見たらしい。

「でも一体どうしてパソコンの夢なんか・・・」

「そうねえ・・・」

結局、分からずじまいだった。

その後、他の仲間にも聞いてみたがやはり同じ。「パソコンの夢」で一致した。変なこともあるものである。

すると部長がこう言った。

「ふむ・・・、科学的には理由は不明だが、信じるほか無いだろう。私も、それを見たからな」

夢とは、まだまだ不思議なもののだろうか。僕は、そう感じた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

・・・マザーボードの配置は、当然ながら作成時から変わらない。ちなみに我が家のは一体型PCで、メモリが上、ハードディスクが下の土台部分にあります。残念。

第六話 幻夢―ヒトvs機械（後書き）

マニアック？まあそうかもしれませんが、書きたかったもんで。夢オチですいません。

第七話 魔境

—

それは、資料室に行かされたときのことだった。

（なんで、僕が一人でこんな大量のプリントを運ばなきゃいけないんだろう・・・）

無論、「配布係」なんぞになったためだが、自業自得、とまでは言われたくなかった。なぜなら、その時、いきなりのジャンケンで負けてしまい、それで配布係になったからである。

「ごちゃごちゃした部屋からようやくプリントを見つけ、やれやれと感じながら運ぼうとした時。」

目の前に、一つの、大きな姿見が見えた。

「なんだ、これ・・・」

ふとそう思い、持っていたプリントを近くの机に置き、姿見まで近寄った。

すると。そこには、とんでもないものが写っていたのだ・・・。

幽霊の類ではなかった。しかし、僕は、その場に立ち尽くしてしまった。

「な、なんだ、これ・・・」

そこには、父さんと母さんがいて、高校で幸せな日々を過ごしている僕の姿があった。

「おい碇！」

ハッとして後ろを振り返ると、そこには、鈴原と相田の姿が。

「なにしてんねん！変な鏡なんぞに気いとられて！」

「10分たつても帰ってこないと思ったら、こんなところで道草し

てたんですか・・・」

マズイ。10分もこの鏡に見入ってしまったのか。

「ご、ごめん・・・」

「急いで持ってきた。みんな怒ってるで」

「一緒にプリント持ってあげるから・・・」

そんなこんなでやっと教室に帰り、謝罪し、授業は無事、続行したのだった。

二

そして次の日。

僕は、ぼんやりと考えていた。

あの鏡は、何だったのだろう、と。

無論真実ではない。お母さんは亡くなっているし、お父さんはいつも”仕事”で家にいない。そもそも、あんなに充実した高校生活でもない（別の意味でにぎやかだが）。じゃあ、なんだったんだろう、あの鏡は。

そうしていると、後ろから声がかかった。

「おう、碇」

鈴原と相田だった。

「ん？・・・どうしたの、二人とも。元気そうじゃない」

そう返すと、二人が顔を近づけてきた。

「ちょ・・・どうしたの？」

「ちょっと話があるんや・・・」

そうして二人に、屋上まで連れて行かれた（ ）。

「・・・一体何？」

「実はな、碇には黙ってたんやけど、昨日の放課後、資料室に二人で入ったんや。碇が道草なんて今まで無かったしな」

「そしたら、・・・碇」

「何、相田君」

「鏡・・・あつたよな。大きな」

「うん（それ『姿見』・・・）」

「あれ、タダの鏡じゃないだろ」

「え・・・まあ・・・」

「あれ、見つけたの碇が最初か？」

「・・・そうだけど・・・」

そこまで言った瞬間、二人は跪き、僕の手を取って、同時にこう言った。

「よくやった、碇」

「・・・は？」

「あんなすごい鏡見つけるなんてな！」

「・・・言っている意味が良く分からないけど・・・」

「とぼけるなや。あれに写ってる姿、まさに俺の輝かしい未来の姿や無いか！」

「・・・はあ」

どーやら二人はとんでもない勘違いをしているらしい。

「嗚呼、美しき高校生活。俺たちはいつまでも語り継がれる・・・」

「・・・そうですか・・・」

なんか、突っ込む気力も無くなってきた・・・。

その後、屋上から教室に戻り、次の授業が始まった。

三

それ以降、妙な鏡の噂がねずみ算的に広がり・・・なんてことは無いが、少なくとも配布係達（各クラス毎に係があるので）の間では有名になっていた。一部（僕とか）を除いて、皆、「未来を写す鏡」だと信じ込み、毎度毎度資料室に行くたびに覗き、ウットリしているらしい。

「あの、部長」

「ん？何だ」

休み時間、部長に聞いてみることにした。

「部長にみてもらいたいものがあるんですが・・・」

「止めてくれ。私は別にヒマではない」

「いや、別にくだらないものじゃないんですって」

「・・・ほう？」

「実は、僕がよく行かされている資料室に、大きな姿見があるんですよ」

「姿見？それが？」

「でもタダの姿見じゃなくて、なんかヘンなんですよ」

「『なんか』とは何かね。分からないと思考することもできん」

「・・・確かに。」

「だから、それを一緒に見に来てほしいんですよ」

「・・・なるほど。『百聞は一見に如かず』と言っわけだな？」

そうだった・・・。

「そうです」

「・・・よかろう。一緒に来てやろう」

「ありがとうございます」

そしてその日の放課後。僕と部長は、二人で一緒に行ってみることにした。

まず職員室へ向かった。無論、資料室の鍵を借りるためである。

「失礼します。えー、高野せんせい」

「はい」

高野先生は、隣の1・3の教室の担任である。鍵の場所は先生達しか知らないのので、先生に頼むしかないのだ。

「どうしたの？」

「すみません。資料室の鍵を借りたいんですけど」

「どうして？」

理由が無ければ、鍵は借りられない。そのことを思い出し、咄嗟に嘘をついた。

「実は、配布するプリントを一枚紛失してしまつて・・・」

「・・・仕方ないわね。ほら」

「ありがとうございます」

そうして、職員室を後にした。すみません、先生。

「・・・全く」

「何ですか。ちゃんと借りてきたのに・・・」

「鍵一つ借りるのに、時間が掛かりすぎであろう。私ならこっそり鍵屋に頼むとかして・・・」

「・・・部長、『こっそり』つて・・・。それに、『鍵屋に頼む』つて、そんな金あるんですか？結構とられますよ？」

そう突っ込むと、驚くべき答えが返ってきた。

「・・・聞いてないのかね？私は結構な金持ちだ」

「・・・えええええ！？そ、そうなんですか？」

「知らなかったのかね。・・・まあ、ヘタに明かすと愚民共がタカリに來かねんから黙っていたのだが」

だったら、「聞いてないのかね」と言う方がおかしいんじゃない・・・。

「・・・じゃあ、開けますよ」

「ああ」

ドアを開け、僕たち二人は資料室に入った。

四

「・・・これです」

僕は部長に、例の姿見を見せた。
すると。

「・・・古いな」

「・・・え？」

「見る。鏡の回りのメッキが禿げている。鉄に金をメッキしてそれらしく見せかけているんだな」

「・・・気づかなかつた・・・」

「本当に凄い物なのか？これが？」

「ちゃんと鏡を見てないからそう言えるんですよ！」

「・・・そうか。では・・・」

「・・・碇君」

「何ですか、部長？」

「・・・なんだこれは」

「え？何が写っていたんですか、部長？」

「・・・私だ」

「はあ・・・」

「それも、背も高く、顔も整って、それもパソコンの前でにらめっこをしている自分だ！」

「・・・なんですか、それ（見てみたい気もするが・・・）」

「だが、これで分かったぞ」

「な、何がですか？」

「決まっているであろう。・・・この鏡の正体だ」

部長がそういった瞬間、後ろから大声がした。

「これ！プリントを探しもせず道草を食っているのは誰ですか!？」

「こ、校長先生！」

僕と部長は、思わず同時に叫んだ。

五

「・・・一体何をしていたんですか、二人で・・・」

「すみません・・・」

僕がそう答えたとき、部長は鏡を指差してこう言った。

「ところで校長先生、こちらからも質問して宜しいでしょうか」

「・・・ええ、何でしょう」

「この鏡は一体誰が置いた物なのでしょうか？」

「・・・知りませんねえ」

「正体は分かりました。これはおそらく、『本人が望む未来を映し出す』鏡ですね」

「・・・そうだったんだ。だとしたら、さっきの部長のって・・・
そうなんだ。」

そう考えていると、校長先生が、語った。

「・・・やっと気が付いたかね。そうだ。そして、その鏡を置いたのも私だ」

「・・・どうしてですか・・・」

思わず、口走ってしまった。すると。

「簡単だよ。いやー、遠い昔にアヤシゲな骨董商から買ったんだけど、最近家内に（普通の姿見として）使えないんなら捨ててきてと
うるさくてねー」

「・・・は？」

「かといって粗大ごみに出そうとしても、回収員さんとか通りがかりの人に知られて持ち逃げされるんじゃないかと怖くてねー」

「・・・はあ」

「で、誰にもばれないかと思ってこの部屋の片隅に隠してたんだけど、こんなに早くばれるとは、いやー軽率だった」

「・・・」

な、なんという人だ。そのせいで、配布係達が被害（？）にあっているのである。

その後の校長先生からの鏡の思い出話を延々聞かされ、僕たち二人は文字通り絶句せざるを得なかった。

「・・・なんだったんですか、僕ら・・・」

「あそこまで変な鏡は、東西探しても同じものはあるまい・・・」

「ところで部長」

「何だ」

「・・・S Eになつても、やっぱり体型は直したいんですね・・・」

「・・・」

人間、未来に憧れ、そのあまりに無用な夢想を見出してしまつこともあるだろう。

しかし、現実には現実なのだから、しっかり生きていくほかないと、僕は思った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

・・・屋上には開放されている。危険そうだが、キッチンと転落防止用のネットが設置されていて、何か掛かったらすぐに職員室の警報が鳴るので大丈夫なのである。

第七話 魔境（後書き）

どうかでこの設定見たような???
そんなことはありません。「眠り姫」同様、オリジナルです。

第八話 雪の微笑

—

それは、正月を2日ほど過ぎた日のことだった。

静かな日だった。僕は、ゆっくりと目を覚ました。

「あれ・・・」

おかしい。周りを見渡して、僕はそう感じた。

ミサトさんは忙しいから、寝室こしむにいないのは分かる。しかしアスカや、いつも早起きして朝食を作っている筈の洋子さんがここにはいないのはおかしい・・・。

僕はムクリと起き上がり、リビングへよろよろと歩き出した。

ハッとした。

急いで窓側に急ぐ。窓を開け、寒い冬空と、その下の地面を眺めた。

「・・・雪だ！」

そう。外はまさしく一面の銀世界となり、早朝のスキー場と化していた。幹線道路に雪は無かったが、ここ住宅地の道は雪で塞がり、およそ歩行以外の通行手段を阻んでいた。

おそらく二人はこれを知り、すぐさま出かけたのだろう。それを僕を起こさず。

その事実を知り悔しくなる自分と、それを知って余計出かけたくなる自分とが、己の中で交錯していた。

二

結局外に出た。外の現状から考えて最大限の耐寒装備・・・という訳ではない（それだったら雪の中で動けないし）が、手袋・マフ

ラー・ジャンバー等を装備し、それなりに動けるようにして通路に出た。

通路を通過後階段を降り（エレベーターを待ってられないのである）、マンションから外に出ようとした。・・・が。

「で、出れない・・・」

なんと、大量の雪がドアを塞ぎ、ドアが開かなくなっていたのだ。それでもなんとかして出ようと、全力でドアを押し開けようとした時。

「・・・何やってんの？」

ドアの向こうに、アスカの姿が見えた。

「ドアを開けてるんだよ。手伝って！」

なりふり構ってはいられないのである。

「何でこうなることを予想してお湯とか持ってこなかったのよ！」

「今言っても仕方ないじゃん。とにかく手伝って！」

結局、二人掛かりでドアをこじ開け、周辺の雪をついでに掻いておいたのだった。

「何で起こしてくれなかったのさ・・・」

二人でテクテクと歩きながら、僕はそうつぶやいた。

「仕方がないじゃない。だって一面全部雪よ？思わずダッシュしたくなるわよ」

「だからって・・・」

確かに。こんな雪一面を見たのは、生まれて初めてかもしれない。自分だって同じことするかも・・・。

「最初に気がついたのは洋子さんね。・・・たぶん」

「『たぶん』って・・・洋子さんに起こされたんじゃないの？」

「いいえ。私が起きたときには居なかったわ。私はともかく、アンタを起こさないのはヘンねえ・・・」

そんなことをしゃべっている内に、近くの公園に着いた。

「・・・公園・・・なんだよね、これ？」
「た、多分・・・」

そこに緑は無く、のっぺりと白いものに覆われているだけだった。そしてその中で、人々が思い思いに雪合戦や雪だるまや造形を楽しんでいる。

その中に、いつもの友人たちがいた。

「おー碇、やっと来たかー」

「遅いつちゅうねん」

「シンジ様ー、こっちですよー」

・・・どうやら、雪で大きな壁を作っているらしい。

「・・・なんですか、それ」

「壁や、壁」

「雪合戦用に、弾除けの壁を準備しているんだよ」

「そうそう」

・・・雪合戦って、壁作るもんだっけ（ ）？

「壁つてのはいいんだけど・・・デカすぎじゃない？」

「いいじゃねえか、多少デカいぐらい」

「・・・良くないですよ・・・」

壁を作った後（2つ）、とりあえず白組と赤組とに分かれることにした。

適当にじゃんけんをした結果、白組が僕と木村さんと相田君、赤組が惣流と鈴原君と遥香さん（なんかいた）となった。

各自弾を作り、準備をしてから開戦となった。

白組側。

「・・・木村さん・・・」

「なんですよ、シンジ様？」

「なんで起こしてくれなかったんですか・・・」

「だって、あまりに外がきれいだったからつい・・・」

「『つい』って・・・」

「・・・あの、木村さん」

「なんですよ？」

「なんなんだよ、その『シンジ様』って・・・そんなに碇はエラくないだろ・・・」

「いいじゃないですよ。シンジ様なんですから！」

「・・・」

赤組側。

「・・・これは楽勝ね」

「・・・せやな・・・」

「・・・な、何でそんな結論になっているの？」

「だって見てや。面子^{メンツ}で考えてみい。戦闘力的に明らかにこっちが上やろ」

「しかも、白組のうちの一人はもう一人にデレなんだし。実質2対3ね」

「・・・でも、逆に連携が取れて強いんじゃない・・・」

「なに言ってるの。洋子さんに『戦闘力』なんて皆無じゃない。むしろ戦争なら捕虜になるほうね」

「せやせや」

「・・・」

四

そして、遂に戦闘が開始された。

赤組の鈴原が弾を抱えて果敢に攻めに入る。様子から見るに、惣流と遥香さんは壁の後ろで弾作りと中継をしているらしい。

「・・・じゃあ、行くよ」

「おう」

「準備は出来ましたわ」

「・・・3、2、1、ゴー！」

・・・まあ、こちらとあちらがマトモに戦っても勝てはしないので、とつと壁を崩して弾を作れないようにする作戦を立てていた。とは言っても、蹴って壊すとかは出来ないので、巨大な弾をブチ当てて崩していく作戦とした。

巨大な弾を投げつける者（僕）、小さな弾をばら撒いて牽制する者（相田）、弾を生産する者（木村さん）。そういう風に分かれて戦う作戦である。

作戦に従い、弾を相手方の壁にブチ当てる。すぐに壊れるとは思えなかったが、がんばればなんとかなるだろうと弾を投げまくる。無論隙だらけだが、そこは相田が小弾を投げまくることでの対処する。相手もそれには気が付いているだろうが、弾に触れたら負けなので対処はできまい。

そう考えながら、僕は必死に弾を投げまくった。

見た目、相手の壁が向こうにしまったような気がした。気のせいだろうと、最初は思った。

しかし、そうではなかった。

「二人とも逃げろ！」

鈴原がそれに気が付いて警告したのは、しなってから2秒後のことである。壁がしなることによって発生した異様な音に気が付いたからだ。

しかし、時は遅し。今にも崩れかかんとする雪の壁。惣流はなんとか逃げおおせたが、もう一人は・・・。

僕。

「・・・ぶっ倒れた・・・」

惣流。

「嘘・・・」

相田。

「それは無いと思ってたんだが・・・」

鈴原。

「倒れたなあ・・・なあ、碇」

「？」

「・・・これ、お前が考えたんか？」

「・・・ああ。普通に戦っても勝てないと思って、補給を絶ったらなんとかなるんじゃない・・・かと・・・」

「『なんとかなる』って、何考えとんねん！あんな雪の塊が落ちてきたらどないなるか、普通分かるやる！」

「そ・・・そんなこと言ったって！大体、あんな雪の壁作るのが普通じゃないじゃんか！」

「・・・確かに・・・」

「言われてみればそうでしたわね・・・」

惣流と木村さんも、それに頷く。

暫く、無言のときが流れた。

「・・・あつ」

「なんや、碇？」

「・・・どうやって救い出しましょう・・・」

「あ」

そう。倒れてから1分ほど。当然ながら寒く、体力も段々奪われていくに違いない。

・・・しかし。それなりに大きな壁だったので、位置の見当が付かない。居そうなところを集中して掘らなければ間に合わないかも

しれない・・・。

暫しの間、皆で考えた。・・・その時。ふと気が付いたのだ。

「あのー」

「・・・なんや碇」

「どうしたのよ。・・・まさか、案があるとか？」

「いや、案とかなんとかじゃなくてですね・・・」

五

「遥香さんは、弾を作ってたんですね、多分・・・」

「せや」

「普通、敵の弾を受けないようにするには、壁際にいた方がいいよね？」

「そうよ・・・それが？」

「じゃあ、壁際に弾を作っていた、と考えるのが自然じゃないんですかね？」

「・・・あ」

そうである。迷うことは無かったのだ。僕らは速攻で、壁が立っていた周辺の雪を掘り返した。

・・・そして。

「・・・あーいた！」

そこには、震える彼女の姿があった・・・。

「助かりました・・・本当に・・・」

「まあ、早く見つかったよかった、ってとこね」

「助かってよかったです・・・」

「ほんまやほんまや」

「・・・ところであの」

「ん？どうしたんや」

「それにしても、一様に雪に埋もれたのに、なんだかすぐに助かり

ましたけど・・・」

「ああ、それはな、こいつの閃きがあつたからや、な、碇」

「・・・ま、まあ、そうですね・・・」

そこまで言つた瞬間、彼女が急に飛びついてきた。

「・・・わ！な、何を・・・」

「ありがとうございます！ありがとうございます！ありがとうございます！」

「・・・こいつはすごいな・・・」

「大胆」

「ひゅーひゅー」

「ち、違つて！」

そして、一同は笑いに包まれた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

・・・「正式」なルールだと作るそうです。とはいえ、倒れてくるほどデカくは勿論ありません（ネタバレ）。

第八話 雪の微笑（後書き）

どうもすいません。更新遅れました。いろいろ忙しかったんですよ・・。

ところで、私の他の小説も見てくださいか？オリジナルな作品もあるんで、ぜひコメントよろしくお願いします。

第九話 バレンタイン戦争！

—

2月。寒さが身にしみる冬の季節から、心の雪も融ける春の季節へと転換する月である。まあ普通、月末の『学年テスト』と言う名の恐怖に追われ、春になることへの喜びもなく3月に入るのが学生（特に3年）の運命であろう。

・・・だが。2月には、『バレンタインデー』という日がある。男子にとっては、まさにこの一年の努力の成果を確かめられる日であり、女子にとっては、チョコ代やあげる相手に頭を悩ます日でもある。この日のせいで、ろくに勉強もせず、結局学年テストで泣く人が大幅に増加したことは、かの聖バレンタインも天国で嘆き悲しんでいるのだろう。

そして。この全国的な熱狂（？）は、わが北上高校にも広がっていた・・・。

職員室で。

「まったく。近頃の生徒といったら、勉強もせずに寄り集まって・・・。教師の気持ちも考えてほしいもんだね、西島先生」

と、長豊和義先生が疲れた様子で、西島先生にため息をついた。1

・3の担任である。

「まあ、仕方ないじゃないですか長豊先生。生徒も退屈していたのでしょう。そういうのに興味が出てくる年頃なんですよ」

こちらは西島先生。1・2の担任である。

「まあ西島先生、随分と生徒思いなんですね」

そういつているのは、1・1の担任の加藤由紀子先生。加藤先生も疲れきった様子。

「違いますよ、加藤先生。そういう意見もある、ということですよ」

「そりやそんなですけどね……。この間、生徒たちにちよつとしたミニテストをしてみたんですよ。まあ復習としてなんですけど、ちゃんと復習していれば簡単に70は点が取れるテストだったんですよ。ですがね、そのテストの平均が、なんと50点を切ってますよね。一体これはどうしたことかと。ということで、試しに授業中に、生徒を観察してみたんですよ。そうしたらですね、生徒はもう上の空だったんですね。今まで気がつきませんでしたよ。あ、もちろんそのような生徒は前にもいて、きちんと注意しましたよ。でもですね、この季節、特にそれが多い気がするんですよ。そのとおりである。」

「まあ確かに、きちんとした統計を取ったわけではないですけども、そんな気がしますね。」

もちろん、そのような不埒な生徒に対しては、私がビシバシ指導を……」

と、西島先生が本腰を入れて話そうとすると、
「やめてくださいよ、西島先生。あなたの指導は、『指導』といつてもただのチヨーク投げじゃないの」

と、加藤先生が、これまたツツコミを入れた。だが、問題解決に『チヨーク投げ』とは、中々の実力者。チヨーク2007本分の価値があるに違いない。（違う？）

「『ただの』とは侵害な。これは、教師たちに代々伝わる秘法！……いやスキル！」

これを使いこなすことこそ、教師の力量が問われるわけです」

「……『銀七先生』もそんなことしましたか？」

ちなみに『銀七先生』、正式名称『3年C組銀七先生』は、学園物のまさに名作である。

「いやいや。先ほども申し上げましたように、チヨーク投げは秘法なだけに、相当の練習を費やすものなのです。だから、生徒指導に追われる銀七先生には出来ないのです」

「……」

あきれて物が言えない加藤先生。・・・だが。
「まあ、つまりですね、西島先生がそんな冗談を言いたくなるくらい、お辛いつてことなんですよ。・・・きつと」
「いや違います長豊先生、西島先生は冗談で言っただけはいいませ・・・」
「とにかく、学年テストで散々な点数を取らないためにも、指導を頑張らなくてはいけない、ということです」
教師たちの嘆きが聞こえる。

教室。

休み時間なので、当然ながら、バレンタインの話題でもちきりである。・・・だが、十人十色。そうでは無い人たちも一応はいるのだ。・・・たとえば。

一、木村洋子の場合

「え、『バレンタインデー』？何ですの、それ」

「えゝ知らないの？本当に？」

「はい」

「・・・バレンタインデーっていうのは、要するに、好きな男の子にチョコをあげる日ってことよ」

「え、『チョコ』って何ですの」

「・・・」

閉口するしかない。

二、アスカの場合

「大体、バレンタインデーにチョコレートをあげること自体、根拠が無いことなのよ。そもそも、バレンタインデーは、聖バレンタインがローマ時代に、こっそりと兵士の結婚をさせていたことがローマ国王にバレて処刑された日を悲しんで作られた日なのよ。それが今では、『愛する人に贈り物をする日』に変化したのよ。それだけならまだしも、日本では、チョコレート会社の陰謀で（注：本当に

記録がある）、『女性が男性にチョコレートをあげる日』になってしまったのよ。拳句の果てには、なんにも根拠が無い『ホワイトデー』まで創ってしまつて。人って恐ろしいものねー」

「『郷に入れば郷に従え』ともいうと思うけど・・・」

「え？」

三、影山三兄弟の場合

「るるるーん♪明日が楽しみ♪」

「何を浮かれているのだ、妹よ」

「なにを言っているの兄さん。明日は、あの、バレンタインデーなのよ。浮かれないわけ無いじゃない♪」

「・・・」

馬鹿げている、と部長が突っ込もうとしたら遥香が、

「でも・・・、もちろん、チョコレートの融点についての論文を書いたりするわよ」

と言ったので思わず部長は唖ってしまった。

「うーむ、それでこそ妹、いや影山家。代々、どんなことでも科学を忘れないようにしているからこそ、そのような性格が出来たのか」
そうだったのか影山家！

「まじめに議論するなよ兄さん。大体チョコレートの融点なんて普通議論しないよ」

と、冷静に部長の弟の進が宥めた。まあ、そりやそうであろう。

ちなみに、チョコレートは様々な物体の混合物なので、プラスチックの様に、融点が安定しないと予想される（実際に確かめたことはないケド）。

「それはそうだが・・・、大体、バレンタインデーでチョコをあげることで自体根拠がない」

「え、そうなの？」

ここで、遥香・進共に驚いた。

「そりやそうだろう。・・・詳しくは『二、アスカの場合』参照の

こと」

「・・・はあ」

「・・・ところで、融点の調査をしたらどうするのかね？」
と、進が尋ねた。すると。

「うーん、そうねえ。」

決まっていなかったのかい！

・・・これらの例外を除いて、大多数の男女が、それぞれで協議（？）していたのだった。

二

さて、ある男同士の協議で。

鈴原君が、こう言った。

「ふっふっふっ・・・、いよいよやな」

相田も口を合わせる。

「いよいよすね」

「ついに、わいが活躍するときが来たんやな」

「そうっすね」

「まあ、わいの前に敵はない！」

「・・・」

すごい自信だなあ。僕は、ちよつと質問してみた。

「活躍って・・・、そんなに活躍したの？」

「うるさいっ！こう見えても、お前らよりは勝ってるわ！」

「・・・どこが？」

「なんか言ったか、碇？」

「いつ、いいえ・・・」

「さうて、去年はそれほど活躍してこなかった我らだが・・・」

「一昨年もないの？」

「黙れ！だがしかし、今は変わったのだ！今年こそは・・・」

その時。

「今年も活躍はしない、だろ？」

あいつは！

「あつ、光川！」

「ふっふっふ……、残念だな。私がいる限り、君たちにチョコは渡らないだろう」

「何っ！？」

「当然だろう。人間的に、格が違うのだよ、格が」

「なっ、何が格だ！」

「ふっ。見れば分かるだろう。大体においてDNAからして違う」

「デイ、DNA！？」

「そのとおり。並みの人々のDNAでは、私のようなカッコイイ男性には決してならな……」

「ちょっと待ってくれたまえ」

「ぶ、部長！？……なんでここに？」

「ふっ。私は、このようなタイプの人を見ると気分が悪くなるもんでね」

「別によからう。当然の話だ」

「どこがかね。大体君の発言は全て偏見だと思うが」

「偏見？」

「そうだ。まあ、少々どころかなりイタイと思うほどだ」

……と、部長と光川が争っていたときに、鈴原がこう言った。

「あのなあ、ちょっとは喋らせんかい」

「おっと、失礼」

「失礼って……。ひどいこといいまん」

「まあ、光川の言うことにも一理ある。君たちに、本当の意味で『進歩』というのがあるのかね？」

「『進歩』？ふっ。当然だっ！」

え、当然？鈴原、そんなことを考えていたの？

「で、何かね。『進歩』とは？」

「わいはな、よく考えて見たんや。そして、気がついたんや。ええか。いくら数を稼いでも、

ぜーんぶチロリチヨコじゃあ意味は無い。じゃあどうするか。そこでや。今年は、体積で競う、

というのはどうや。どや？名案やろ？」

「・・・体積？」

「せや。体積やったら、公平やろ。それに、市販品よりも手作りの方が体積が大きいだろうし」

「・・・それって重さの方が簡単なんじゃ・・・」

「うるさい！」

「なるほど。君にしてはなかなかのアイデアだ。・・・だが、その体積はどうやって計算するのかな？」

「そりやあもちろん、我らがパソコン部の部長、影山様に・・・」

「ちよいと待て。体積計算を私にやらせようと言っのかな？」

「もちろん！」

「（そう自信を持って言われても・・・無理だな」

「何！？」

「だってそうだろう。私がそのようなクダラナイ計算をすると思うのかな？」

「・・・いいえ」

「まあ、一番いい方法は、水に沈めて計算する方法だが・・・」

「水！？部長はん、女の子の思いを水に沈める気か！？」

「『思い』って・・・。大体、数とか体積とかで愛を競う方がよっぽど愛が無いと思わないかね！？」

「・・・確かに」

「だがな。体積を計算する、つまり積分だな・・・これを自力ですることは、数学力を磨くことにもつながる」

「はっ」

「だ・か・ら、自力で計算してもらおう」
「・・・」

と言うことで、鈴原の思惑が外れ、結局自力で体積計算をする羽目になったのだった。

三

当日。学校から帰り、僕の家で、計算が始まった。時計は午後四時。

「よし、みんな集まったな」

「はい」

「早速、なに貰ったか報告や」

「ええつ、報告!？」

僕は、焦ってしまった。

「そりやそうや、碇。これはれっきとした、男と男の戦いなんやからな、正直に報告せい」

「はい・・・」

ということで僕はまず、一つ目の箱を取り出した。

「なんや。この箱。・・・ん、重いな」

「あつ、それは・・・」

早速中が開けられた。すると。

「なつ、なんやこれは」

「あー!」

中には、縦6cm、横4cm、高さ5cmの直方体型のチョコレートが入っていた。

「なんちゅう形や・・・」

「愛もへったくりも無い形だ・・・」

「それは、惣龍から貰ったもので・・・」

「なにつ、アイツからか。道理でこんなシンプルすぎる形やと思ったわ」

たっ確かに・・・。

「でも、体積的には、有利だわな」

「そうだね・・・」

「アイツに感謝しいな。えっと体積は・・・、 $6 \times 4 \times 5$ で、12

0 cm^3 やな」

「でかつ！」

「よかつたなあ、碇」

「はい・・・」

嬉しくない。

「でもなあ碇。お前のことやから、間違いなく『あの方』からも貰っているはずだよな」

「え、『あの方』って？」

「とぼけるなや。とっとと見せんかい」

「あつ、ちよつと・・・」

と、強引に鞆の中からチョコを取られてしまった。

「やっぱりな。・・・おお！」

そこには、厚さ2cmの、ハート型のチョコレートが！

「やっぱり・・・」

「ちよつと、勝手に取らないでよ。恥ずかしいから・・・」

その時。

「わたくしが丹精こめてシンジ様のために作りましたのよっ」

「よ、洋子！猛もう帰って来たの！？」

「ええ。ちゃんと食べてくださいね」

「は、はい・・・」

「うらやましいなあ、碇」

「ちっ、違うよ・・・」

と否定したが、洋子さんは、

「ふふふ・・・」

と微笑んでいる。

そして体積計算、と言つとき。

「で、体積は・・・って、ん？これ、どないしたらええねん」と、鈴原がつぶやいた。

「そうだね・・・」

たしかに、円でもなく四角形でもなく、それを組み合わせたものでもなく、難しい形である。

「どうしよう・・・」

そう、考えあぐねていた時、相田が何かを思いついたようだ。

「ん。いい方法がひらめいたぞ」

「え、何？」

「ええか。碇、それ、ちょっと貸して」

「えっ・・・」

「何をするのですの？」

「いや・・・、これをこうして・・・」

と、相田は、僕のチョコレートを、方眼用紙に乗せた。

「どういうこと？」

僕は、質問した。

「いいか。これでまず、チョコレートの形を写し取る」

「うんうん」

「そうして、方眼を数えれば・・・」

「あっ、そうか」

そうである。そうすれば、簡単に底面積が求められる。

そうすれば、底面積×高さで、体積が求まる。

なるほど、と僕が思っていると、部長の声がした。

「なるほどな。方眼で近似か。単純だな・・・」

「その声は部長！」

「あんだ、いつのまにおったん！？」

「当然だ。しかし、それでは誤差が出る・・・」

「誤差？・・・ああ、方眼だから仕方ないだろう」

「まあとりあえず方眼で考えてみよう。この場合、底面積は約150cm²だから・・・」

「で、でか！」

僕は、面積を聞いて、改めて驚いた。

「つつい大きくしてしまつて・・・」

「いや、別にいいけど・・・」

「体積は、 150×2 で、 300 cm^3 だ」

「ヤツの2倍強だな」

「こうしてみると、ほんとでかいな」

「へへへ・・・」

「照れている場合ではない。次だ」

「部長・・・やる気になつたのですか・・・」

「次にこれ。・・・市販品ですな」

「市販品だなあ」

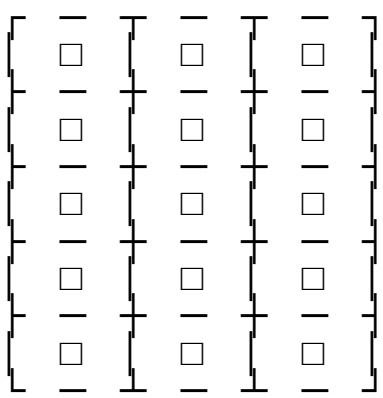
「なんだか、テンションが落ちるね」

「思いは変わらんだろう」

「そりゃそうだ」

「しかし、計算しづらい図形だなあ」

そう、通常のチョコレート（明。チョコレートとか）の場合、下図のように、↑



小さいユニット（中は凹んでいる）が複数長方形に合体した構造となっている。

「1ユニットの体積が分かれば、後は掛け算だな」

「だが・・・、ちと、計算しづらい形だなあ」

「単純に台形型と考えて計算したらいいんとちゃう？」

「いやいや・・・、それでは正確さが失われる」

「そりゃそうだが・・・」

「でも、形を見る限り、不可能はなさそうだ」

「たしかに・・・」

早速、計算が行われた。

緻密な計算により、1ユニットあたりの体積が 10.5 cm^3 と判明。3×5ピースなので、体積は 157.5 cm^3 である。

「それにしても、なんちゅう形や・・・」

鈴原が、相田にこう聞いた。

「そういえば相田。お前も何か渡されたんちゃうんか」

すると相田は、なんと、きちんと包装された高級チョコレート
箱を見せてくれた。

「うわー・・・」

僕は驚く（そりゃそうだが）。一体だから？

「一体だから、こんなチョコレート・・・」

「いや、それが・・・」

相田が言うには、靴箱の蓋を開けると（定番ですな）、このチョコレートが入っていたという。

「それで、カードも添付されていたけど・・・」

「何が書いてあったんや？」

「それが・・・『K氏より愛を込めて・・・』って」

「K氏？」

うーむ。K氏と言っても、この学年だけでも10人以上（女子が）いるぞ。

結局、誰のかは分からずじまいであった。

・・・そうして計算が続けられ、午後5時半、なんとか終了した。
1時間半も、計算し続けていったわけだ。

で、結局。

「結局あんたかいな」

「確かに・・・」

「まあ、当然だな」

そう。体積計算したところ、体積が最大なのは実は僕、 1025.72cm^3 だったのだ。

「体積最大って、嬉しいことですかね・・・」

僕は、部長に訊いてみた。

「さあな。だが・・・」

部長がそついいかけて、僕は「えっ？」と感じた。

いつもの部長らしくない。

「堂々と食べられるのも、これはいいことではないか」

「はあ・・・」

「つまり、バレンティンデーも無駄では無い、ということだ」

確かに。本来の目的とはかけ離れてしまったこの日。

かの聖バレンティンも天国で嘆き悲しんでいるのだろう。

だが。相手のために努力しようとするその想い、それだけは永く語り継がれていくことだろう。

第九話 バレンタイン戦争！（後書き）

えー、久しぶりの投稿です。会話文が多い？・・・すみません。

第十話 大迷宮

—

今日は一年の宿泊訓練。そのコースの中で、一年生一行は、今大人気の遊園地の「ジャンボランド」に来ていた。その名前の通り、アトラクションがどれもこれも途轍もなく大きいのが特色で、通常の3倍以上の長さのジェットコースター、なぜか迷い道があるお化け屋敷、かなりたくさんの人が入るファーストフード店など、その名に恥じぬデカさである。

そのジャンボランドで今最も注目されているスポットは、国内最大の大迷路の「ギガ迷路」。縦横1km以上、一度入ったら1時間は出てこれないこと必至というその巨大さで「こわいけど行ってみたいスポット」で堂々一位を獲得。で、自由行動になると、そこに生徒が殺到したのだった。

これは、殺到した生徒たちの、悲劇の記録である……。

「うわっ……」

雑誌で見たから知っていたけど、本当に大きいなあ。これに入るのか……。呆然としてみると、部長の声が聞こえた。

「ふっ。迷路が大きければ、それだけ達成感がある……。実に面白い」

「部長……」

「ん、何かね碇君、どうかしたかね？」

「いや部長、実は……」

「迷路の出かたは教えんぞ」

「えっ……」

「確かに私は、迷路の出かたを知っている。しかし、それとこれは別問題だ」

「あの、部長……」

「何かね。図星ではなかったのかね？」

・・・図星である。

「ふむ、沈黙するところから見て、やはりそうであつたか」

「・・・」

「大体、前に君に教えたではないか。一週間前、君がパズル雑誌の迷路に苦戦していたときに」

「えっ」

パズル雑誌・・・あゝ！すっかり忘れていた。確かに部長は何か言っていたような・・・。

「あつ・・・そういえばそうですね」

「そうだろう。それで聞いてくるとは、君は私の話を聞いていなかったのかね？」

「いいえっ、そんなことはないです。きちんと聞いていました」

そうである。キチンと聞いていたのである。・・・パズルの迷路の解き方だけ。

「ならば分かるであろう。私は行くぞ」

「あつ、部長・・・」

そう言つて、部長はさっさと行つてしまった。

「どうしよう・・・」

僕は途方に暮れていた。出方が分からないのでは、絶対に迷つてしまつてはないか。このギガ迷路には、雨の日も出来るようにと、天井がある。しかも、たくさん道を作るためか、壁と壁との間（道幅）が2mほどしかない。つまり、けっこう閉鎖的なのである。そんなところに長時間いるのはつきり言つて不安なのである。なので、部長に迷路の出かたを教えてもらいたかつたのだ。それが「もう教えただろ」なのである。冷たいではないか。

ため息をついていると、あの声が聞こえてきた。

「シンジ様〜！」

やっぱり・・・。

「シンジ様、なんで私を誘ってくれなかったのですか！」
「いや、別に誘わないでおこうと思ったわけじゃ・・・」
「え、じゃあなんで先に迷路に入ろうとしたのですか？」
「え？」

ふと見ると、迷路の入り口のすぐそばである。知らぬ間に足が無意識に入り口に向いていたのだ。怖い話である。

「あつ、ほんとだ・・・」

「ほんとだ、じゃないですわよ。さ、一緒に入りましょ」

「え・・・えええ!？」

ちよつと待て。この状況って・・・。明らかに明らかではないか。そう考えながら、僕は迷路の中に引きずり込まれたのだった・・・。

二

入ってから10分。僕はもう、「もしかして出られないんじゃない・・・」ということまで頭の中が一杯になっていた。いくら女子と手をつないで（つながれて）いたとしても、怖いものは怖いのである。

つい口に出してしまった。

「大丈夫かな・・・」

「何がですか？」

「いや、出れなくなったらどうしようって・・・」

「決まっているじゃありませんの」

「え？」

僕は聞き返した。すると・・・驚くべき答えが返ってきた。

「脱出ベルを鳴らすんです」

「だ・・・脱出ベル!？」

「そうですね。迷路に入る前に配られたでしょ？」

「え、配ってたって?・・・全然知らないんだけど」

「え・・・ああ、シンジ様はあの時、ちよつと別の場所にいました

わよね」

あの時とは、入る前に、一旦先生が生徒を整列させていたときである。

「そ、そうだけど・・・」

そういえば、そのときちよつとトイレに行っていた。

「それで、貰いそびれたではありません？」

「・・・あゝー!!」

そうである。・・・って、それ、先生の凡ミスではないか。西島先生・・・。自分もずいぶん馬鹿なものである。大事なベルを貰いそびれたのだから。

失意に暮れながら、僕はまた歩き始めたのだった。

「大きいものだな・・・」

部長は、そうつぶやいた。

当然部長は、こういう迷路の出かたを知っている。しかし、いかんせん迷路が大きすぎるのだ。

「流石「ギガ迷路」だな・・・ネーミングセンスはともかく、それに恥じぬ大きさだな」

部長は、この迷路の大きさを改めて感じていた。

「しかしこれは疲れるな・・・。足が棒になるぞ・・・」

いつもパソコンでプログラムを組んでいた、数式を解いたりしている部長にとって、この長距離徒歩はこたえた。普段しないことをすると疲れるものである。

しかも、どこまで行っても同じ景色である。いい加減飽きる。部長も、流石に退屈だという気持ちを隠せない。

「さて・・・」

部長は、携帯を手にとった。この迷路、驚くべきことに（驚くことなのか?）、携帯が繋がるのである。

律儀に携帯番号を押す部長。部長の辞書に、「短縮」と「電話帳」の文字は無い。

電話が繋がった。相手は・・・。

「はい」

「ふむ。もしもではなく、ビジネスで通じる「はい」で答えてくれたのは実に良いぞ、綾波君」

「ええ、部長さん」

「さて、そちらの調子はどうかな？」

「順調です」

「そうか。あの方法は、時間がかかるが確実にだからな」

「そうですね」

「順調ならばそれで良い。切るぞ」

「はい」

電話を切った。部長は、綾波に別ルートで行かせたのである。

「順調ならよいな・・・待て」

部長は、考えていた。彼は今、どうしているであろう。

「まあ、順調に迷っていることだろう」

部長は、そう断定した。しかし、部長は信じていた。私の教えたことを、必ずしや思い出すであろうと。

三

その時。天井の蛍光灯がいつせいに消えた。

「むー！」

部長は身構えた。何故に消えた。停電か！？部長は思考を巡らせた。

しかし、迷路内部では、外の様子は分からない。そこで、携帯で外部に連絡することにした。

「あつ、誰から・・・はい。・・・兄さん、どうしたの」

「妹よ、大変なことになった」

「何？」

「突然、迷路の蛍光灯が消えたのだ。ちょっと調べてくれ」

「わかったわ」

部長は、しばし待った。・・・そして。

「・・・早いな・・・ふむ」

「兄さん、分かったわ。電気系統に異常が発生して、迷路内に電気が来なくなっただって。迷路入り口は閉鎖されたわ」

「そうか。分かった」

そう言つて、部長は電話を切った。

「停電か・・・これはえらいことになりそうだな・・・」

そのころ。

「疲れた・・・」

「そうですね・・・」

かれこれ30分ほどだろうか。怖さよりも前に、疲れが出てきた。

「そろそろ休憩しよう。流石に疲れた・・・」

「そうしましょう・・・」

そして、道端で休もうとしたその時。

「うわっ！・・・何だ！？」

突然目の前が真っ暗になった。

「何だ・・・こりゃ・・・」

いきなり蛍光灯が消えたのである。そりゃ驚く。演出か、と思つたが、一向に回復する兆しは無い。

「・・・停電？」

そう考えた。珍しいが、ありえないことではないだろう。・・・だが。

大きな声で言えないが、僕は、暗闇が大の苦手なのだ。

足が、無意識のうちに速くなる。悟られてはならないと考えながらも、体が勝手に動くのだ。

「あの・・・早足になっていませんか？」

「・・・」

「あの、だから・・・早足になっていませんか？」

「え？」

やっと体が止まった。

「・・・大丈夫ですか、？」

「だ、大丈夫大丈夫」

大丈夫ではない。頭の中には、恐怖がまだ渦巻いている。

気を取り直して歩き始めた。依然恐怖があるが、ここはただひたすら我慢。（さすがに格好悪いし）

そうして、迷路を進んでいった。

ところが！

「きゃーーーーー！」

女性の叫び声が聞こえた。・・・それも近く！

・・・頭の中のなにかが、プチンと切れた。

僕は何故か、前に向かって駆け出した。ずっと、ずっと・・・。

1分ほどたっただろうか。さすがに疲れ、僕は足を止めた。

「・・・ご、ごめんね・・・いきなり走って・・・」

謝りながら、僕は振り向いた。・・・だが。

洋子さんがいない！！！！

おおよよ。ま、まずい・・・。まるで、僕が驚いて逃げたみたいではないか。

辺りを探すが、い、いない。どうやら、相当の距離を走ったらしい。

僕は諦めて、出口を目指したのだった。

四

相当（30分？）歩いたであろうか。僕はまだ、果ての無い迷路

を突き進んでいた。

懐中電灯の類は、（まあ当然だが）全く持っていない。だから、ますます不安になる。

頭の中から、恐怖は消えていた。なぜなら、「もしかして出られないんじゃない……。」という気持ちが極限まで高まってきたからである。

出口、出口、出口。まるで、喫煙所を求めてさまよい歩くヘビースモーカーのように、僕はこの暗黒をさまよい歩いた。

そのとき。

「灯りだ！」

僕の前の道に、光が見えた。おそらく懐中電灯。そう、人である！僕は、やっと喫煙所を見つけてダッシュするヘビースモーカーのように、猛然とダッシュした。頭の中はすでに、空である。

そして、その相手との距離が1mほどになったとき、僕は、相手の顔を見た……あつ、あああああ！？

僕は、その相手と思いつきり激突した。

「いったーい。……あああ！？」

「ええ！？」

「なんであんたがここにいるのよ！？」

「べ……別にいいじゃないか。ここから出れないんだから」

「『出れない』じゃなくて『出られない』じゃないの？」

「うっ……」

バレバレだったか。

「いったいどれだけ迷路苦手なの……」

「え、じゃあなんでアス力はこんなところに？」

「き、決まっているじゃない。もう一回迷路に入って楽しんでいるのよ」

「・・・ほ、本当に？」

「ええ」

「じゃあ・・・出口知ってるわけ!？」

「ええっ・・・当然よ」

「本当に？本当に!？」

「・・・本当よ」

「なんか間が空いていた気がするけど・・・」

「気のせいよ」

こうして僕は、アスカに先導されながら、出口を目指すことにした。

また30分ほど経過。

「・・・まだ着かないの？」

「当然よ。この迷路はとて広いんだから」

「そ、そうだよね・・・」

人間、ひとりぼっちはやっぱり寂しいものである。それが、もう一人いるだけで随分安心する。

だが、やっぱり何かおかしくないだろうか。

入って10分で停電し、30分ほどたってから走り出し、1分たつてからまた歩き出し、30分ほど歩き、そしてこうして30分ほど二人で歩いている。合計で1時間41分。それでまだ着かないって・・・。

いくら僕が迷路に弱くても、もうそろそろ着いてもいいころである。僕はそう考えた。

あの歯切れの悪いコメントにしても、もしかして、見栄を張っているだけではなからうか。

僕がアスカに対して不信を抱いていたとき、それを裏付ける決定的な出来事が起きた。

「・・・あっ」

「・・・三方壁。ってことは・・・」

「行き止まり・・・」

「・・・ちよつと待って」

「な、何よ」

「アス力、迷路の出口、知っているんだよね？」

「そうよ」

「じゃあ、何でこんな・・・ところに・・・」

「・・・ちよ、ちよつと、アンタ、私を疑っているわけ!？」

「うん。・・・あつ」

しまった。つい本音を。

「なにが『うん』よ。やっぱり疑っていたんじゃない。さつきから態度がなんかおかしいと思ったら・・・」

「そういうアス力だって、なかなか出口に着かないじゃないか」

「だから、この迷路はとでもでかいのよ。だから・・・」

「でも僕は、アス力に会うまでに1時間以上歩いたんだよ。さすがにある程度進んでいるはずだよ。で、さらに30分歩いて出口の「で」も出ないなんておかしいじゃないか」

「・・・」

「だから、もしかして・・・」

「ああそうよ。そんなの知らないわよ。そもそも、こんな迷路。一度出たら、もう一回入るわけ無いじゃないの」

「やっぱり！僕に嘘ついていたんだ」

「あんたも気付きなさいよ。・・・そんなに責めるんなら、あんたはなにか出方を知っているというの」

「え？」

「そんなに言うんなら、私に出方ってもんを教えてもらおうじゃないの。いっつも部長と一緒にいるんだから、なんか部長から聞いていないの」

はつきり言って逆切れである。・・・だが。僕は、アス力の発言の一部が気になった。

「・・・ちよつと待って。もう一回言って」

「はあ？だから、私に出方ってもんを・・・」

「その後」

「後？え、いつも部長と一緒にだから、部長から何か聞いてないか、かしら」

「それだ！」

「え？」

「それだよ。・・・（思い出そうとしている）・・・あつ。思い出した！」

「えつ、・・・何を？」

「何って・・・迷路の出方だよ。一回、教えてもらった記憶がある！」

「ええつ！？本当！？」

「うん！」

僕は、アスカの手をしっかりと握って（はぐれないように、である）走り出した。

五

そう、それは、一ヶ月ほど前のこと。

僕は、雑誌の迷路に挑戦していた。

「うゝん・・・難しいな・・・」

なにせ複雑な迷路なので、なかなか出口に辿り着かない。

そのとき。部長の声が聞こえた。

「どうしたかね？」

「あつ、部長。いや、ちょっと、迷路に挑戦してまして」

「迷路か・・・ふつ、簡単だな」

「簡単！？この迷路が！？」

「どんな迷路もだよ。実はな、迷路には、『必勝法』が存在するのだよ」

「ひ、必勝法！？」

「そうだ。それを使えば、どんな迷路だって解ける。いいか・・・」
そうして部長は、鉛筆を持って、目の前でそれを見せてくれた。

「いいか。まず、こうして袋小路を塗りつぶす」
「うんうん」

「そして、塗りつぶしたことによって新しくできた袋小路をまた塗りつぶす」

「うん」

「で、それをひたすら繰り返す」

「・・・」

気の遠くなるような作業に思えたが、意外と早く終わった。

「そうして、塗りつぶされていない所が、入口から出口へのコースだよ！」

「おおお！」

そう。この方法では、袋小路、つまり行き止まりにたどり着く経路は全て塗りつぶされ、後は答しか残らない。まったくもって、完璧な方法である。

しばらく感心していた僕だが、ふと、こんな疑問が浮かんだ。

「あの・・・部長？」

「何かな？」

「ふと思ったのですが・・・ほら、人が入って楽しむ迷路って、ありますよね。あれの場合は、どうしたらいいのですか。それだと、袋小路を塗りつぶす方法は使えないし・・・」

「・・・ふつ。簡単なことだよ、それくらい」

「ええっ!？」

言ってみただけなのに！

「いいかね。まず、頭の中に、長方形の枠を思い浮かべてごらん」
「はっ・・・はい」

「そして、上の辺のどこから、穴を掘り始めることを考える。まあ入口だ」

「はい」

「前に掘ったものと重ならないように掘っていくと、いつしか外に出る。それが出口と考える」

「・・・はい」

「さて、だ。今、長方形の一边から一边まで、穴を掘ったことになるね」

「そうですね」

「つまり、そうしたとき、長方形は、二つの部分に分かれている、ということになる」

えっ。なんでそうなるの？

「ちよつと待つてください。なんでそんなことが言えるのですか？」

「常識で考え給え。もし二つの部分に分かれずに一つのままなら、途中で少なくとも一箇所は繋がっていたことになる。しかし、だ。それだと、一边から一边まで穴を掘ったことにはならない」

「・・・本当だ」

「又、一边から一边まで重ならず掘ったとき、トポロジ的には、二つの四角形と同相になる。つまり、二つに分かれているわけだ」

「と、とぼるじー？どーそー？・・・なんですかそれ？」

「ふむ。そういえばまだ君には話していなかったな。まあ、今回は迷路の解き方についての話だから、トポロジーについての説明は割愛させてもらう。読者の方は、数学書などを参考にしたまえ」

「（誰に話しているのだろう）・・・で、結局、迷路からはどうやって出るのですか？」

「・・・そうだ。話を元に戻そう。つまり、二つの部分に分かれているということは、一方の部分の辺を伝っていけば、反対側まで出られる、ということだ」

「一方の部分の辺を・・・あつ、そういうことか！」

「そうだ。ちなみに、実際の迷路には行き止まりとかががあるが、結局は、その二つに分ける穴からそれぞれの辺に支線を通したようなもので、どちらにしても、二つに分かれていることには代わらないし、トポロジ的にもやはり同相だ」

「（トポロジーって・・・今は聞かないでおこう）ようするに、こ
うですか？片方の手を迷路につけたまま走ると、確実に出口までた
どり着けると・・・」

「よくまとめてくれたな・・・その通りだ」

「なるほどー。それが、迷路の必勝法だったのですね」

「・・・だが、これは、普通の平面状の迷路での話だ。立体交差し
ていたり、特定の場所を通過しなければいけない形式の迷路には使
えない。気をつけるように」

「・・・はあ」

僕は、その方法を思い出しながら、暗闇の中をひたすら走ってい
た。

「はあはあ・・・ちよつとー、まだなの？」

「何が？」

「だからさー、まだ着かないのか、って聞いてんの」

「あのさー、まだ30分もたっていないんだよ。ちよつとは我慢し
ようよ・・・」

「我慢って・・・」

アス力が愚痴を僕にぶつけようとした、その時。

白い光が、僕の目に映った。

「出口だ！」

僕らは、全速力で、外に向かって、駆け出した・・・。

六

外に出た。

合計で、2時間11分。やっと、日の光を見ることができた。

僕は、久しぶりに、日光の心地よさを感じていた。

その時。部長の声がした。

「（拍手をしてから）おめでとう。私の方法を思い出したかね」

「はい。・・・まあ、アスカに言われて初めて気づいた方法ですけど」

「一体、どんな方法なのよ」

アスカが部長に聞いた。すると部長は、

「ふむ。・・・私の口からは言えないな（簡単すぎて）。碇君、君が教えなさい」

と、僕に振ってきた。

「えっ・・・僕が？」

「そうよ。教えなさいよ。一体どうやってこの迷路から出たのよ」

普通に教えようと一瞬思ったが、ちよつと、反省してもらわなきゃ、と考え直した。

「・・・それが、一回この迷路から出て入った人の言うことですか・・・」

「ん？君は、碇君にそんなボラを吹いたのかね」

「えっ・・・ちよつとシンジ、それは違うって迷路内で・・・」

「やっぱりボラではないか。碇君、教えんでよいぞ」

「はい。分かっています」

「もー、二人して何なのよ。教えないよー」

そうして掛け合いを楽しんでいたとき、聞き覚えのある声がした。

「あー！シンジ様、叫び声に驚いて逃げ出したかと思ったら、惣流さんと一緒に楽しんでいたのですね！」

「（よ、洋子さん！？）ち、違・・・」

「まったく。君は、女性を一人にして逃げるような奴だったのかね」

「ぶ、部長、これには訳が・・・」

「どんな訳が？」

「・・・あああ！？」

声のほうを振り向くと、クラスの大多数が、既に迷路から出てい

たことが分かった。・・・恥ずかしい。

やつかみと冷やかしがこだまする。僕はただ、顔を赤くしてうつむいているより他になかった。

人生、暗闇の中で模索することもあります。答は、もしかしてないのではないのか。そんな言葉が脳裏を掠めたりもします。

しかし。答がある、そう考えて行動するほうが、きっと良い結果を残せる。私は、そう考えます。

第十話 大迷宮（後書き）

えー、久々の連続投稿です。書き溜めていたのをアップしたのです。文章がくどいかもしれませんが、ご了承ください。

第十一話 相合傘

—

「朝は晴れてたのに・・・」

それは、ある雨の日のことだった。授業も終わり、やれやれと思いながら靴箱まで来た時、初めて、自分の置き傘が無いことに気が付いた。・・・まあ、置いていなかったただけのことだが。

少しうろたえたが、すぐに僕は、鞆をまさぐり始めた。

「そう言えば、鞆の中に折り畳み傘が入っていたはず」

あるはずだ。いや、きつとあってくれ。そんな願いを込めながら僕は鞆をまさぐった。

しかし、期待とは裏腹に、傘らしき物体は全くとして感じられなかったのだった。

「この雨の中を帰れと言うのか・・・」

僕は、そうため息をついた。

しかし人間。窮地に陥った時に閃くこともある。僕は思い出したのだ。

「あ・・・そう言えば、学校に置き傘があつたはず！」

勿論、『自分の』ではない。学校が、傘が無い哀れな子羊のために、共用の置き傘（落し物転用）を設置しているのだ。

早速僕は、その置き傘置き場に向かった。

・・・が。

「・・・あれ？」

その傘置き場に、一本のピンクの傘が挿してあつた。

変だな、と思いながらとりあえず開いてみた。すると、その柄に驚いた。

「・・・なんじゃ、こりゃ・・・」

驚くべきことに、ピンクのカバー（地）に赤いハートマークが散りばめられている。露先（広げたときのでっぱり）のところにもハートが吊るされているし、手元（持ち手）も石突（傘の先端）もシヨッキングピンク。女の子用の傘でもここまで派手じゃないだろう。傘を持って広げたまま呆然としてみると、友人の鈴原と相田が来た。

「おう碇、どないし・・・い!？」

勿論、傘を見た瞬間に二人とも固まってしまったのである。

「・・・い、いや、傘置き場に変なのが挿してあるなと思って・・・」

「（そんな照れんでも・・・）いや、それは分かるが、それは・・・」

「その傘は・・・」

「？」

次の言葉は二人同時だった。

「あの伝説の相合傘なんじゃ!？」

「・・・は？」

「この学校で『伝説』とされ、長らく確認できなかったものが今目の前に・・・!」

「なんと素晴らしい日や!奇跡や!恵まれてるんや!」

「・・・『伝説』って・・・なんなの?」

「知らんのか碇は!」

「この傘はなあ・・・」

そう、二人が言いかけたその時。木村さんがやってきたのだった。

二

「あの一、三人でどうし・・・えっ!？」

恐るべし『伝説』の傘。木村さんも見て固まってしまった。

「……き、木村か……。いや、待て！碇！この傘の『伝説』の証拠を見せてやる！トウジ！今や！」

「おうよ！……すまん木村さん！」

そう云うと、二人で木村さんの背中を僕に向かって押し出した。

「あつ……」

と言いながらも、なんとかこけずに、木村さんが傘の中に入った。その瞬間。突然傘が光を放ち、僕ら二人を一瞬包んだ。

その後すぐ、なんだか頭がくらくらとしだし、木村さんが輝いて見え、鼓動が速くなり、顔が高揚しだし……。

途中でバツと傘を離れた。無論、危険だと感じたからだ。

「あ、危なかった……」

「何が『危なかった』ですの！」

「にしてもすさまじい威力やな……」

……などとしやべっていた時。

大量の視線を感じた。

周りを見渡すと、傘を見て気になったらしい沢山の生徒たちがいたのだった。

三

そこはまさに、戦場だった。

傘を持って逃げようとする生徒。

それを見て手を伸ばして取ろうとする生徒。

直接にぶつかりに行く生徒。

十人以上が傘を奪い合う中、僕らはただ、見守ることしか出来ない……。

「早く帰ろうと思ったのに……」

「あの傘見つけたのが運の尽きやな」

「て言うか、他の傘取って早く帰ればいいじゃない」

「でも、人が多すぎて道をふさいでいるんですよ・・・」

「なんか醜すぎてあまり撮りたくない光景だな」

・・・などと僕はぼやいていた。まあ他の通路からも帰れるのだが、傘の行方が気になるので帰るに帰れないのである。

そうして、しばらく眺めていると、突然、皆の動きが止まった。

「センサーでも出てきたんか？」

鈴原がそう呟いたが、実際は違っていた。

生徒らが道を空けた。そして、傘を握っていたのは・・・綾波だった。

「綾波！」

思わず一度叫んでみる。しかし、喋りかけるのは止めた。なぜなら、その傘をどう使うか、皆が興味津々と見つめていたからである。

「あなた・・・それがどんな傘か、知ってるの？」

一人の女子生徒が尋ねた。

「ええ」

綾波はそう答えると、閉じた傘を片手に握りながらすたすたと人の間を抜けていった。

僕らの横を通り過ぎ、廊下側に出た。そして、その傘を、部長に渡したのだった。

四

「ありがとう、綾波君」

「どうもいたしまして」

挨拶もそこそこに、部長はその傘を持ってこう叫んだ。

「皆の者！何を考えているか知らんが、私は別にこの傘を使おうと思っているわけではない」

その瞬間、僕は首をかしげた。『使おう』と言うからにはどんな傘が分かっているはずだ。他人（綾波）まで使わせて、一体傘をどうすると言つのか？

部長の言葉は続く。

「これは学校で発見された傘だ。元の所有者も不明。ならば、学校にその権利は帰属する」と考えてもおかしくは無いだろう?」

部長が最後まで言い終わった瞬間、皆から怒号があがった。

「なんでだよ！」

「学校の物になるなんておかしいじゃねえか！」

「そうだそうだ！」

それを聞いて怒ったのか、部長の声が一層大きくなった。

「黙れ黙れ！このようなオソロシイ傘が野放しにされることなどあってはならんからいつとるのだ！・・・帰るぞ」

そう言つて部長は全速力で廊下から校内へとダッシュした。それを見た僕は、一斉に追いかけた。

五

鍛えているのだろうか。小太りな割りには、中々走りは速かった。……だが、追いかける方も必死である。

「待てええええええ！」

などと叫びながら、先頭集団はじりじりと部長に近づいていく。

これは追いつかれるな……と思ったら。

「妹よ、パスだー！ー！」

なんと部長は、窓からその傘を放り投げた。それも、ヤケクソでなく、ちゃんと相手にパスしていた。

「わかったわ！兄さん！」

その少女の方を見ると、髪は切りそろえられていて短髪、そして服はなぜか白衣であつた。

そして少女は、傘を持って今度は校門側に走り出す。こちらも結

構速かった。

そんな少女を見逃すハズも無く、皆は窓を乗り越えて（注：一階である）、少女を追いかけた。

が。その時、事件が起きた。

その少女が、転んだのだ。

単なる転倒ならまだいい。しかし、傘を握ったまま、それも思いっきり大きく転んだ。

速度が乗っていたのだろう。よろよろと彼女は立ち上がった。そして、右手に持った傘を見て、彼女は叫んだ。

「あー！ー！」

それを聞いて思わず皆の足が止まる。

「そんな・・・そんな・・・」

その場から動かない彼女に近づいてみると。

傘が、握ったところから大きく曲がっていた。

結局生徒らは、多大な疲労と失望感を抱えながら下校することになった。無論、傘が壊れたからである。

「あーあ、結局壊れちゃったわねー」

「伝説の傘も形無しやな」

そんな友人の声を聞きながら、結局洋子さんの傘を借りることになった。・・・勿論、相合傘状態である。

「シンジ様と同じ傘に入れるなんて・・・幸せ」

「傘が狭い・・・」

なんことを言いながらふと横を見ると、転んだせいで顔と白衣がひどく汚れた少女と部長がいた。

「ごめんなさい・・・」

「まあそう悲しむな、妹よ。まだ”修理に出す”という可能性があるではないか」

「部長・・・妹がいたんですか？」

「私に妹がいては悪いかね？」

「いえ、別に・・・」

そう話していた時、部長の妹が僕に話しかけてきた。

「あ、あの、淀さんですか？」

「え、あ、そうだけど？」

「わ、私、兄さんの妹の、影山遥香です。よろしく・・・お願いします」

「こちらこそよろしく」

相合傘。昔からその行為は存在したらしく、江戸時代の文学にもしばしば覗かせる。それを表した落書きも、今日まで存在する。歌にもなり、知らぬ者はいないほどである。

和傘は1400年、洋傘は4000年以上前から使われてきた。

その素朴な仕組みとは裏腹に、現代でもごく普通に存在する傘。傘がある限り、相合傘もまた存在し続けるのだらう。

第十二話 雨宿り

—

それは、休日のことだった。近くの本屋から歩いて帰っていた時、空からぽつりぽつりと、「天からの恵み」が降ってきた。

「・・・え、雨!？」

突然の雨に僕は、慌てて近くの店の屋根の下に避難した。

「危ない危ない・・・ん？」

ふと横を見ると、そこには、一人の若いサラリーマンがいた。それだけなら別に驚かないのだが、そのサラリーマンのつぶやきを聞いて驚いた。

「いきなりの雨か・・・もう何万回目かな」

ま・・・万? 1万回としても27年・・・そんなに!?

とりあえず、聞いてみることにした。

「あの・・・」

「え? 何？」

「・・・今、『何万回』って、言いませんでしたか」

「ああ、言いましたよ。それが？」

「いや、10日に1日雨が降るとしても万までいくことは無いんじゃない・・・」

すると、そのサラリーマンから、衝撃的な言葉が発せられた。

「あ、気が付いた? まあ、千年ぐらいは生きてるからね・・・」

「せ・・・千年!？」

「まあ、いまさら隠すことじゃないし・・・」

どう考えても嘘だろう・・・でも、とりあえず確かめてみよう。

「千年って・・・、本当じゃないですよ? 肌も皺はないし・・・」

「ああ、まあみんなそう言うよね。ま、『不老不死』なんだから仕方がないか」

「ふつ、『不老不死』!？」

不老不死。人類の不変の夢であり、希望でもある。でも、まさかそんな……。

普通の人なら笑い飛ばすところだが、僕はなぜか嘘に思えなくなっていた。なぜなら、顔がホラを吹くような顔じゃなかったからである。

「……今まで、一体何をしていたのですか？そんな長い間……」
「そうだな……」

彼の、長い話が始まった。

二

「生まれは945年8月14日、今で言うところの平安時代。貴族の家柄だ。……勿論藤原家とかじゃないぞ」

「そうなんですか……」

よく覚えているなあ、と思ったが、とりあえず黙っていた。

「今にして思えば、農民出じゃなくて良かったと思っているよ……300年ほどしたら農民になるけど」

「えっ、300年？」

な、何で？思わず僕は突っ込んだ。

「鎌倉時代だからね。藤原氏とか以外は落ちぶれていくのさ」

あ……なるほど。

「まあ、話を戻そう。そこからすくすくと成長し、元服し、『最初の』奥さんをもろう」

「『最初の』って……まさか、離婚したんですか？」

「違う違う！そこからが重要なところだ。20年ほどは幸せに暮らしていたが、あるとき妻が、私を見て、私がいまだに結婚当時の若々しいままであることに気がつく」

「まあ、20年も経ったら、普通は色々と違ってくるものですよね……」

「その時私は驚いたんだ。もしかして私は、年を取らない人なのではないのか。その日のことは、いまでも強く印象に残っている。・ ・ 雨の日だったかな」

「・ ・ ・」

人間、他人に指摘されないと分らないものである。

「その後は大変だったよ。ある時、天皇直々に呼び出されたんだ」
「なんで・ ・ ・ あ」

「そう。君の想像通りだよ。『どうして年を取らぬのか』『なにか秘術でも使っているのか』などの質問攻め。参ったよ、ありゃ」
「そりゃ・ ・ ・ そうでしょうね・ ・ ・」

「本当に何も知らないつてのに、誤解されて木に縛り付けられたりもしたよ。・ ・ ・ まあ最後には納得してくれたが、居たたまれなかったなあ」

「・ ・ ・ はあ」

「初めの悲しみは、その妻が亡くなった時だ。妻はもう年老いて皺も多いにも関わらず、私はこのように若々しい姿。この時ばかりは自分を呪ったね」

「・ ・ ・」

「次に友人やライバル、敵。そして自分の子も、みんなこの世から去っていく。そしてどうなると思う？」

「えっ？」

「独りになるんだ。私を知るのは遠い孫のみ。繋がりが無くなって、完全にこの世の中で孤立するんだ」

「・ ・ ・」

人間、孤立すると、非常に辛くなる（僕も同じような目に遭った・ ・ ・ 自業自得？）。しかし、そこをなんとか耐えたらしい。

「寂しい日々の後、突然貴族社会と言うのがぶっ壊される。頼朝公のお出ました。貴族じゃやっていけないくなって、結局武士の長になった。とは言っても、弱小だがな。結婚は、50年ほどしなかった。あのような思いは、もうしたくないからな・ ・ ・」

「そ、そうなんですか・・・」

「寂しくなつて、（年をごまかして）一人の女性と結婚したはいいのだが、今度は大変な焼き餅焼きでな、私が若々しいものだから、浮気をするのではといつも付いて来るのが厄介だったな。はっはっは」

「それは大変ですね・・・」

「だが、その妻も、すぐに逝ってしまった。大病でな。出来ることなら、私の寿命を削つてでも生き長らえて欲しかった」

「・・・」

明るく言つてはいるが、ずいぶん残酷なことである。

「そこから時代は移り行く。農民になり、職人になり、商人になり、そしてまた武士になり。もう妻はもらわないと私は固く決心した。そして、だ」

「そして？」

「明治時代になった。私は今度は軍人になった。なんとかな。それはいいのだが、農民の反乱に出兵したとき、一生忘れないであろうあることをしでかしてしまう」

「・・・なんですか？」

一生忘れないであろうこと？僕は彼に問うてみた。しかし、その回答は。

「・・・人を、罪も無い人を、殺してしまったんだ」

三

「・・・」

「そう。私はその時まで、たとえ武士だったときでも、人を殺したことは無かった。だからいつも、『弱虫』とか『臆病』などとなじられていたけどな。でも、それだけが自慢だった」

「そりゃそうですよね・・・」

誰だつて、人を殺したくないに決まっている。

「軍人になつても、それは変わらないつもりだった。発砲してもワザと外す。そのつもりだったんだ」

「じゃあ、なぜ・・・」

「農民の一人が私に襲い掛かってきてな。思わず発砲してしまった。その弾が偶然、その農民の胸に当たって、そのまま、息絶えたんだ」
「・・・」

「私は、ただ泣きじゃくつたよ。その、銃弾が飛び交うそのところで。仲間の兵は私など無視して発砲していたがな」

「・・・非情ですね・・・」

「軍隊とはそういうものだ。その後私は軍隊を辞め、しばらく享樂にふける。自分を失つたのだろくなあ、今にして思えば」

「・・・」

悲劇である。人を苦しめるのは、やはり人なのだ。

「そしてそれも飽きて、私は、ただふらふらと暮らしていた。日雇いの仕事を転々としていた。そうして百年ほど経つた時、あの戦いが始まつたんだ・・・」

「百年後というと・・・太平洋戦争？」

「それだ！仕事も少なくなり、国民皆兵、欲しがりません勝つまでは・・・お偉いさんが歴史上どれだけ好き勝手やっていたか、私は長い間見てきたはずなのにな・・・。そして、戦争が終わつた時、私は悟つた」

「な、何を？」

「私は、歴史の生き字引となろうと」

四

生き字引。そのために、彼の努力が語られた。

「そこからは必死だった。10年の歳月を掛けて、科学・言語学・歴史学・経済学・社会学・・・。ほぼ全ての分野の『。学』を制覇した」

「す．．．すごいですね．．．そんな．．．」

人間、時間を掛ければ、何でも出来るものなんだなあ。

「東大、阪大、京大、．．．一流大学も全て通った。それもこれも若さ、だな」

「イヤ、『若さ』って、もはやそんな問題じゃないんじゃない．．．」
凄すぎである。

「そんなこと無いさ。人間、頑張れば、無限の可能性があるのさ」
「そんなもんですなね．．．」

．．．そう答えるしかない。

「そんなもんだよ。今まで数え切れないほどの人を見てきた私が言うんだから間違いない！」

「そ、そうですね．．．」

中々強気な人である。歴史がそうさせるのか。

「．．．そして今、私はここにいます。私は、長い間生きていて思う．．．」

「何ですか？」

何を語ってくれるかと、耳をそば立てた。

「君はもう高校生なんだから、歴史は既に習っているだろう。歴史の通り．．．まあ時々変更もあったりするが、世の中はコロコロ変わっていく。昔も今も、そして未来も」

「実際そうですね．．．って、なんで僕が高校生だと分かるんですか？」

そうである。

「『年の功』だよ．．．と言うのは冗談で、その胸のバッチ、北上高校のものだろう？歴史ある学校だからな。よく覚えているよ」

「あ、ありがとうございます．．．」

嬉しい。

「それは置いといて。確かにコロコロ変わって来たが、変わらないものもある。例えば自然。ずっと昔から、ハレー彗星は時折地球にやって来る。日食も月食も、変わらぬリズムを刻んでいる」

「ハレー彗星？あの76年ごとの・・・何十回も見たんですね・・・羨ましいなあ・・・」

医学が進み、平均寿命が伸びた現代でも、どう長生きしても2回しかハレー彗星は見えない。それをこの人は、何十回も見ながら歴史を歩いてきたのだ。

「そうだろう。たとえ平和だろうが殺伐としていようが、それは全く変わらない」

「まあ、そうですね・・・」

「そして、だ。人も変わらないものだ、昔も今も。どの時代でも、裕福に暮らす者と貧困にあえぐ者とが居る。たとえ何度社会が変わっても、それだけは無くならなかった。一時、共産主義なんてのがあったがそれも潰れてしまった」

「そうなんですか・・・」

貧富の差は、いつになっても変わらないのか。

「しかし、だ。それを変えていくのは、君たちなのかもしれない」
「！」

突然の切り替えしに、僕は驚いた。

「たとえ一人では難しいことも、皆で力を合わせれば変えられる。それは、いつの時代でも変わらない、人類不変の定理だ。それを生かすも生かさないのも君たちの行動にかかっている。・・・私も頑張るけどな」

「はい！」

五

気づけば雨も上がり、日が差していた。そしていつの間にか、あのサラリーマンは居なくなっていた。

どこに行つたのだろう。そう思って近くをきよろきよろしていたら、偶然部長の姿が見えた。

「あつ、部長」

「何かね。どうかしたかね」

「あの部長、知らないかもしれないし、唐突だと思っんですけど・
・少し前、雨宿りしていると、なんだか『不老不死』とか言うサラ
リーマンが居ましてね・・・」

「そこまで話すと、普通に聞いていた部長の態度が変わった。

「何。それは本当か!？」

「ほ、本当です・・・」

「彼は、『三木原利長』^{みきはらとしなが}と言う、『生ける伝説』とまで言われた存
在だ。彼は、戸籍も持たず、職も持たず、ふらふらと日雇いで生計
を立てている、そんな男だ」

「戸籍も職も・・・って、ええ!？じゃあ、なんでサラリーマン姿
なんですか!？」

「そう突っ込むと、部長は冷静に、こう答えた。

「あのなあ、戸籍も無いのに、どうやって履歴書を出せる?だから
免許・パスポート類も持っていないし、大学だって、戸籍を偽装し
て通った物だ。まあ、昔は牧歌的だったからなあ」

「・・・そうだったんですか・・・」

「まあ、あの人の話には少しホラっぽいところもあったけど。

「サラリーマン姿なのは、少しでもマジメそうに見せるからだ(実
際真面目だけども・・・)。そうでもしてその日その日を食いつな
いで生きている訳だ」

「ここまで聞いて、僕はふと疑問が思い浮かんだ。

「そうなんですか・・・じゃあ何で、テレビに出たりしないんです
か?有名になったら、少しは戸籍を取れる可能性もあるのに・・・」
「そう言うと、部長が呆れた声で返した。

「あのなあ・・・そんなことをしても、取材が鬱陶しいだけだし、
第一証明出来ないだろう、そんなこと。それに、『民衆はすぐに忘
れる』、それを誰よりも知っている彼だぞ。そんなこと、する訳が
無い」

「・・・」

「それにしても、碇君は中々運が良い。彼は滅多に長話をしないからな。気があつたのだらう」

「ま、まあ・・・」

「おや、そろそろ用事の時間だ。行かねば」

そう言つて、部長は去つていった。

千年生きなくても、私たちは、過去のことをある程度知ることが出来る。それは、多くの人々が努力して、『歴史』を記録に残してきたからだ。あの人は、それを全てその目で見てきたわけだが、学者の前には現れない。だからこそ、歴史学者の存在価値があるのかもしれない。

第十二話 雨宿り（後書き）

うーん。この話は少し自信作。でもなあ、なんか違うような・・・。

とにかく、読んでいただけたら幸いです。

第十三話 偽物の愛情

—

——影山邸。

”それなりに” 広大な土地と、その土地一杯に建つ大きな邸宅から成っている。

その中の一室で、影山遥香は広大なネット空間でとある品物を探していた。

「うーん・・・なかなか見つからないなあ」

それば別にファッションに関するものでは無かった。化学関係でも無かった。ましてや、世間一般で言う「流行物」でもなかった。

「・・・あ！これだこれ！」

彼女の目の前に表示された品物は・・・「矢と弓」であった。

今までに数回、同じような品物を購入してみたことがある。

「でも、とんだ偽物だった」

近くにいた召使に撃ってみたものの、「矢が当たって痛い」以上の効果は得られなかった。

「でも、今度は違う」

某掲示板でも話題になりつつある。限定1万セット。値段も手ごろ。手に入れない理由など無い。

彼女は、「購入」のボタンをクリックした——。

「これかあ・・・」

数日後に、その品物は届いた。見たところ、普通に矢と弓である。

・・・矢にピンク色のハートマークがついている以外は。

「・・・早速テストね」

取扱説明書も早々に、彼女は矢を構え、たまたま近くにいた召使

に指図した。

「あ……ちよつとすみませんが……」

「え？」

彼が振り向いた瞬間、彼女は弓を引き絞り、矢を発射した。近距離だったせいか、その矢は吸い込まれるように彼の胸に命中した。

その瞬間、彼はその場に倒れこんだ。

「……え！？ちよ、大丈夫ですか！？」

「倒れる」なんて取扱説明書に書いていなかったような……。

彼女は思わずダッシュで近づき、状態を確認してみた。

息はしている。おそらく力が抜けただけだろう。

見ていると、彼はこう呟いた。

「う、美しい……」

これ以上何かあっても困るので、彼女は手に持っていたもう一つの矢を彼に突き刺した。それには青色の割れたハートマークが付いている。

「……はっ！す、すみません！」

「まあ、別にいいわよ」

そう。どうでも良かった、そんなことは。

それよりも、「今度こそ本物」であることが重要なのだ。

彼女は、急いで部屋に戻り、一本を分析に回した。そしてもう一本と弓を鞘に入れ、

「これでよし！」

と呟いたのだった。

二

そして次の日。彼女は行動に移った。

その時僕は、配布係で荷物を抱えて部屋から出たころだった。

重いなあ、と愚痴りながら歩いていると、背後からひゅん、と言う音がした。

何なのかと振り返る間も無く、突然全身の力が抜けた。その場に倒れこみ、僕の意識が一瞬途絶えた。

「やったあー！」

矢が当たり、遥香は小躍りして喜んだ。無論、ぶつつけ本番で成功するとは思わなかったからである。

しかし、いつまでも喜んではいられない。彼女はすぐさま彼に走り寄り、彼を揺り起こした。

「碇さん、大丈夫ですか!？」

「・・・ああ、大丈夫だけど・・・」

その後彼女は、彼と一緒に荷物を持って教室へと向かったのだった。

その日の放課後。

「・・・なんだあれは」

「さあ・・・」

それは、普段の彼からしてみれば相当に異様な光景であった。なにせ、上機嫌でキーボードを乱れ打っているのである。

「・・・なにか、いいことでもあったんですかね」

「だいいいのだが・・・」

部長以下全員が、不安を感じていたのだった。

そして、その不安は的中したのだった。

三

数日後。朝、部長の家に、一本の電話が掛かった。

「・・・もしもし。木村と申します」

「何だ君か。何かね」

取ったのは部長だった。

「あの・・・実は相談がありました」

「碇の弱点とか好みについての質問か？それなら切るぞ」

「ち、違います！（それもいいですけど）」

「・・・じゃあ何かね？」

「実は・・・、シンジ様が、いないんです」

「いないって・・・家にか？」

「ええ・・・」

「それなら出かけたのではないのかね。何が問題だ？」

「・・・いえ、シンジ様の家では前々から出かける際は必ず何処にいくかホワイトボードで記すのが決まりなんです。ですから、それにも書いてないってことは何かおかしいんです」

「普通に考えると・・・なにか人に知られたくないことをしているようにしか聞こえんな」

「人に知らないことって・・・もしかして!？」

「ああ、それを私も考えていたところだ」

そこで、部長と木村は電話を切った。そして部長は急いで妹の部屋へと向かった。

合鍵を使って開けさせた部屋には、箱や袋が散乱していた。

「よほど興奮して開けたと見えるな・・・」

部長はふとしゃがんで、数枚の紙を手にとった。

「・・・まあ、モノがこれでは無理はないな」

部長の手には伝票と、「恋のキューピッドの矢」と書かれた取扱説明書が握られていた。

四

一同は叫んだ。

「・・・なんで『ここに来い』っていったんですか!？」

そこは町の高台。眼下には大葉公園おおはが見える。

そこに、惣流・相田・鈴原・木村と部長が集まっていた。

「まあまあ落ち着きたまえ。・・・見よ！あそこを！」

そう言つて部長は、大葉公園を指差した。

「・・・よく見えないじゃない」

「公園ですか？」

「双眼鏡で無いと見えんわな・・・あ！」

鈴原が双眼鏡で覗いたその先には・・・碇と遥香がいた。

「なんで公園にいるんや？・・・なんか手つないでるし」

「ウソっ！」

「・・・それ本当ですか！？」

皆が口々に叫ぶ中、部長はこう言つた。

「・・・それでわかつただろう。それを止めることが君らの使命だ」

「・・・止める？」

「どうやって？」

「どうということなのですか？」

部長に皆が聞き返すと、部長が鞆から矢と弓を取り出した。

「なんやその矢・・・」

「みたまんま、『キューピッドの矢』かな？」

「『キューピッドの矢』って・・・なんか嫌なネーミングね・・・」

「その通りだ。こいつは『キューピッドの矢』だ。矢が刺さると、全身の感覚神経と中枢神経に作用し、刺さった者の心拍数を上げ顔を上気させ、視界をぼんやりとさせる。そして、一旦全身の力を抜いてからすぐに戻すようになってる。表面に強力な局所麻酔が掛かるようになってるから矢が刺さったことには気付きもしない」

「はあ・・・そうなんですか」

「夢がない説明やな」

「要するに『吊り橋効果』ってやつですかね」

「・・・って、なんでそんな細かい仕組みが分かるのよ。・・・ま

さかあんたらが作ったの!？」

当然の疑問である。しかし部長は否定した。

「まさか! わが影山家には分析係が存在しているのだ」

「『分析係』って・・・なんて複雑な・・・」

「てかなんやねん『影山家』って・・・」

「いろいろ言っているところ申し訳ないが・・・」

「？」

「この矢には、少し秘密があるのだよ」

そう言つて部長は鞆から、一本の矢を取り出した。しかし、さっきのとは違っていた。

「ピンクの次は青かいな・・・」

「みたままていくと、さっきの矢とは逆の作用をもつみたいですね」

「『鉛の矢』じゃないのね・・・」

「まあその通り。先ほどとは逆の作用・・・と言うより解毒薬のよ
うなものだな。先ほどの作用を無効にする効果がある。ま、それだ
けだから別に人に害はないな・・・木村君!」

「は、はい・・・何ですか？」

「弓道部・・・だったね？」

「はい。・・・まさか・・・」

「そうだ。この矢を彼に向けて放ってほしい」

五

「嫌です!」

「・・・そう即答されても・・・」

「嫌なものは嫌なんです!」

「・・・なんでや?」

「え?」

「なんでシンジに撃つの嫌なんや?」

「そうよ。撃ったらあいつの気も治るじゃない。どうしてよ?」

「・・・だつて」

「『だつて』？」

「だつて、たとえ安全でもシンジ様に矢など向けたくありません！」

「・・・。その言葉で一同が静まり返った。道理である。

「しかし・・・ならばあれでいいのかね？」

部長は木村に、鈴原が持つてきた双眼鏡を渡した。

「え？これで見て・・・ええええ！？」

そこには、碇と遥香とが姿が映し出されていた。

「これは”自然の摂理”ではない。・・・そうだろ？」

「た・・・確かにそうですね！」

「じゃ、やつてもらえるかな？」

「はい！」

「・・・目が本気になった・・・」

そこから、碇シンジ狙撃作戦が開始された。

「弓は和弓に、矢はそれに合わせて長めにしてみた。成分は同じにしているから効き目については問題ない。・・・これでいいかな？」

「はいっ！」

「・・・てか、この距離で狙撃できるんか？ざっと100m以上はあるやる？」

「いや、下方に撃つから飛距離は稼げるな」

「・・・思いつきり『愛』とか関係ない方向に走っているわね・・・」

「

「重力があるから少し上に向けて撃った方がいいぞ」

「・・・などと話しながらも、準備は整った。

「・・・では、行きます！」

木村は弓を大きく引き絞った。そして、矢を撃ち出した！

放たれた矢は空を駆け、木々の間を抜け、そして碇の・・・後方5mのところに刺さった。

「思いつきり外れとるがな！」

双眼鏡を眺めながら鈴原は叫んだ。

「あれ？ちゃんと風の方向まで読んでの一射だったのに・・・」

「あのね、木村さん。・・・人って動くのよ・・・」

「あ！」

「忘れてたのですね・・・」

そんなこんなで第2射。

風を読み、移動方向をも読んで・・・射出！

・・・しかし。

「よりによつてあんなとかいな・・・」

矢は、彼の前方30cmのところに刺さった。

「思いつきりアイツの歩幅じゃない・・・」

「これはバレましたね」

「す・・・すいませんっ！私が不甲斐無いばかりに・・・」

「いや、別に悪いとは誰も言っていないのでは・・・」

そのころ、僕と遥香さんは公園でデートをしていた。

しばらく歩いていたその時、目の前に矢が落ちて・・・いや刺さってきた。

「・・・矢？なんでこんなところに・・・」

僕がそう訝しがると、彼女は飛んできた方向に振り向き、そして僕にこう叫んだ。

「逃げましょ！碇さん」

「え？・・・逃げる？」

「そうよ。・・・ゆっくり話している時間は無いわ、急いで！」

そう言つて彼女は僕の腕を掴み、猛烈な勢いで走り出した。

そして彼女に連れられ、公園の林の中へと連れられたのだった。

「・・・ここは・・・」

「林の中よ。ここなら矢も届かないでしょう・・・それでは、理由を話しましょう」

「理由？・・・あ、矢が飛んできた理由ね」

「そう」

一呼吸置いてから、彼女は説明し始めた。

「・・・まず、私は、『特別な家柄』の娘なの。まあ言っなればお嬢様ってところね」

「・・・そうなんだ・・・」

「でね、まあ所謂『許婚』もいるんだけど（嘘）、別に好きでもなくて」

「・・・で？」

「そこで・・・あなたに出会ったの」

「!？」

「でも、両親は反対しているから、色々と邪魔を入れてくるのよ。今の矢もその一つ」

「・・・」

「だから、何としても私達は逃げ延びなければならないの。それが、私の唯一の願い・・・」

「・・・うん」

彼女の理屈に、大きく納得したのであった。

六

「な、なんと言ったことだ・・・!」

部長がそうおののいた。

「完全に藪^{やぶ}、いや林の中やな・・・」

「これじゃ、どこにいるか分かりませんわ!」

「万事休すか・・・」

そう皆が口々に嘆いていた時、一人だけ冷静であった。惣流である。

「そんなの簡単じゃない」

「・・・え？」

惣流以外の皆が、同時に聞き返した。

「とりあえず、あいつを林から出したらいいんでしょう？」

「そりゃ・・・せやけど、出来るんかいな」

「勿論よ」

そう言つて惣流は、ポケットから携帯を取り出した。

「・・・あ」

皆が言う間に、彼女は携帯で電話をかけた。無論、碇にである。

「・・・繋がった」

「それに」

彼女は僕に囁いた。

「ここなら・・・だれにも見えないでしょ」

「・・・はっ」

確かに。周りに木があるせいか、確かに目立たない。ある意味絶好の場所だ。

「・・・だから」

彼女が僕に近づいてきた。それも、正面に。

徐々にその距離が近づいてきた・・・その時。

携帯が鳴った。

「・・・携帯？」

「一体だれから・・・あ」

そこには、アスカの電話番号が表示されていた。・・・こんな時に。

「切つてしまえば、良いものではありませんか」

「いや、ヘタに切ったら怪しまれるし、後で追及されるかも知れないから・・・」

嫌だつたが、仕方なく電話に応じた。

「・・・もしもし？アスカ？」

「もしかしくなくてもアスカよ！」

「・・・ごめん」

「ま、いいわよ。・・・ところで今、何処にいるの？」

「え？」

林の中・・・とは言えないよなあ。

「別に・・・建物の中なんだけど、それが？」

適当に誤魔化そうとしたが、無駄だった。

「へえー、建物の中なんだ。じゃあ、ここから見えることもないってわけね」

「・・・『ここ』？」

「そうよ、ここ。大葉公園の上にある高台！」

「た・・・高台！？」

思わず上を見渡した。すると、高台らしき地形が上に見えた。

・・・もしかして、見られてる！？

「・・・じゃあ、もしかして」

「そーよー、あんたらの位置は上からバッチリ」

・・・マズイ。自らの顔が一気に青ざめるのを感じた。・・・ここは逃げねば！

「・・・あ、電波がつ！」

「ちょ、何が電波よ・・・」

今度こそ適当に誤魔化して電話を切った。そして。

「遥香さん、ここ、ばれてます！」

「え・・・えええ！？」

向こうも驚いたようだ。

「いや、こんなに梢や葉があつたら流石に分からないんじゃない・・・」

彼女はそう返していたが、あれがブラフとは思えない。

僕は彼女の手を取り、林の外に向かって走り出した。

そして、林から出た瞬間、突然体の力が抜けた。

「・・・え？」

受身をする暇も無く、僕は大きく前に倒れた。

「碇さん、碇さん！」

彼女の叫び声も、遠くへと消えていった・・・。

皆は驚嘆していた。そう、惣流の話術にである。

「そ、惣流さんスゴイ！」

「・・・いや、あなたの方がよっぽど凄いから・・・」

「かしなんちゅうブラフや・・・ばれたらどないするつもりやねん」

「・・・し、知らないわよ！その時はその時で考えるのよ」

「それにしても、碇君のことをよく知ってらっしゃる・・・」

「え？」

「いや、なんでもない・・・」

キューピッド（クピドー）。ローマ神話の愛の神なのだが、背中に羽が付いて矢を持つ裸の幼児としてイメージされることが多からう。

黄金の矢と鉛の矢を持ち、黄金の矢だと刺さってから最初に見た者を好きになり、鉛の矢だと愛情を嫌悪するようになる。とされている。

そんなキューピッドの矢だが、もしかすると、現代科学を駆使すれば、再現できるかもしれない。ただ、それでは面白くないだろう。

愛とは、不確定だからこそ面白い。

第十三話 偽物の愛情（後書き）

・・・ええ、「キューピッドの矢」から考え出した話ですとも。
ベタですいません。

でも、考えれば考えるほど不可能とは思えないんだよなあ・・・。
うん。唯一の課題は強力な局所麻醉ぐらいかな？

第十四話 鏡の中の君と僕（疑問編）（前書き）

珍しく今回はSFです（まあ原作もSFだったかもしれませんが）。
科学の勉強に役立つかも！？なネタだったりします。

第十四話 鏡の中の君と僕（疑問編）

—

「・・・完成だ！」

研究室に声が響く。

長年の研究の積み重ねにより、加賀見博士は遂に夢の鏡を作り出した。

その名も、「別世界への鏡」。この世界以外のもう一つの世界へ行き来できる、という代物である。

「わしが子供の頃から夢見ていたことが・・・今・・・現実に・・・！」

興奮しながら、博士は部屋の蛍光灯を付けた。勿論、忘れていたのではなく、完成した直後に作動してはマズイ、と考えたからである。

鏡に、加賀見博士の姿が写る。

「うーん・・・わしもずいぶん年を取ったものじゃのう・・・」

少し気恥ずかしそうに、博士は鏡を眺めていた。

「さて、そろそろ・・・」

博士が『別の世界』へ行こうと鏡に足を伸ばした。

その時。鏡の中の像が、ニヤリと笑った。

「ん？」

博士がそう口にした時、鏡から、ヌツと右足が出てきた。

「!？」

博士が驚いている間に、顔、頭、胴体と腕、そして左足が鏡から出てきた。その姿は博士と瓜二つであったが、その中身は違っていた。

「よお、あちらの世界のワシよ」

「お、お前は・・・」

「そうさ。ワシはこちらの世界のワシさ。まあお前は、『別の世界』
とか思っているんだろうがな」

「あ・・・あ・・・」

「しばらく、こちらの世界に行ってもらおうか」

そう言つて、彼は博士の後ろに回り、そして、博士を鏡の中に突き落とした。

「や、やめる・・・うわああああ!!」

博士が完全に鏡の中に消えた後、彼はこうつぶやいた。

「やめると言われて止める奴がいるわけないじゃろて」

二

その日、空は雨模様だった。木曜日の2時、珍しく学校が早く終わったお陰で、僕は家の中にいた。

本を読んだりしてのんびりしていると、突然チャイムが鳴った。

「お届けに伺いました」

「はい」

僕はそう言つて、引き出しから印鑑を取り出し、玄関へと向かった。

驚いた。

僕は、普通の小包を想定していたのである。しかし、贈られてきたのは、違っていた。

それは、大きな姿見であった。

高さは1.5mほど、横幅は50cmほどだろうか。大の大人が二人掛かりで家に運んだほどの代物である。

当然あて先などを確認してみたが、間違いではなかった。

「これ、どうすんの・・・かな・・・」

僕は、ため息をついた。

しかし。家に着いたからには、とりあえず、組み立てなければならぬ。

幸い、構造が単純で、組み立て自体は簡単だった。・・・しかし。
「・・・重っ」

やはりこれほどの鏡は重い。僕は苦勞しながら姿見を完成させたとりあえず、鏡の前に立ってみる。

「・・・おお・・・」

そう言えば、姿見をこうして眺めるのは久しぶりだった。ふと、贈り主の名を思い出していた。

「加賀見京蔵・・・だったっけ」

そこまで口にした時、鏡が少し光った気がした。

「？」

鏡の方に振り返った。すると、その鏡の中心部が、ぼんやりと光ったのだ。

「・・・触れてみる、ってことかな？」

僕は、その鏡に自分の右手をそっと重ねた。

その瞬間、鏡全体が白く光りだした。

「え、ちょ、なんなの!？」

そう叫んだ時には、僕は鏡の中に引き込まれていた。

気が付くと、僕は、近くの川の土手にいた。珍しく治水工事がされておらず、そこは辺り一面が雑草だらけである。

「・・・え？どうしてここに？」

僕が戸惑っていると、川上の方から、大きな呼び声が聞こえた。

「シンジー!」

・・・え？この声、もしかしてアスカ？

そう思っただけで振り向くと、アスカが、笑いながらこちらへ駆け寄ってくる。今まで見たことが無かっただけに、僕はしばらく固まっていた。

しかし、向こうの勢いは止まらない。距離がどんどん近づき・・・

・そして、僕に抱きついてきたのである！！
「もー、ちゃんと約束したのにこないんだから」
・・・は？約束？

突然の出来事に、僕は大いに混乱していた。

「や、約束って・・・いつのこと？」

とりあえず、そう聞くしかなかった。すると。

「忘れたの？昨日、『大葉公園に2時集合ね』って約束したじゃないの」

「・・・え？」

訳が分らない。全く見に覚えが無い。そもそもそんな約束をするような仲でもないはずだ。

「とぼけないでよー」

「い、いや、別にトボケているわけでは・・・」

僕はそう返した。しかし、次の彼女の言葉に僕は驚愕することになる。

「・・・じゃあ、仲直りのね」

・・・は？何で？

そんな返事をする間もなく、彼女の唇が迫ってくる。

短い考慮時間の中、僕は覚悟を決めた。

そして、二人の唇は触れ合った――。

三

が。その数秒後、突然、耐え難いほどの不味さが僕を襲った。すぐさま唇を離し、口中の液体（唾）を吐き出した。

不味いのは向こうも同じらしく、同じようなことをしていた。

・・・そして、こちらをキッと睨み付けた。

「よ、よくもやってくれたわね・・・！」

「な・・・何が？」

先ほどの優しい表情とは一変、烈火の如く怒っている。

「つきまとう私が嫌いだからって、唇に仕込むなんて！」

えええええ！？

「そ・・・そんな訳無いよ！現に僕だって同じダメージを受けたんだよ！？」

「演技かもしれないじゃない！・・・もう許さない」

・・・これは何を言っても無駄だ。僕はとつさにそう判断した。ならば。僕は、ふいに空を指差してこう叫んだ。

「あー！！」

「な、何よ・・・」

・・・今だ（まさか通じるとは）。僕は、踵を返して全力で川下へダッシュした。

「何も無いじゃない。・・・ってあ！待てー！」

待てと言われて待つ人はいない。とにかく脇目も振らず僕は走った。

土手の上の道に上がると、ふと前方に、自転車に乗っている綾波を見つけた。

僕は彼女に駆け寄ってこう頼んだ。

「ごめん！その自転車貸して！」

「えっ・・・まあ、別にいいけど・・・」

方向など構ってはいられない。彼女を自転車の荷台に載せ、僕はペダルを踏み込んだ。

始めは重かったが、徐々に速度が出てきた。

後ろから、アスカの「こらー！待てー！」と言う声が小さくなり、そして消えていったのだった。

しばらく漕ぐと、川辺を抜け、やがて住宅地へ入った。

とりあえず、ここまで逃げればたぶん大丈夫だろう（家には帰りづらいが）。

「ふーっ。ありがとう。無茶な状況で自転車を貸してくれて」

僕は、後ろにいた綾波にそうお礼を言った。

すると、その回答は、予想外のものであった。

「いいの。だって・・・相手が碇君だったもの」

・・・は？そう言って彼女は、脇から腕を伸ばしてギュッと抱きしめた。

僕はますます混乱していた。

二人して、どうしたのだ？とにかく、通常の状態ではないことは明らかである。

その原因を考えてみたが、全く分からない。

「そうだ。部長に聞こう」

僕は一旦自転車を止め、携帯から部長に電話をしてみることにした。

「誰に電話かけるの？」

「ああ、部長だよ」

「部長？」

「うん。僕、パソコン部なんだ」

「・・・え？碇君は漫研じゃなかった？」

「・・・ええっ？違う違う」

「いやだってさあ、前に・・・」

そこまで会話したところで、携帯が通じた。

・・・なんだ、この騒音は。人自体の騒音もあるし、家電量販店のBGMらしき音もある。そこにアニソンも混ざって、どっかで聞いたことのあるような効果音をもたらししているのだ。

「・・・部長、今どこにいるんですか・・・」

「どこって？決まっているだろう。秋葉原だ」

「・・・え？どこに？」

「だから、秋葉原の家電量販店だよ。BGMで分かるだろうっ？」

・・・ああ。いつもの部長だ・・・。

一応聞いてみた。

「何を買おうとしているんですか？」

「え？新しいVOCALOID（ ）だが、どうした？」

・・・普通の部長じゃない。

「そ、そうなんですか・・・」

「ところで、聞きたいことは何かね」

「・・・え？」

「何かあるから携帯で掛けているのだろう？言い給え」

・・・一瞬、忘れていた。

「す、すみません・・・あのー、実は・・・」

「・・・と言うことなんです」

「・・・は？何を言っている？彼女らはいつもああではないか」

「いや・・・だから・・・」

「・・・ああ。つまりあれか。所謂、『怪しげな扉を開いたら別の世界に飛ばされました』ってヤツか」

「は？」

「いやー、ゲームやアニメじゃ時々あったりするけれど、まさか現実には君が飛ばされるとはな・・・」

「・・・理解してもらえて何よりです・・・」

「そう言う場合、迷っている主人公をサポートする人間が出てくるもんなんだがな・・・そうだ、あいつがいる」

「だ・・・誰なんですか!？」

「ウチの妹だ。頭がいいし、頼りになる筈だ。私の家は知っているだろう。そこまで来るといい。向こうには連絡しておくよ」

「あ・・・ありがとうございます・・・」

そう言って、僕は携帯を切った。

こっちの世界でも、やっぱり部長は頼りになるな。

僕は、胸が熱くなるのを感じたのだった。

早速、部長の家に向かおう。すぐ近所だし、大丈夫だろう。
そう思っ、僕は自転車を部長の家に向けた。

「・・・あれー？」

「どうしたの？」

「なんか、全然部長の家に着かないんだけど・・・」

「そう言えば、全然違う方向走ってるねー」

「・・・知ってたの？」

「いや、別に意地悪とかそういうんじゃないんだけど。ワザと迷ってこの状況を楽しんでるのかなーって」

「・・・」

「まあ結構離れちゃったけど、私が案内してあげよっか？」

「あ、ありがとう・・・」

「その代わり・・・あ、まだ秘密ね」

「そうですか・・・」

「・・・やっと着いたね」

「そうだね・・・あれ？ここだけ？部長の家」

「そうだけどー？どしたの？」

そこには、ちよつと古そうな一軒家があるだけだった。

「部長の家って、もっと広いイメージあったんだけどな・・・」

「え？元からこのままだよ？」

まあ、これも「こつちの世界」では普通なのか。

なんとなく納得しながら、僕はチャイムを鳴らした。

鳴らしてから数秒後、「はい」と言う声と共に、玄関のドアが開いた。

「・・・おー、来ましたか」

「・・・来ましたよ」

「久しぶりー」

「まあ、上がってってよ」

軽い挨拶の後、僕と綾波は部長の家に入った。

「とりあえずお茶でもどうぞ」

「あ、ありがとう・・・」

椅子に座り、ひとまずお茶でも飲もうと僕は考えた。

・・・ところが。

「・・・うぐっ！」

・・・なんだ、コノアジハ。

「ど、どうしたの、碇君！」

「イヤ、ナンカモノスゴクマズインダケド・・・」

「そんなはずは・・・いや、そんなこと無いわよ」

お茶をすすりながら遥香さんはそう言った。だが、どうにも信じられない。

「・・・まあ、お茶は後にしましょう。・・・で、一体どうしたって？」

そう、彼女は僕に聞いた。

「実は・・・」

僕は、一から話すことにした。

「・・・なるほど。そんなことが・・・」

「全く訳が分からなくて・・・」

とりあえず、彼女には理解してこらえたらしい。

少しほっとしていると、よこから綾波がツツコンできた。

「・・・ってことは、アスカさんと、したのねー!!」

「い、いや、別にその気があつてしたわけじゃ・・・!!」

「まーまー二人とも落ち着いて！」

その時、遥香さんが止めに入った。

「何よ！」

綾波が聞き返す。

すると、遥香さんはこう答えた。

「分かったのよ。どうしてこんなことになったのかをね」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

・・・ヤマハが開発した音声合成技術、もしくはそれを使用した製品のこと。略称は「ボカロ」。

メロディと歌詞からあらかじめサンプリングされた音声に基づいた歌声を合成することが出来る。

かの有名な「初音ミク」は、その後継の「VOCALOID2」エンジン搭載の最初の日本語VOCALOIDである。

第十四話 鏡の中の君と僕（疑問編）（後書き）

すみません、ここまで連載が遅れて・・・。

なんだかんだで忙しくて、書けなかったんです。ごめんなさい。

定期テストも終わり、これからは書けると思うので、楽しみにしてください。

第十五話 鏡の中の君と僕（解決編）

—

「どういうこと？」

僕と綾波が同時に聞き返した。

「そもそも、碇君が言った『不味さ』と言う言葉に疑問を持ったのよ。勿論、普通はありえないこと。唇に苦い物を塗っておいた、と言うことも考えたけど・・・あなたはそんなことをする人じゃないでしょ？」

「そりゃそうです！」

僕は即座に返した。

「でしょ。つまり、そこが最大の疑問だったのよ。・・・さっき解けたけど」

「？」

「結論から言うと・・・碇君と私達じゃ、キラリティが違うのよ」

「キラリティ！？・・・何、それ？」

聞きなれない横文字に、僕ら二人はきょとんとした。

「ああ、ごめんごめん。知らなかったか。まあ専門用語ね」

「ふむ」

「まず、この世の中の全ての物質は原子で出来ています。それはいいわね？」

「うん」

「で、勿論生き物の体も、分子が集まった巨大な分子群で出来ているんだけど、その骨格は何で出来ているか知ってる？」

「さ、さあ・・・」

「『骨格』と言う位なんだからカルシウム？」

「いえ。答えは炭素。その炭素が四本の手・・・つまり結合手を持

っているから、たんぱく質やDNAのような複雑な構造の物質が出来るわけよ」

「はあ・・・」

正直、化学に詳しい訳ではなかったので、あまり良くは分からない。炭素の手が四本・・・ぐらいまでは覚えているけど。

その後も彼女の話は続いた。

「さてその手、よく見る構造式では大体平面に十字に描かれているけど、実際は、大抵正四面体の頂点になるように手が立体的に伸びているの」

「へえー・・・」

「で、そのせいで、『同じ物質のはずなのに構造式では重ね合わせることが出来ない』ということが起きてしまうのよ」

「・・・え？」

「いい？図に描くと・・・」

そう言って遥香さんは、紙とペンを取り出して、『重ね合わせることができない』例として二つの乳酸の構造式を描いてくれた。

「L-乳酸とD-乳酸・・・わっかりづらいなあ」

「微妙な差ね・・・確かに違うけど」

「まあ、『微妙』と言えば確かにそうかもね。でも、これが重要なよ」

「・・・はあ」

「この、『右』と『左』の違いを『キラリテイ』と言って、それぞれを『光学異性体』とか『鏡像体』と言うのよ」

要は、左右の違いをキラリテイと言い表すらしい。

「キラリテイってそういう意味なのね・・・」

「で、よ。この二つ、沸点・融点とか化学的性質はほぼ同一。せいぜい旋光性が違うだけ。じゃあこの二つの根本的な違いは何か。それは・・・」

「それは？」

彼女は一瞬溜めてから言った。

「それは、生体への影響よ」

二

「せ・・・生体への影響？」

「どういうことだ？化学的性質がほとんど一緒なら、それでいいのでは？」

「そう。今この図に『L』と『D』って書いたけど、これが右と左の区別。この分類で行くと、人体を形作っているたんぱく質やアミノ酸は全てL体、炭水化物とかの糖は全てR体なの。原因は良く分かってないけど、これは世界のほぼ全ての生物で共通よ」

「え？」

「そしてそのせいで、L体とR体とで生体への影響が異なることになる。・・・碇君、メントールって知ってる？」

「メントール？あのスーっとするの？」

「・・・ハツカ？」

「そう。あのメントールだけど、それにもL体とD体があるの（

。L体は普通にミントの香りなんだけど、R体は、なんと石油の香りがするの」

「せ、石油！？」

「そう。他にも、抗生物質で有名なペニシリンがあるけど、これも鏡像体になると効き目が無くなってしまふの」

「・・・つまり、僕がひどい目にあっているのは・・・」

「そう。キラリティが違うから、私達にはなんともない他人の唾液やお茶も『不味い』という反応を示し、そして全体が逆だから見える景色も感覚も逆。その意味では、茶を飲み干さなかったのは正しい反応ね。そのまま飲んでたらひどい消化不良になるかも」

「そうなの・・・」

「そこまで話したところでチャイムが鳴った。

「はい」

遥香さんが戸を開ける。すると、アス力の中に押し入ってきた。

「やっと見つけた！あの時はよくも・・・！」

「惣流さん落ち着いて！これには訳があつて・・・」

「どういう訳よ！」

「つまり、碇君は私達が知っている碇君じゃないの！」

「・・・え？」

そこから遥香さんが、アス力にさつき僕らにした説明をした。

「・・・そうだったのねー。ごめんね、追っかけたりして」

「いや、もういいよ・・・」

こつちも、想定外のことの連続で、そんなことぐらいどうでも良くなっていたのである。

キラリティが違う世界。つまり、普段住んでいるのとは大きく違う世界に放り込まれてしまったのである。

マトモに物も食べられない世界で、一体これからどうしようと・・・

！

・・・ん？まてよ？

「あの一・・・」

「何？」

ふと思つたことを、皆に聞いてみることにした。

「これ、性格も逆になるもんなの？」

「・・・あなたの反応を見る限り、そうなのかもね」

「じゃあ聞くけど、鈴原と相田はどんなの？」

「ああ、あの二人ね。お笑い芸人を目指してるんだって」

「芸人！？じゃ、じゃあ、木村さんは？」

「木村さん・・・ああ、あいつは不良と化してるわね」

「ふ、不良！？」

「そうよ。まだ聞きたい？」

「イヤ、ベツニイデス・・・」

あの木村さんが不良。不良！

どんなのなんだ？やっぱりの黒髪は染めているんだろうか。そ

れっばい服着て、旗をしょって単車に・・・！

「いや、別に暴走族じゃないらしいから」

「そ、そうなの・・・」

「・・・結局さ」

「ん？」

「こつちの世界のほうのシンジってどこにいるのよ？」

三

それは、一瞬のことだった。

あいつからダッシュで逃げていたときのことだ。下は川原。走りづらい草むらの上を大股で駆けていた時、あれは起きたんだ。

突然、目の前に大きな姿見が出てきた。驚いて立ち止まると、その鏡面から強い光が放たれたんだ。

その光に周りが包まれ、・・・そして気づくと、なぜか俺の部屋の中に戻っていた。

「・・・ワープ？」

俺はそう言うしかなかった。無理もない。現実には普通ありえないことなのだから。

あの扉のせいなのか？俺は、そう感じた。

まあ、あいつから逃げられて良かった・・・と周りを見渡すと。
「・・・えええ！？」

そう。周りのもの、その全てが普段とは逆に配置されていたのさ。ベッドから机からドアから、外の景色まで普段とは左右が逆だ。

訳が分からなかったよ。でも、少し考えてこう思ったのさ。
これはあれだ。いわゆる『ドッキリ』ってヤツさ。

突然のイベントに誘って、困惑しているところを襲う、悪趣味なゲームなんだ。いや、きつとそうに違いない。

なにせ、周りの物の文字を見ると、みーんな左右逆に書かれている。よくもまあこんな手の込んだことを・・・。

とは言えこれはドッキリ。慌てるのは禁物。落ち着かねば。

大体外の景色も、絵とか3Dとかなんだろうし。

そんなことを思いながら、俺は部屋の窓を開けた。
すると。

「うわっ」

突然、横風が吹いてきた。俺は思わず顔を覆った。

「やけに手の込んだことをするな・・・！」

そう思いながら改めて外を見る。目の前に鳥が何羽か飛んでいる。
車が流れているのも見える。

実に手の込んだドッキリだ。こんな俺にする必要も無いほどの。

「やれやれ・・・」

若干汗をかきながら、俺は窓を閉め、ぐるりと振り返った。

左右逆に配置された部屋。きつと部屋のドアを開けたらスタジオ
の外なのだろう。いや、そうに違いない！

俺はドアに近寄り、恐る恐るドアを開けた。

するとそこには、壁と廊下があるばかりだった。

「・・・あれ？」

スタジオの外じゃない。まさか廊下まで作ることはいらないだろうか
ら、これは・・・現実・・・！！

恐る恐る、廊下を渡っていると、玄関の方から、扉の鍵を開ける
音が聞こえた。

「！！」

人か！？俺は身構えた。ここはマンション。部屋の配置は皆同じ。
つまり、他人の部屋の可能性もある。

「ただいま」

扉が閉まり、出てきたのはなんと木村であつた。

「えっ」

俺は戸惑った。そりゃそうだろう。不良で名が知られてるヤツが、
ごく普通に他人の家に入るか？

しかも、髪を良く見ると綺麗な黒色である。・・・染め直したの

か？

そんなことを考えていると、彼女は俺にこう呼んだんだ。

「あ、シンジ様、帰っていたのですか？」

・・・し、シンジ様あ！？

部屋の中にいた時よりも俺は混乱していた。しかもですます調である。ますます訳が分からない。

「シンジ様、どうしたのです？そんなに暗い顔をして」

「いや、なんか色々と混乱していて」

「そうですか・・・そうだ、何か食べます？」

「あ、ああ・・・」

茶菓子を出すということも信じられなかったが、俺は素直に従った。

それよりも、ここ、あいつも住んでいるのか・・・え！？

「はい。どうぞ」

俺の目の前には、お茶とせんべいが置いてあった。

「あ、ああ・・・」

全く訳が分からないままに、俺は茶をすする。

その時。

「うぐ！」

な、なんだこの変な味は・・・！

「どうかしたのですか、シンジ様」

「いや、なんでもない・・・」

幾らなんでも、女の子（木村もあれで女の子なのだ・・・多分）の前で吐くわけにはいかない。

かなり嫌な予感がしたが、俺は口の中のお茶を飲み干した。

「うっ・・・」

「大丈夫ですか？お茶が熱かったのかも・・・」

「いや、そうじゃないから安心して」

「そうですか・・・」

熱いだけならまだいいよ、とは言わないことにする。今は気のせいなのだろう。

口直しにせんべいでも。・・・！

「う・・・！」

・・・マズイ。かなりマズイ。正確には、表面に塗られている物がマズイ。

「・・・あのさ」

「はい？」

「これ、いつ買ったもの？」

「ええと・・・一週間もたっていないようなものですけど」

「そ、そうか・・・」

お茶はともかく、一週間もたたないようなせんべいがこんなにマズイのはおかしいだろう。

この時俺は悟った。

もしかして、周りでなくて、自分がおかしいのではないのか、と。

四

俺は、自分の部屋に戻ることにした。

「え、どうしたのですか？」

「いや、ちよつと気になることがあって・・・」

こうなったら、部長に聞いてみるしかない。

別に俺はアニ研では無かったが、アニ研の部長とはメールを送りあうほどの仲だ。

パソコンのスイッチを入れる。ああ、やっぱり左右逆・・・気にしないことにしよう。

パスワード入力・・・キーボードの配置も逆・・・！

「木村」

「・・・はい！？シンジ様が、呼び捨てで・・・！」

「え、駄目なの？」

「い、いや、別に私は、その・・・」
変な人だ。

「あのさあ」

「え？」

「手鏡持ってきてー」

「は、はい・・・」

俺は持ってきてもらった鏡で、キーボードを写した。

「・・・これで分かるな・・・！」

「どうしたのですか？」

背後からの視線にめげず、ログインする。何、別にエロゲでもするわけではないのである。気にすることは無い。

メーラーを立ち上げ、俺は部長にメールを打ち込んだ。

「部長に聞きたいことがあるんだけど、なんだか周りが左右逆に見えて物が食べられないのはなんでかわかる？」

と言うような内容である。

「一体何を・・・」

覗かれる前にメールを送信した。これでよし。

「何でもないって。それよりさ・・・」

彼女に質問しようとした時、メールが返ってきた。宛先は部長からだ・・・速！

早速受信したメールを開く。そこには、次のように書かれていた。
「よくわからん。こちらに来てい。住所は電話帳の私の欄に書いているはずだろ？」

・・・道理で速いわけだ。

「・・・どうしたのですか？」

「いや・・・そうだ、一緒に来てくれない？」

「え・・・どこに？」

「ちよつとした友達訪問さ」

少々迷いながらも、俺と木村は部長の家に着いた。

「・・・これか？」

以前見たのとは違って、なんだか立派なような・・・。

「・・・住所は、合っているんですね？」

「まあ、な。待つてればくるかな？」

などと言っている、前にある大きな扉が開いた。

「やつと来たな」

「・・・何か家、立派になってない？」

「元からだ・・・ふむ、これは事情が深そうだな」
「？」

「まあいい。入れ」

なんだか変な気がするが、気のせいなのだろう。俺と木村は、家の中へと入った。

「・・・そうか」

「・・・そうだけど・・・」

とりあえず、俺は、ありのままを話した。と言うより、話す他に無かった。とにかく疑問だらけだったのだから。

「え？シンジ様が変になったのでは無いのですか？」

「いや・・・『変になった』と言うより、そもそも『こちらの世界』の碇君では無いと私は思うのだが・・・」

「え・・・」

「いいか？この世の中にはな・・・」

それから、部長による親切な説明（予測）があった。

「そうか・・・。俺、やっぱり元の世界から飛ばされてきたのか」

「まあ、あくまでも私の仮説だがな・・・」

「そっか。だからなんだか普段のシンジ様とは違うんだな、って感じていたんですね、私」

「あのさ、君が言う『シンジ様』ってどんな人？」

良く出てくる言葉だったので、ためしに聞いてみた。

「え？本物の方のシンジ様は、格好よくて優しくて・・・」
「・・・はあ」

「鵜呑みにするな。姿は君と同じ、性格は君と違っておとなしいだけだからな」

「『おとなしいだけ』とかひどいです！」

「・・・とにかく、俺はどうすればいい？飯も食えない周りも逆、こんな世界でどうしろと？」

「ん？簡単なことだ。飯については『何も食えない』ことはないぞ」
「本当か！？」

「部員なのになんでタメ口なんだ・・・要するに、キラリティに差が無いものならこちらの世界でも食べ放題だな」

「具体的には？」

「空気に水に酢に酒・・・まあ、アミノ酸等の不純物があるから後ろ2つは無理か」

「全部『食べる物』じゃないじゃん！」

「まあ、簡単な糖ぐらいなら合成も出来るが、なにせ時間がかかる。しばらくはそんなもんで耐えてくれ」

「えー・・・」

俺は、がつくりとうな垂れた。

「結論から言うと、木村殿の料理能力が生かされることは無いな。残念だが」

「そうですか・・・」

「まあ、こちらも頑張ってみるよ。何かあったらメールするから」

「はあ・・・」

残念な気持ちのまま、俺達は帰途についたのだった。

五

「まあ普通に考えて、こちらの世界の方も、あちらに飛ばされているでしょうね・・・」

遥香さんが答えた。するとアスカがこう言った。

「大丈夫かしら・・・」

「何が？」

僕は聞いた。すると。

「こちらのシンジの方は、あなたと違って、良くも悪くも積極的なよ」

「積極的？」

「活動的ともいうのかしらね。行動力はあるんだけど、自重と言うものがないのよ。今頃、周りの女の子にアプローチかけてるんじゃないかと心配で・・・」

「ええええ！？・・・いや、部長もあっちの方のアスカもいるし、大丈夫ですよ」

「そう言えば、『あっちの方のアスカ』ってどんな人なのですか？」

「・・・君と逆だよ逆」

「??」

その後。僕らは影山宅から帰ることになった。

「もう暗くなってきたわね・・・」

遥香さんがつぶやく。

「結局、僕はどうすればいいんだろう・・・」

「ま、適当なところに住まわせてもらうしか無いわね。ちょうど、こちらの世界の方の家が空いてるじゃないの」

「空いてるって・・・ああ!？」

「そうです！私、惣流アスカも住んでいるこちらの方へ！」

「・・・元の世界でも、そうだったなあ。

「ちよつとー！何で私の家を見捨てるのよ!」

綾波が怒る。

「・・・そっちの家って、どんな感じなの？」

元の世界では、地壁丸出しの、生活感0の家だったからなー。

「そりゃあもう、可愛くまとめた綺麗な家です!」

「・・・そう・・・じゃあ今日はアスカの方にするよ」

「やったー！」

「えー・・・」

「まあでも、明日にはそっちの方も来てみるから」

「・・・そう」

そうして、今日は、アスカの方の家に泊まることになった。

「・・・なんか、まるでハーレムね・・・」

寝れない。・・・全然寝れない。

おそらく空腹によるものが大半であろう。

なにせ、「夕食」の時間に、何も食べなかったのである。正確に言えば、ただのお湯と塩だ。腹ペコである。

だが、それ以外にも原因はあった。これからどうするのか。そもそも帰れるのか。もし帰れなかったら・・・。

「いつそ、こっちで暮らせ・・・るのかな・・・」

もし、化学合成であっちの世界に合わせた糖やアミノ酸や脂肪やビタミンが生産できたら、理論的にはこっちの世界でも生きられることになる。

だが、それは、「正しいこと」なのだろうか？ いわゆる、「自然の摂理」に反してはいないのか。

そんなことを考えているおかげで、なかなか寝れないのである。そうして布団の上を転がっていると、横の方から声がした。

「どうしたの？」

・・・横の布団にいたアスカだった。

「え？ いや・・・」

「ごめんね。夕食、お湯だけだったもんね」

「まあ、普通の物が食べられない時点で覚悟はしていたんだけどね・・・」

「おなかでもさすろうか？」

「いや、別にいいですよ」

そんなことまでされたら、逆に寝れないではないか。・・・恥ずかしさで。

「そもそも、こうして横に寝ることも久しぶりなのよ？こちらの方のシンジは、いっつも離れた部屋で寝るもの」

「え、どうして？」

「聞いてみたの。そしたら、『寝てる間にお前に襲われたら逃げられないだろ』ですって。・・・まあ襲うけど」

「襲うんですか!？」

「まあ、可愛い寝顔を見るとそうしたくなることもあるのよ」

「・・・」

「あ、寝る前に最後に一つだけ」

「？」

「ありがとう」

・・・よ、余計寝れなくなるでは無いか。

そうして、1日目を終えた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

・・・メンツールの場合は、（+）体と（-）体で表すことも多いようである（ミントの香りは（-）体）。と言うよりも、正確には8種類もの光学異性体があつて、その中で最も香りが強いのをL-メンツールと表したそうぞ。うーん、小説内で正確に書くのは難しいなあ。

第十五話 鏡の中の君と僕（解決編）（後書き）

・・・はい。これで、いろんな疑問解決！・・・したのでしょうか。

次で『鏡の』、完結させます。

第十六話 鏡の中の君と僕（帰還編）（前書き）

「鏡の中の君と僕」、完結します。

第十六話 鏡の中の君と僕（帰還編）

—

二日目。目が覚めると、僕は体を起こし、周りを見渡してみた。自分の家。そこは間違いがない。が、どこか可笑しい。もっとも、その原因はわかっていた。

僕は、別の世界の中にいるのだ。

そこは普段とは違う世界。キラルティか何かが違うせいで、まともにも物も食べられず、左右も人もまるで反対なのだ。

寝たら覚める夢・・・でもない。誰がなんと言おうとも、これは現実なのである。

隣には、アスカらがそれぞれ布団で寝ていた。元の世界でも同じような生活をしていたのである。何を驚くことがあるう。

・・・ただ、心なしか、今日の彼女の寝顔は、可愛らしく見えた。

顔を洗った後、とりあえず朝食の用意をしようと台所に向かう。すると、どたどたとアスカが目の前を通った。

「あ、おはよう・・・」

「おはよう!」

すぐさま洗面所に向かっていったので、僕は、そんなに急がなくても・・・と思った。

そして、台所の前に立って調理器具を取り出していると、後ろから声がした。

「あ! 私がするから・・・」

アスカだった。

「いや、僕がするよ。元より得意だし」

「だめよ。お腹も空いてるだろうし、私の当番だし」
当番制なんだ。

「そう？じゃあ手伝うから」

「いいけど・・・」

そうして、二人による朝食作りが始まった。

よく台所に立つのだろう。包丁さばきなどは見事だった。こちらの世界の方とは大違いである。

3人分の朝食（僕は食べられないのでお湯と塩）が出来上がったところで、ミサトさんが起きてきた。

「・・・別に手伝わなくても良かったのに」

言い忘れていたが、この世界の方のミサトさんは、無口で、別に明るいと言っわけではなかった。

「あ、これはシンジが自分も手伝いたいって・・・」

「それならいいけど」

そう言つと、彼女は別の部屋へ消えていった。

「・・・全然違うね」

「でしょうね。そっちの世界の方も見てみたいなあ」

「まあ、僕が帰るのが先ですけど」

「・・・うん」

ミサトさんが戻ってきた後、朝食となった。

とりあえず湯（水）はタダで飲み放題らしい。とりあえず腹が満たされる程度には飲んだ。なぜか塩は大丈夫だったのがかなり幸せに感じられる。遥香さん曰く、「精製塩なら99.5%以上が塩化ナトリウムだからキラリテイ的には問題無いわ」（ ）とのこと。

朝食の後歯を磨き（全然食べてはいないのだが一応である）、着替えた後玄関の扉を開けた。

二

外。なにせ左右が反対なのである。何もしなければ、確実に迷ってしまうところであった。

アスファルトに付いて行きながら歩いてると、別の道から来た綾波に出

くわした。

「あー！」

「おはよう。昨日は楽しかったわー」

「『楽しかった』！？え、何！？」

「・・・思い出した。こっちも逆なんだった。

「・・・別に何も無いですって・・・」

「ホントにー？」

若干疑われているようだが、別にやましいことなど何も無いのである。嘘はない。

背後からの視線を感じながら、僕らは学校へと向かった。

なんとか自分の靴箱の位置を探し出して蓋を開け、靴を取り出す。もちろん、靴の文字は鏡文字だった。

それを履いて教室に向かうと、驚いた。

何と、メインの黒板が、入って左側にある。

普通、黒板は、右利きの人の為に、日が差し込んでも問題ない様に入って右に配置されていることが多い。勿論その反対側にも黒板はあるが、専ら落書き用に放置されているのが現状である。

それが逆である。当然机が向いている向きも逆。頭では逆と分かっているが、それでも戸惑うものである。

自分の机の場所を思い出しながら、席へと腰を下ろす。机の中には教科書が入っていた。左様、置き勉である。

とりあえず周りを見回してみた。すると、鈴原でなく相田が関西弁だったり、洞木さんが全然委員長らしくなかったり、木村さんが・・・これは見なかったことにしよう。

そうこうしている内に、一時間目のチャイムが鳴り、先生が入ってきた。

予想はしていた。絶対にこうなるだろうと。しかし。これは辛い。

授業中の板書。普段は簡単なことである。だが、今回に限ってはそうでは無かった。そう、わざと「鏡文字」で書かなければならないのである。

鏡文字の教科書だけでも苦勞していたのに、僕は、二重の苦勞を背負うことになったのだ。

必死に鏡文字を真似て書く。当然、字は汚くなった。もう一人の僕よ・・・ごめん。

幸い一時間目は当てられずに、なんとか授業を終えた。

何かを悟ったのか、アス力が僕の席へとやってきた。

「どうだった？」

「いや、正直辛い・・・」

「だらうね・・・でも、パツと見あんまり変わらないよ？」

「・・・」

仮にももう一人の僕である。その慰め方はどうだろうか。

「でさ」

「？」

「授業中に気がついたんだけど・・・これ」

そう言って彼女は、小さな手鏡を僕に手渡した。

「勿論テストじゃ使えないけど、今日はそんなのは無いから大丈夫。これ越しで読めば大丈夫だし、書く時もこれを見ながら書けば綺麗に書けるって何かの本に書いてた」

「へえ・・・ありがとう」

「それじゃ」

そう言って、彼女は自分の席へと戻った。・・・早速試してみよう。

その後の授業は、なんとか乗り切れた。・・・但し、読み上げる時などは、手鏡を隠しながら使わないといけないので、そのところは苦勞したが。

そして昼休み。ああ、今度こそは何も無しか・・・と思いつつ机

に伸びていると、誰かが自分の机に近づいてくる音が聞こえる。

振り向くと、そこには、十個ほどの飴玉が入った小瓶を持つ、遥香さんの姿があった。

「遥香さん、それは？」

僕は聞いた。すると。

「ああ、これ？私が昨日徹夜して合成した糖で作った飴玉よ」

「ご……合成？」

「そう。たぶんこれなら食べられるハズよ！」

「へえ……」

とりあえず食べてみる。……甘い！

「……飴だ。普通に飴だ」

「でしょー？これで食糧問題もひとまず安心ね！」

……安心になっても困るのだが。だが、久々の「食」である。

文句は言わない。

「まあ、そうだね……ありがとう」

「どういたしまして。それでは」

そう言くと、彼女は立ち去った。ほっとしていると、背後から気配がする。

振り向くと、鈴原と相田がいた。

「よく物を貰うよな」

「おめでたい話ですな」

……二人の性格まで逆にしてくれていたら良かったのに。

「まあでも、『僕以外の人は食べられない』味だから」

「？」

今日も早めに授業は終わった。

「明日から休みだね」

アス力が話しかけてくる。なるほど、今日は金曜日である。左右以外の違いはあまり（……）無いことは、昨日家で過ごしていて気がついたことだ。

「あ、そうだね」

「でさ、一つ提案があるんだけど」

「ん？」

「私とデートしない？」

「えええ！？・・・同じ家にいるのに？」

「雰囲気よ雰囲気。こちらの方は、いつも逃げてばかりなんだもの、つまらないじゃない」

「そりゃそうだね・・・」

そもそも、デートなんて今までやった事が無い。普通は即答するだろうが、今回は少し驚いた。だって、常に近くにいるのに・・・。「じゃあ決まりね。細かい場所とかは私が考えとくから」

「うん」

彼女が離れた時に、一瞬視線を感じたが、気のせいだと思った。

三

次の日。アスカに言われた待ち合わせ場所に、僕は来た。いや来たと言うのは正確ではなからう。正確には、二人で来たのである。

誰と？・・・綾波とである。

何故そうなったかと言うと、昨日の帰りから話さねばなるまい。

二人で帰っていると、後ろから綾波が僕の手を取った。

「え？」

「昨日言っただでしょ？『明日にはそっちの方も来てみる』って・・・そうだっけ。」

「・・・あ」

「ちょっと待って。二人だけで！？」

「そりゃそうでしょ。こっちはあなたと違って保護者は家にいますから」

「……！」

「じゃ、一緒に行きましょう」

「う、うん……」

僕は、半ば引つ張られるようにして、彼女に付いて行った。
悔しそうな顔をした、惣流を残して。

その後、いわゆる「女の子の部屋」のような部屋の中で夕食（お湯と塩）を取り、彼女とは別に布団に就いた。

で、メールで場所等が指定されたが行き方が分からず、彼女に連れて行ってもらったという訳である。

少ししてから来た惣流は、綾波の顔を見て機嫌を悪くした。

「何であなたがそこに居るのよ！」

「『何で』って、彼が道が分からないって言うから連れてきただけよ？それに、一昨日の彼の発言、忘れたとは言わせないわ」

「……シンジ」

「？」

「じゃ、行くわよ」

そう言つて、彼女は僕の手を取って歩き出した。

「……何で付いてくるのよ」

10分もたっただろうか。そろそろ鬱陶しく感じたのだろう。惣流が、振り返つて嘆いた。

「別に、ついて行つて悪いと言う法律は無いでしょ？問題無いわ」
そう返したのは綾波だった。

「そんなの屁理屈よ！」

惣流は即座にそう返した。全くである。

今にも口喧嘩になりそうな時、ポケットの中に入れていた携帯電話が鳴り出した。

「……ケータイ？」

「一体誰から……っと」

ポケットから携帯を取り出す。どうやら電波はキラリティに關係無く届くらしい。

画面を開くと、そこには、見慣れた名前があった。

「遥香さん・・・？」

「遥香って、あの？」

「ちよつとそれどう言う・・・」

二人の声を無視して受話ボタンを押し、耳に当てがった。

「もしもし！碇君！？」

「・・・何ですか、いきなり大きな声で」

彼女の声のテンションは何故が高かった。

「いやね、分かったのよ！」

「一体何が？」

「あなたが元の世界に戻る方法が！」

それを聞いた瞬間、僕は一瞬放心状態になった。

しばらく話した後、僕は電話を切った。

「何の電話？」

「妙に声が大きかったようだけど」

二人が話しかけてくる。

そこで、二人の方に振り返り、僕は叫んだ。

「分かったんだって！」

「・・・何が？」

「僕が元の世界に戻る方法が！」

四

僕ら三人は、部長の家の前に立っていた。

さっきの場所から、ここまで急いでやって来たのである。

インターホンを押す。すると、待っていたかのようにドアが開い

た。

「さ、早く入って！」

遥香さんがそう言ったので、僕らはまたお邪魔することになった。

最初に話を切り出したのは惣流だった。

「で、何なのよ方法って」

「方法は・・・あ、その前に」

「何よ」

「あなたの家に大きな鏡が来なかったかしら？姿見のような」

「姿見？・・・ああ、そんなのあったわね」

「それ本当！？」

ここは重要な所だろう。何せ、その「大きな鏡」に触れたことがきっかけでこうなっているのだから。

その存在を最初に疑うべきだっただろうに・・・。間抜けである。

「・・・知ってるの？」

「知ってるも何も、元の世界にいた時もおなじような物が届いて・

・！」

「つまり、鏡とこの現象は関係してるってこと！？」

綾波が遥香さんに聞いた。すると。

「・・・その通りよ」

ここから、遥香さんの話が始まった。

「今日の昼頃、来客があったの。誰かと思って見てみたら、私達の親戚の加賀見博士だったのよ！」

「加賀見博士？」

「あの、全く新しい発想のレンズを発明したと言う・・・」

「そう、光学の専門家よ。体もボロボロだったから、直ぐに病院に連れて行ったわ」

「え？病院ぐらい自分で・・・あ」

言ってから気が付いた。お金を持っていたても、こちらの人から見

れば鏡文字の偽物。交通機関も何も使えない。僕なんか良かった方なのだ。

「命に別状はないそうだけど、しばらくは療養が必要ね。その博士が、戻り方を教えてくれたわ」

「・・・何？」

僕ら三人は、耳をそばだてた。

「それは、・・・」

あの鏡に触ることよ」

「・・・それだけ？」

普通。あまりに普通である。だが。

「それだけよ。でも、もう一方のあなたもその鏡・・・もつとも向こうの世界のものだけど・・・に同じタイミングで触れなければならぬ」

「同じタイミングって・・・」

じゃあ、あの時は、向こうの方の僕も、鏡を触ったのだろうか。なんと言う偶然・・・。

「勿論、それだけじゃバクチだから、ちゃんと方法はあるのよ」

「方法？」

「それはね・・・」

そこからの話は長かったが、要するに、僕はちょうど正午（日本標準時での）になった時に触れば良いのである。

「・・・なるほど」

「それにしても凄いわね、その博士」
惣流が感心した。

「え？」

「こんな事態も想定して、『待ち合わせ時間』とかを書いたメモをあつちの世界に残してあるなんて」

全くである。

「でも、これで安心ね」

「？」

「これで無事に、帰れるんだから」

そう言う彼女の声が、少し寂しげに聞こえた。

五

そして、次の日。

「・・・これで準備は万端ね」

そう言う彼女の周りには、最初に来た時の服装のままの僕と、見送りに来た綾波・遥香さんと、そしてなぜか押し入れに入っていた例の姿見があった。

「・・・あの」

「何？」

「何か、鏡文字な物持って帰ってもいいかな？」

「いいけど・・・何にするの？」

「えっと・・・あ。ちよつと待ってて・・・」

僕が手に取ったのは、古新聞の山の下の方にあった一昨昨日けふけふの新
聞だった。

「新聞？・・・何か普通ね。別にいいけど」

「どうして新聞なの？『鏡文字』の文章なら幾らでも書いてあげるのに・・・」

「いや。自分がこつちの世界に来た日の記念になるし、それに・・・」

「それに？」

「元の世界と違って、ネルフがゲーム制作会社になってるって、面白いなって」

そのことを知ったのは、初めてこつちの「新聞」を読んだ時だろ
うか。ロボット系のゲームで有名だと言う。・・・平和だなあ。

「それを言ったら、碇君の方の世界の方が面白いじゃん。だってエ

ヴァとか言うロボットに乗って格闘出来るんでしょ!？」

「・・・そんなに目を輝かせて言いますか、綾波。

「まあそうだったけど、ね・・・。そろそろかな・・・遥香さん、後何分？」

「電波時計によると、この言葉を言い終わる時点で残り2分丁度ね」
「2分か・・・」

同じタイミング。言うのは簡単だが、実行するのは中々に困難だ。
「12時ジャストになった瞬間に触れている」ルールだそうだが、
・・・大丈夫なのだろうか？

秒針単位で時計を眺めていると、惣流が囁いてきた。

「ねえシンジ」

「・・・何」

「ちよつとだけ、目、つぶつてて」

・・・何だろう。さすがに同じ失敗は二度としないだろうが、今度は頬かな・・・。

半分緊張、半分期待で目をつぶった。・・・数秒後。
オデコに強烈な痛みが襲う！

「痛っ!!」

「あははっ。何を期待してたのよっ」

痛みの感触と彼女の手を見る限り、明らかにデコピンである。

「ちよつ、アスカ・・・!」

「怒ってる場合じゃないわよ。あと20秒」
「えっ」

慌てて時計を見る。本当だ。後少ししか無い。

「それじゃ、行ってらっしゃい」

「また来てね!」

「・・・無事で」

三人の声を一通り聞いて、僕はこう返した。

「・・・うん!」

そうして、僕は鏡に手を触れた。

一瞬だった。鏡の面が光り、そして・・・僕は元の世界に戻ってきた。

そこから先は何だろう。待ち構えていた木村さんに飛びつかれたり、何故か遥香さん（元の世界の方）がそれを引っぺがそうしたり、それを惣流・鈴原・相田がため息混じりに眺めていたり。

その後はパーティーであつた。食つた。食いまくつた。当然である。今まで、アメ以外ろくに食べていないのだから。このまま商店街の大食い選手権に出ていたら、ひよつとして優勝していたのかもしれない。

その後はとにかく本が読みたかつた。鏡文字などではない、ちゃんとした本を（特に教科書）。本片手に遊んでいたら、いつの間にか夕方である。友人達は、それぞれの家に帰っていった。

家の中には、僕と惣流の二人になった。

彼女の顔を見る。すると、即座に、「顔を背けるべき」と言う作用が発生した。

「あんた一体どうしたのよ。説明しなさいよ」

彼女の追撃が始まつた。が、僕は顔を合わせようとしない。

いや、出来ないのだ。なぜなら、あのことが思い出されるからである。

向こうの世界に行っていた時の、鏡の方の惣流にベタベタされた記憶が。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

・・・ただし、いわゆる「うま味調味料」の場合、グルタミン酸ナトリウムなどに光学異性体が存在するのでアウトである。

第十六話 鏡の中の君と僕（帰還編）（後書き）

・・・やっと三部作書き終わった。次は特別編にしよう・・・。
などとダレている訳には行きませんね。気は強く持たねば。
次話もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5765e/>

影山部長の数学講座

2010年10月10日10時17分発行